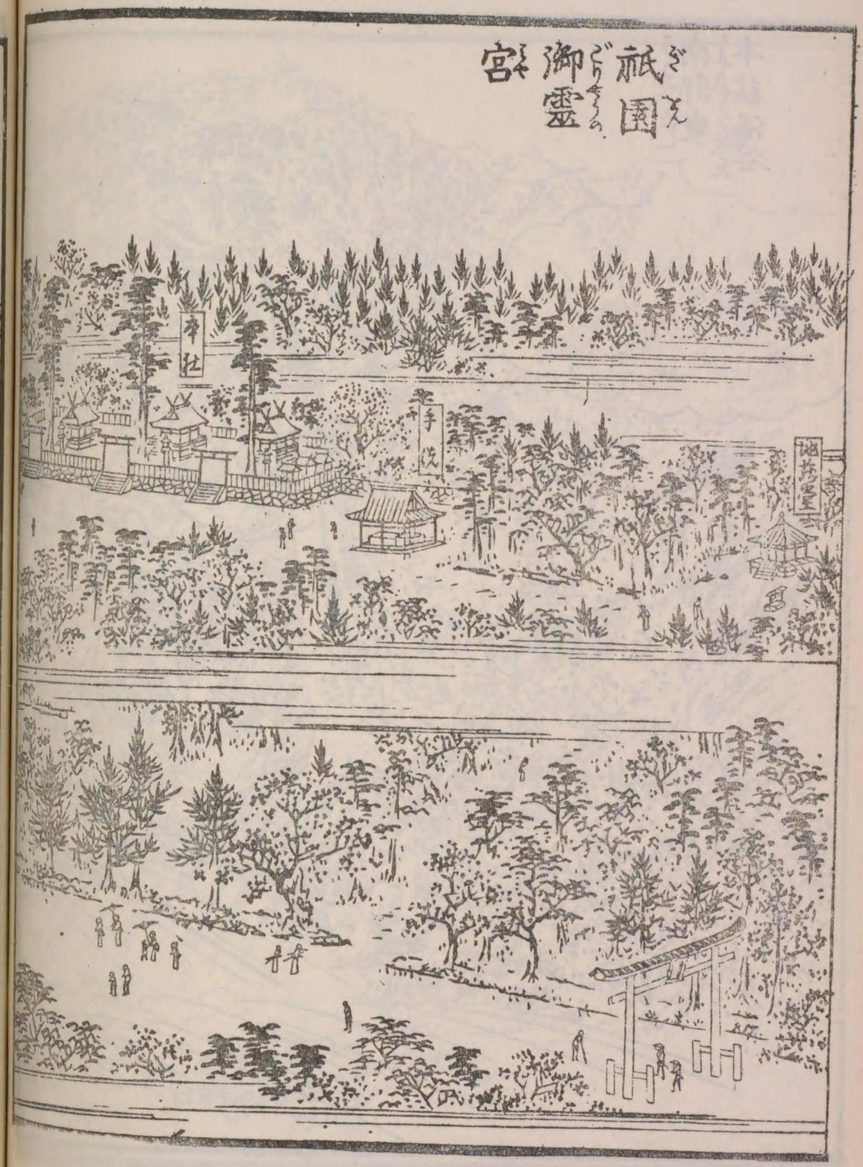
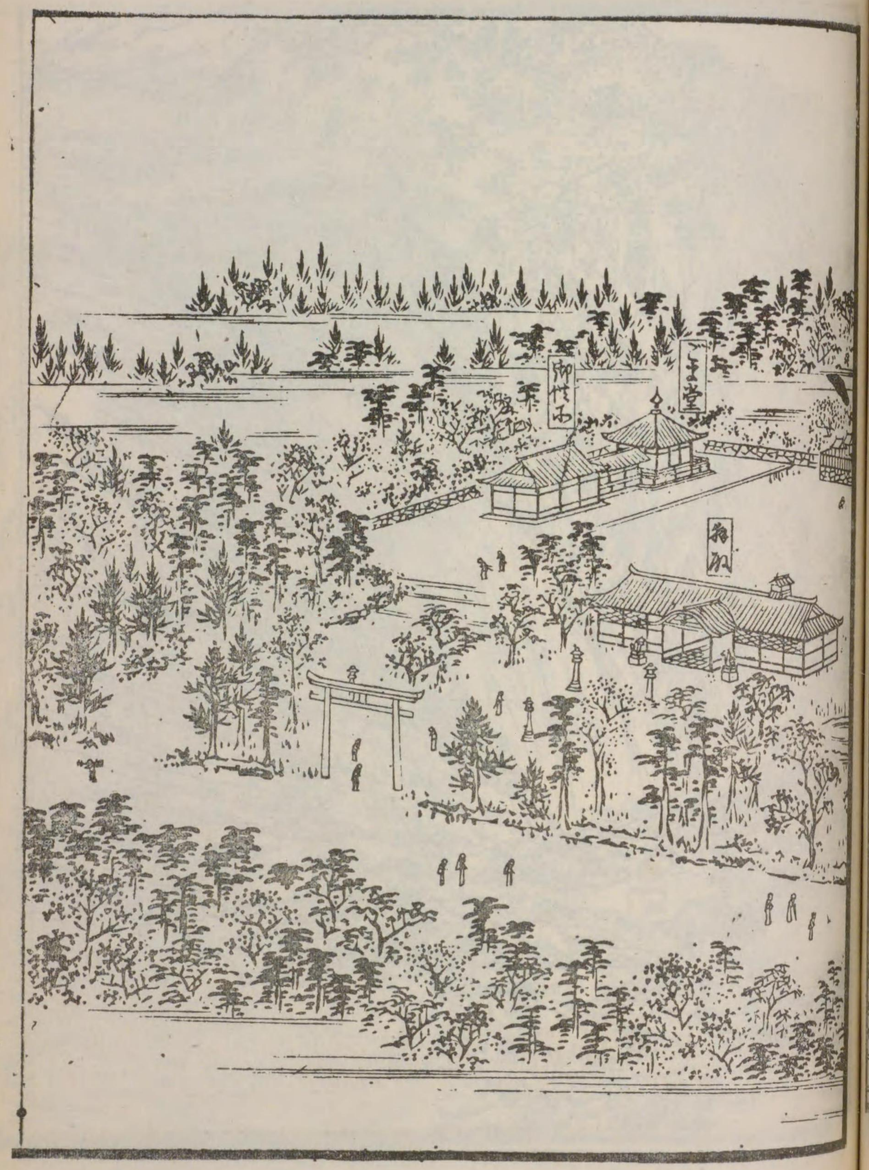
南部東滝谷本荘

祇園御霊宮





南部川
裏の滝
三寸美

沈沈小野氏野辺迄弥六慶来と又
候て村民おそ〳〵と出ける中に
瓜渓 西本元村の百六町許にて渓のロおふ
産物薫石 名所図会に古城谷と二ヵ所あり
渓北石を出す。或ハ古屋谷の産と云ふ
ども山峰峡そばそだつ多く出ざれ
ども若寺慈石状あり
ぬ事ハ把況ふべし一つなり

渓琴山房詩

林谷山人余奮交也乙未冬日邂逅浪華市樓
歸南紀寓浅浦之古碧樓者數月今茲二月將
歸東都余蠖仏渓石數枚且係以七言長句
山人不談上古事雲飛煙滅五千年山人不談今時事
浮名世利太紛紜醉郷之外更何有一條只餘山水縁
天下山水無不遊青牛白鹿見羣仙一日蒼天風吹巾幘
飄々神得萬峰碧行李蕭然殊不俗一擔清玩竹與石
竹兄石弟共無恙喚作山水同遊客熊城秋雨馬関風
幾處驚愁對渠酌我是十年舊相識漫浦春風四五株
千山萬水相携歸浅浦春風来往
悵無玉斧修瑤臺贈以仏像渓石數拳山人愛石如趙璧
謝云従此去開左安石排竹築園宅笑指芙蓉跨鶴歸
別後風流可得聞他時對石若相憶彷彿佛名七十二峰雲

南郊川卿

八ケ村〳〵ありて南郊川の上流〳〵ありて渓谷挟流して一線れ道を通次
天すれ〳〵多地〳〵川こそひて

南郊川 上流こゝにて流村と称ス
七人此ところにて二ツに別ル

南郊川源名之内山峰より発し狩川木之川神
野川等を東より来り市野川の二流小より来
て流水此小渓合ゝて瀧となり巌を穿ちて奔ち
甚殷雷震ハ如く寒気凛〳〵として
観者驚倒ス

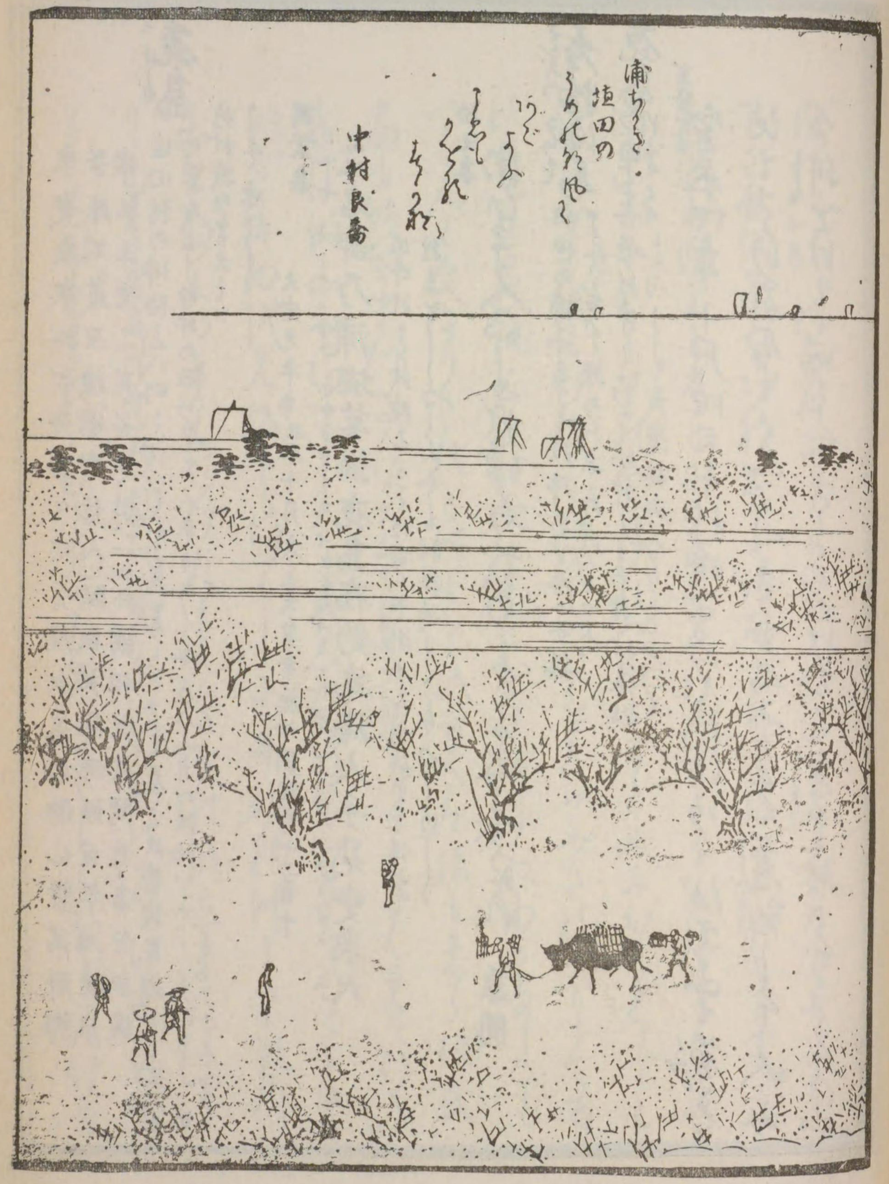
河和惣大明神社 旧村ニつゞて祀ル所なれバ
氏寛明神社 名之内村の小社山峰にて南面年婆訶林
墓所 伊作田迄
○埴田梅林 往昔ハ一村らく林ありしと
又ハ梅千本ありしと

松屋遺稿

朝々振衣浴蘭蓀猶侵混濁塵世煩誰識羅浮林下蝶
永抱清香睡黄昏我亦曾摘瓊英去再病梅花萬樹邨
夜冷獨捲皓霞卧自是幽夢屬永竟春風徐々吹吟笻
又踏横斜月明裏十里瑶雲人不見縹緲寒磬薫乾坤
簫聲不下飛天外洞霄只者鶴影翻翠真遥挙素霓秋

野呂隆訓

植田梅林
西田三子麿


浦ちゑ
植田の
中村良喬

来変歳寒孤心存霏々瑤骨濺衣落已醉仙漿萬斛樽
芳縁不盡互披襟甫信人間白衣尊便願百年酒醒日
倶朝玉皇上崑崙為斟一杯竊相祝枝間青鳥矢勿諼

鹿島（かしま）

塩田村の坤海上八町にあり寺最黒くとして最上の藪樹翁然としてこの東をなし明神の社あるにて人家をなし毎年八九月の頃鈞をさらしもれるし此

鈞れ樹の美大にして味よし

萬葉集　大宝元年辛丑冬十月太上天皇幸紀伊國時哥十三首中

三名部乃浦塩莫満鹿島在釣為海人乎見變来六

此哥れ今の浅按ずるに往古の干潮にまで有如より漸々に往来せしならん今も羽根崎よりはいと近し

拾玉集

潮ひる事人はかしまの浦といふ浪のよるこそみるべかりけれ　慈圓

産物海馬（さんぶつかいば）

此辺の浦に多し妊婦氏を掌に握りて産を除めば安産なりといふ

鹿島明神社

鈞れ中にあり紀神にて名津玉座鈞と同しく武甕槌命なりといへり

重賢記云

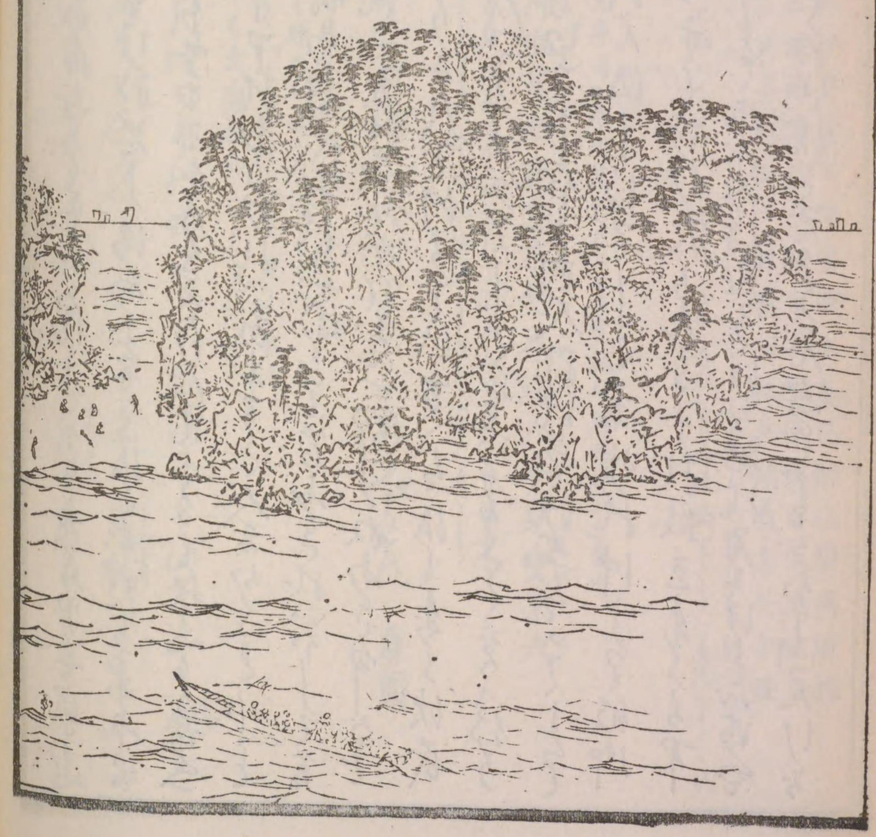
宝永四年十月四日年れ時さかり波濤あらびて山も蜀も地もさけ家居もくつがへるかと思ふまでく震動して人みな奸とけしあるにてさらさけるに急ぎ波よせさして山

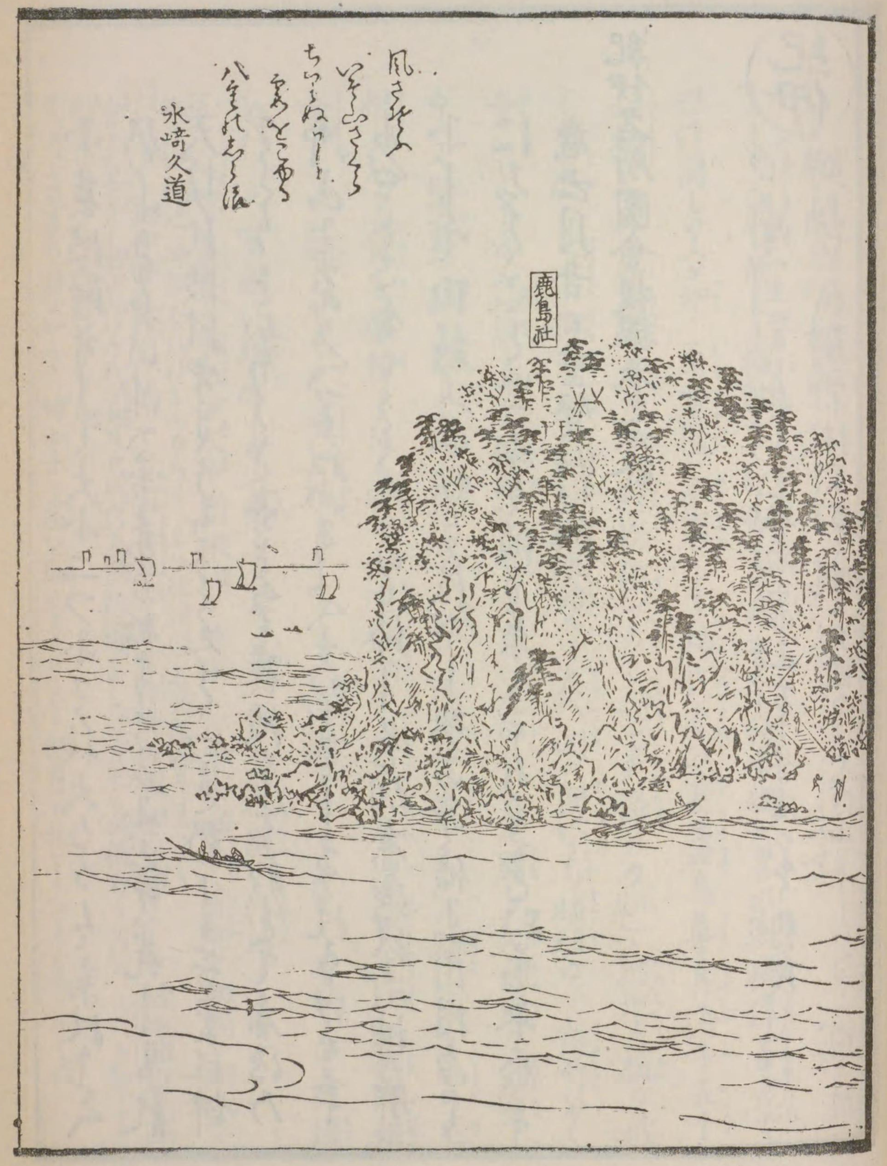
内村（有鈴川の西小巻）れ家居ありしかなり老若男女氏あ
りさ母我尽くあり所忍し海面よりとる浪こそたち来りて
是逃よ遁よとなくにをめきさけびてとるものもとりあへ
ず山邊にはしりれ我もまた人におくまじと
我宝など我も打捨て打れ山へ覚り笞ぶされいかして苦
れ道に茅れ枕こ夜四夜だかりおきゆしねあさ身など
いたんも又なりされど河より氏方へ浪も来る次民
家もあやまりなりしこれにありかたく覚し給ひ
あれ彼山にありしかと或人れ語りけるにてよりて
我ら海面我尺後し給りしに庫給れ沖より彼御
山をみつ上つ事もあげたらんこるされ彼立来るる中
に白く家にして妙なれ光をける物れ見てけるバあや
しと同もたれ浪とみるうみ志をしらかどみけな

南部鹿嶌神社

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

熊代繁里





[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

氷崎久道

小其波沖にして大小二つに立れ大なるを東れとく
小きを比浦へ寄来り彼ところにおいて光しも此れ
大なれ波れ中まうちうゝみゝつまり行しに若宮れ沖
まゝりとおわしゝ不よりも其波をもれもて康保乃
御山に荒うくつてね、いましくもかうもしなれてける事
みやとこ有やうくうさも修し些行康保れ御神躰
不して預ら不なとのれべし极古往彼山内村乃くし
にあらくこと星みて波も来らざるなりと下 晷宝永五戊子
歳六月吉日重賢 本居康修 仕て誌む

紀伊名所圖會後編巻之六終

（紀伊）

紀伊國ハ上管七郡にして東南西の三方ハ蒼海めぐり北ハ峩々たる山岳
魚鳥および薪柴材木多く頗る大國なり尤深山多しいくじも南方に百

なる故に風土暖氣多し
古書にハ木爲とし後改めて紀伊とハ唯貴と讀て伊を略ハ則摂津を略して
摂津國といふが如し原當國ハ木國にて神代巻に素戔嗚尊其御子五十
猛神をつれて新羅に至りの時樹種を多く持て天降りの後彼地にハ植ゑ
しで悉く日本に持かへり終に筑紫より始めて大八洲の國にみち播殖のいさを所なく
青山となしの此故に五十猛神を称して有功の神とある則ち紀伊國に鎮坐し
の又鬚髯を抜て散しのべば杉となり胸の毛を抜て散しのべば檜となる尻の毛
被となり眉毛櫲樟となる時に五十猛神の妹と大屋津姫命次と抓津姫
命といふ三神ともに木種を施しのことも當國にまつりして木にゆゑある國
なれバここに當國に鎮座しのこと是によりて其そのの木國と称ゆるや。
五十猛神ハ當國名草郡伊太祁曽神社の神体にて大屋津姫命ハ同郡宇田森に神社あり
抓津姫神社ハ同郡吉礼村にあり委しくハ紀伊国名所図會を見つゝ
尤足より紀伊國の領にいりて名所旧跡古事古詠来由縁起の類ひすべて紀伊國名所圖
會に委しく出されバあれと贅せれたゞ順礼道すじの光景と此彼あるの錦うなるてハ
彼書と同しと其容あるを知るべし
又所々風景の図とかうらハ婦女子の屈を賑さるもの亘て彼書に拠まるべきものなるけれ

長島
二江
荷坂嶺
是より紀伊國
牟婁郡ト号ス

熊野詣云南海ノ辺ハ
常ニ暖氣也故ニ無漏郡
ト云 宦字通音
萬葉集
紀伊國之室之江
辺爾千年爾障事
無萬世爾 下畧

平山

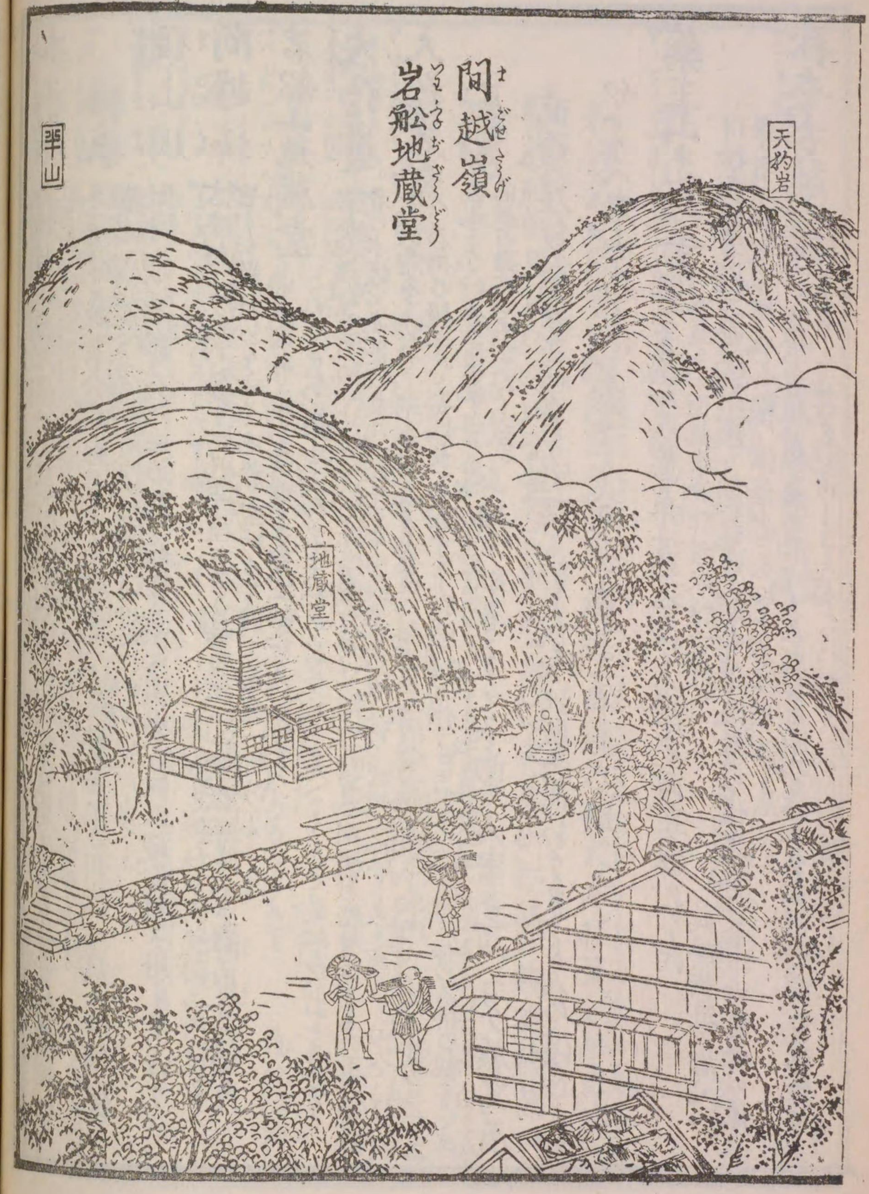
熊野の名義

熊野山畧縁起曰人王第一神武天皇卅一年辛卯高倉下尊自天盤舟ニ乗テ
斯秋津嶋ヲ回リノ一ト云ハ是ハ紀州ノ南郊ニ至リノ一時大ナル熊ノ其長丈
余ニシテ金色ノ光ヲ放チ無量ノ奇瑞光中ニ現レシカバ尊斯示現ヲ拝シ天告ト
兼テ夢ノ霊夢ヲ感ト神蔵ノ宝剱ヲ得タリ是ヲ以テ國中ノ邪神ヲ伏セシメ
ニ合ヒシカバ安ンドノ一今ノ神蔵ハ其霊地ナリ熊野ノ名ハ斯時ニ始ルト云
按ニ古事紀神倭伊波礼毗古命従其地紀伊國男水門廻幸到熊野村ノ時大熊
髪出入即去ヌト云流布ノ本ニハ如此ナル栂尾山所蔵熊野山縁起ニ古事
紀ノ文ヲ引テハ大熊髪髴出入即去ラクノゴトク有ト雖モ俤髣髴之
尤此熊ノ故事ヲ以テ熊野地名ノ始ト云ヘリ
一所ト血沼和泉茅渟ヨリ男建ヲ一所ト男水門ト言ヒ見ヘタリ全ク
脱文ニテモ有ンカ又熊野山ノ縁起ニ斯ハ記セシ者カ
熊野遊紀曰牟婁者紀之南垂通鼠四島遐壁八東被勢負和炎壌
以窮名山大川錯繍乎其間ニ毛水産殷亮於其中ニ上古未ダ那縄

爲熊野　孝徳帝時定爲牟婁郡有三山曰本宮也新宮也那智也
是曰三熊野實鎮南方　平城帝而降龍駕之幸相繼六世而左著
焉水最大而出自金峰流其下者特揖熊埜川其餘山川村落一被
以熊野而不以牟婁蓋昌熊野之名起乎太古也今皆在于紀之封
内以故　紀公世丁拝云本宮者在熊野川上游東南十里而至那
智又五里至新宮新宮者在熊野川口臨于海焉自紀北循海至新
宮曰大邊地自甲邊城折而左至本宮曰中邊地自高野曰無果越
自伊勢曰八鬼越云
七上池　荷坂峠十八丁下リテ上村ニ入リ街道ノ左ニ二郷渡　二郷村ト是ヲ渡レバ向ヒ長島ノ浦ヘ
長嶋浦　長嶋村ニテ上リ此浦里ニ
此長島ノ浦里ハ海ノ船着リテ萬端ニ便宜ノ地ナルガ故ニ商家旅籠屋
モ原来海濱ナレバ漁師ノ家多ク平日ハ網曳釣ヲトラレテ活業トシ
鼈甲ノ製リテ市ニ出ス殊ニ鼈甲ヲ數多製スルガ故ニ家毎ノ軒ニ針簫ヲ

のぐて鱈の肉を乾し或ハ磨ぢ又ハ削るもいひて往来の左右地方せ処ぞ多く
ゝり諸國ニ於て熊野節と称ふるハ此辺より出るを以因ニ鱈字ハ堅魚の二
字と倉て制せり俗字にて是ニいひ
和漢三才図會曰鱈以堅魚二字為鱈蓋鱈乃鯛大者非是也此魚脯極
堅硬可削用故俗呼曰堅魚云云則堅硬而色赤如松節一故名二鱈節一ト
右堅魚ニいふ名萬葉集ニ出ていと古ゝ延喜式和名抄ニハ堅魚ニいひ或云
堅魚の轉じて即ち乾魚の事もあるを夫ニ通じて生物の名ともしび野ゝ
錦浦 長嶋の東一里ニいひ浦の長サ八九丁許○街道ニハいひ此地ニハ志摩国
後拾遺 名ニそある紀州の属ニ
一石峠 古里坂ともいふ長島ニいひ古里ニ
ゝ間ニいひ行程凡廿六丁余
鋸坂 馬坂ともいふ通急ありて古里ニいひ
三浦峠 長嶋の浦里ニいひ三浦坂ともいふ峠と下つて三浦ニいふ事行程二里許ニいひ
始神坂 三浦ニいひ馬瀬ニいひ間ニいひ凡一里通ニいひ

木戸川 馬瀬村ニいひ鳥居峠村を経て上里村ニ至る上里村の入口ニいひ
杉本 又古本ニも此地八入海の船着ニて人家建つゞきて繁昌あり川岸の堤ニ給郷名の
便山川 観音ニいひ近年尾州の人建る所ありすべて此街道川多ゝ古本村の出端ニいひ平日八歩行ニ
中里川 中里村ニいひ舟津新田
間越坂 古本村ニいひ坂の麓ニて凡半里ぞゝ峠の上下一里ニ城路をくて敷石ニて頗る
難所ニいひ峠ニ地蔵堂ニいひ堂前ニ茶屋一軒ニいひ
岩舩山地蔵堂 間越の峠ニいひ堂前ニ茶屋一軒ニいひ
これニいひ五の峯ニ天狗岩天狗の岩屋ニいひ是ニいひて尾鷲ニ出る道ニいひ
天狗巌 岩舩地蔵堂の左の山上ニいひ峠ニいひ凡六丁ぞゝ尾鷲ニ出る道ニいひ
者の木像を安置ス長凡一尺三寸斗ニ。此地街道ニハいひ廻て尾鷲ニ出る之道ニいひ
天狗岩窟 天狗岩ニいひ下十二丁斗下ニいひ岩屋の奥行凡二間余高二間半余内ニ九尺ニ二間の堂ニ立
石佛の観音を安ス長一尺五寸斗弘法大師の作と云石屋の左右ニ弁三体の石佛の観音ニ立
尾鷲島 古本ニいひ行程一里半 此地も舩
間越の難所ニ下つゝニ至る
煮賣屋 舩着ニて工高の人家ニ立列ニいひ旅舎屋
ゝんど多ニいひて近隣ニもゝ
ゝく八鬼山ニかゝる法 尾鷲ニいひ八鬼山の
薬王山光林寺 尾鷲北村の西中井村の北ニいひ禅宗ニ同基詳ニあゝず
本尊十一面観世音作者未詳古佛ニ
此地八街道の右ニ入ニ
什物大般若経一部法花経ニも弘法大師の筆ニ伝繋の像恩恭の筆十二善神の像
筆者不知ゝ名勝畧誌ニ見ゝゝ
松本古跡 尾鷲島の庄大曽根村の東南七八丁九鬼村の西北ニいひ中古行野浦の民屋ニ
此所ニいひて其名ニいひ今八行野ニいひ街道ニいひ



間越嶺
岩船地蔵堂

此地八紀陽勝仙法を修し一熊野山の松本の嶺うそ磐山の雀両友と逢て談話して去つゝ元亨釈書に云つる八此地なりとぞ 名勝畧誌大意

中川　尾鷲うり矢の濱うくる
間一町ばかり舟にてわたる

矢根川　矢の浜村の向ふ八鬼山の麓うり
上り五十丁下り四十五丁山路嶮岨にして至つて難所なり地上に多く石を敷て道とす堅固なるつづら坂曲もありを以て杖をつき過つゝ八必ずころび轉倒ぬ下ゝを慎むべし

八鬼山
八鬼山の嶺うゝ一丁此方うり

日輪寺

水尊　二寶荒神
長二尺五寸　脇摺　阿弥陀佛　觀世音　薬師如来共、弘法大師作

右堂うるじて茶呼うり餅を商ふ俗う荒神茶屋うゝ左峠うゝ八人家あり一此所ゝて休らふべし

此呼うり尾鷲うり此所ゝて十五丁是うり

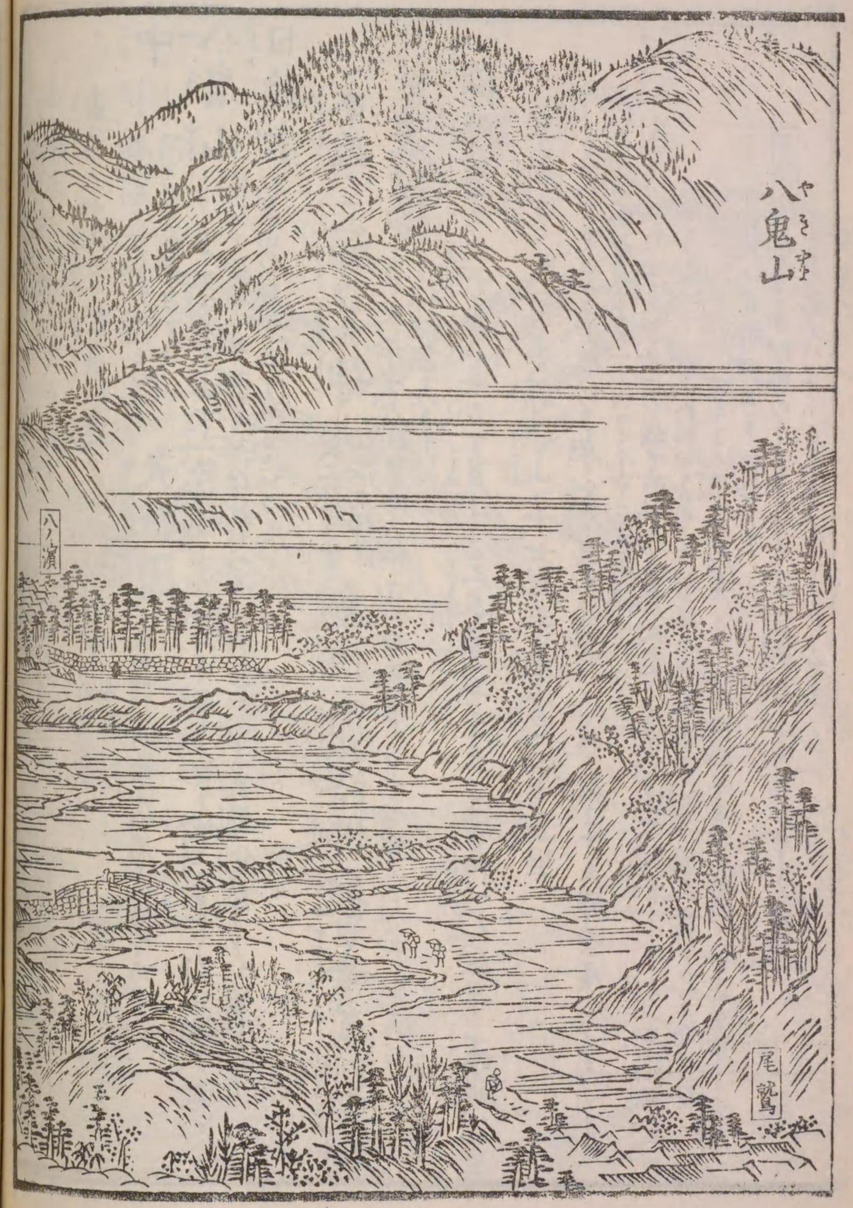
二木浦　七十五丁曽根へ二里半二木嶋へ四里半新宮へ十二里半那智山へ十七里半本宮へ二十五里

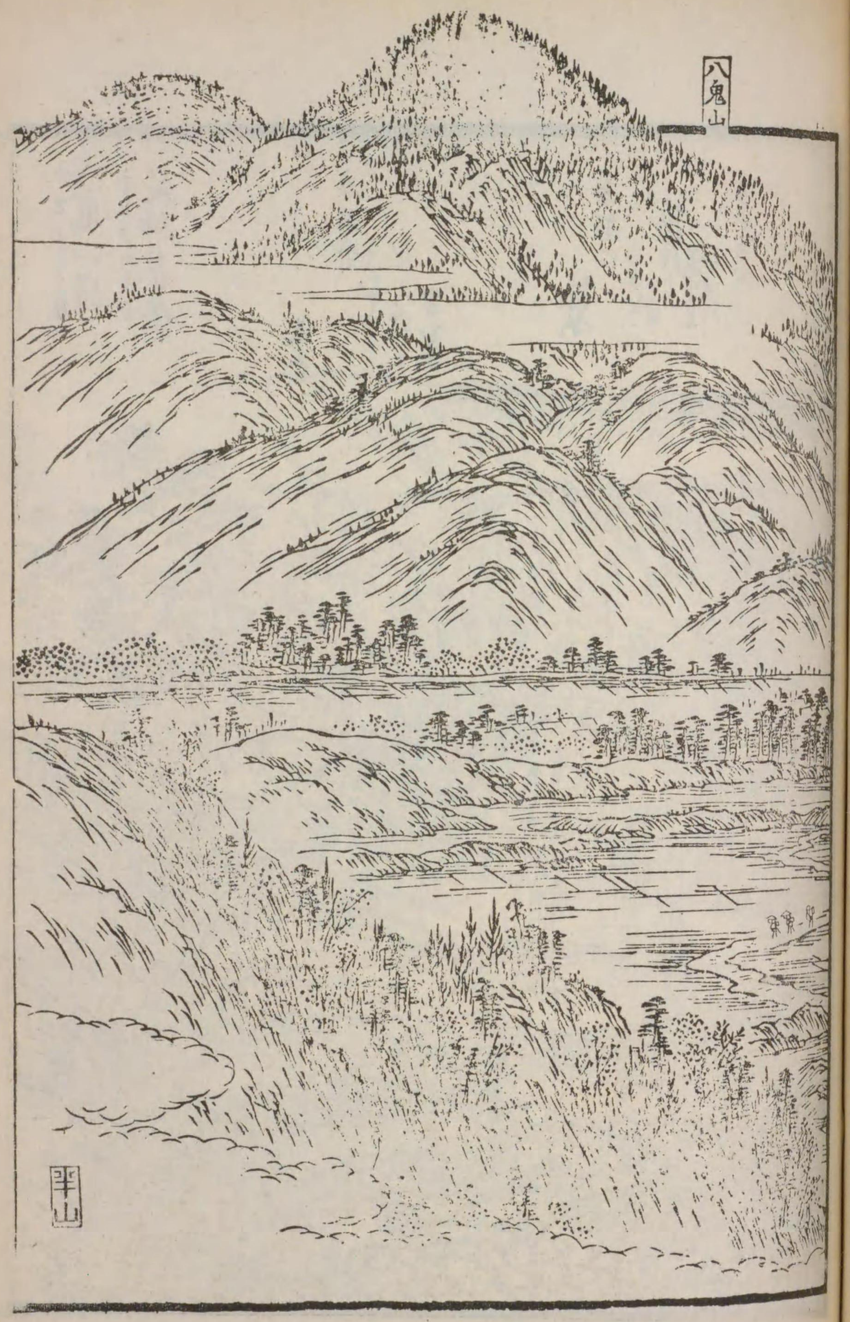
八丁下つて茶屋うり亭主を重五郎といふを以て俗う十五郎茶屋うゝともいふ

又此二木の浦うり魯根うくる入海一里の船着うゝて高家坂駕屋餅を商ふ右茶屋うり三十六丁うゝて二木の浦うゝ二木里うくるも八海の船着うゝて高家坂駕屋地うゝて二木里うくるも八海の船着うゝて高家坂駕屋

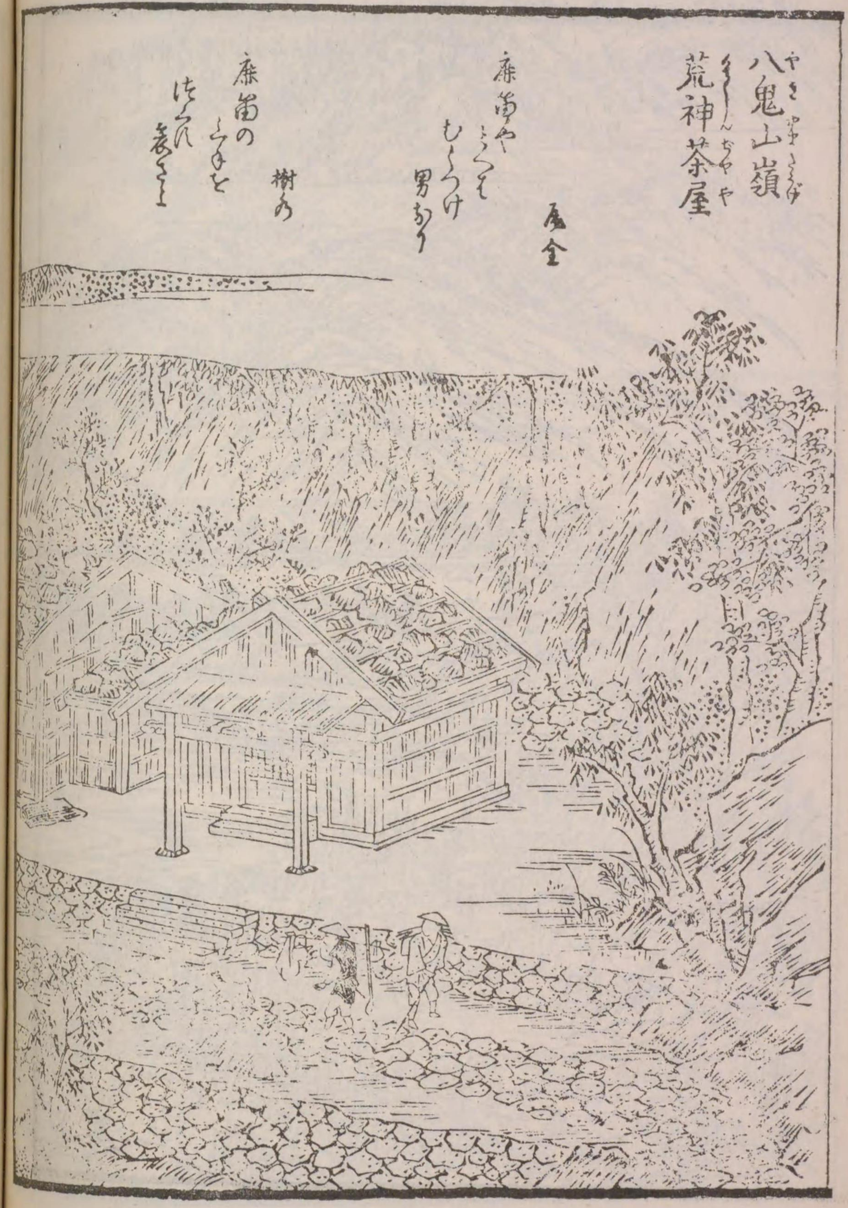
二木浦八鬼山を下つて名柄村を経て此地うゝ是うり曽根うくる山路二里其中間う留村うくる浦里うり是うり曽根うくる山路二里其中間う留村うくる浦里うり

又此二木の浦うり魯根うくる入海一里の舟うゝて有陸路二里の山道を一里の渡うゝて容易うゝ至つて辨理うゝて呼請引うゝ絃のごとくうくるに二木島うゝのさゝうり浦人の新宮うり伊勢のうゝとうくるにさかゝ八十せんもうくるをしびしせて


八鬼山
八ノ濱
尾鷲


八鬼山
平山

八鬼山嶺
荒神茶屋



八鬼山嶺三十八丁
下りて一軒家あり
十五郎茶屋ト云

年經たる浦のあま人みしこれん波をかづけて幾よるこれ　西行

黒髪はあるとみしこれ白波をかづきしてたる身にハ知海人　同

右三木島浦ハ元ハ志摩の國なりしと言へり今紀州に属ハ名勝畧誌に見へたり

曾根浦　三木浦より此地にいたる舟着にして賑ハしき所之

是より二木島にいたる行程凡一里八丁許あり

甫母峠　俗に曾根太郎坂曾根次良坂といふ尤坂二ツあるにハあらず峠より村の領分をもつ故に斯ハいふ之實ハ曾根の自領曾根の他領といひしを得しなり

又此峠を甫母峠といふハ此山下に甫母の浦といふる浦里ありて此峠より甫母の領分なり則ち他領といふハ此甫母の事之且峠に茶屋一軒ありて俗にホウチ茶屋といふ是又甫母地茶屋の轉語之

此坂路を経て三木島の浦に下る道いたつて難所なり

楯ヶ崎　甫母の浦の東南十八丁許にあり高五十間廻九十間許ありト云尤街道にハあらず

土人云此地むかしハ伊勢紀伊の國境なりしとぞ

家集

うつ波にみちくる海のたゝかを楯が崎とハいつまぞみたる　増基法師

二木島浦　甫母峠を下りて此にいたる入海の舟着にて繁昌の地なり村中に川あり

愛川といふ

最明寺　二木嶋村にあり禅宗之傳云北條時頼創建なりしとぞ

本尊阿弥陀佛を安に聖徳太子の作と聞き

英虞子明神社　二木島村にあり愛川の橋の東之

牟婁子明神社　同川の西にあり此愛川の橋ハ則ち街道之

或云此二木島ハ往昔志摩と紀伊との境にして此愛川の東ハ志州英虞郡之

又橋より西ハ紀州牟婁郡なり故に今尚川の東英虞子神社なり川の西ハ
牟婁子神社なり是その證なりとぞ
按に延喜式神祇四瀧原宮一座　太神遥宮在伊勢與志摩境山中云々
今ハ此地勢州度會郡に属はしいへども往古ハ此瀧原宮の辺よりして志州の領之
しもしるべし然るハ此二木島まで志摩の國なりしといへるも附合せり且楯ヶ
崎を以て勢紀の界なりしといへるも疑ふらくハ志摩の國界なるべし後人尚考ふべし

相神坂　或ハ大亀坂狼坂ともいふ上下一里あれより新麻村にいたる
二木嶋より新麻まで行程凡二里余

德司明神社　新麻村の出端を街道の右の傍なり
此地より波田須村にいたる間凡一里許小坂あり

大吹峠　大引峠とも波田須村にあり峠に茶屋一軒あり傍に西行の松といへる廣太の老杢あり
是より大泊村にいたるまでなり大泊まで凡一里此間道あし

比音山清水寺　大泊村の北十丁ばかり山上にあり
寺の南三丁ばかり山の半腹に瀧あり高三十間ばかり有

本尊　千手觀世音菩薩　岩窟觀音　本堂の後にあり岩窟の中に
岡浮檀金の觀音を藏むト云

緑起云
抑南紀與熊野大泊比音山清水寺の草創を委く尋るに人王五十一代
平城天皇の御宇に當つて諸國在し鬼神魔王蜂起して国土殘なやまし

西行松

宇治御百首
なし引ぬきと
なるれ嶺に
せる
松を
千とせ
乃
久しき
為経

平山

人民を殺害仕候ニ付て諸國より奏聞珠ニ喜一奈良も帝王數代思召して
坂上田村麻呂ニ將軍の宣旨を下しあひ勢州鈴鹿ニ發向ひらて東夷を退治し
南當の悪魔を鎮めらせ今の八鬼山九鬼二鬼是を然らぐも鬼賊ら
討ぬて深山幽谷ニ飛行其在所さ見定ひ一の高山ひら將軍是よりも
登り一心ニ觀音の御名を唱へ奉ら立烏帽子着ら天女忽然ひらわれ告て曰く
是ら南の海辺ニ岩屋ひり悪魔ら籠れり行て討ぬ伊勢の海熊野比與の
末ぞも大悪の弓ニ悪魔退ぞく我ハ是よりひらり大馬權現ら白馬ら乗ひて
西天ニ飛入の立烏帽子着ら天女下足ニ所も烏帽子山ニ申傳ふるり將軍急ぎ
甲冑を帯ニ士卒ニ卒一数多の兵船を浮べ鬼の城廓ニ漕ふせら彼地乃
躰を見のふニ岩石ひて屋根ふりニ方八巖栽をニ聳へ海水磯を穿ち人便を
失ニ時ニ不思儀や沖ら嶋の上ニ童子一人ひらわれ出招ぬの人ニ奇異の思を
也兵船ひり彼島ニ漕ふせ礼拜恭敬ひ時ニ童子手ニ拳て舞踊ニ軍勢も
偏ニ舞遊ぶ鬼神是ニ奪ひ岩屋の扉を開ニ所ニ大悪の尸ニ

神通の矢ニ貫ぬて鬼神を易ニ七匹の尸ニ此島ニ鬼見ら嶋ニ申ふニ此嶋の
上ら童子ハ忽ち光を放ち北嶺の雲ニ飛去の則ち尋ひ登ひて見るふ一丈四
面の巌其中圓ニ洞穴ひり紫雲空ニたなびき異香四方ニ薫び法性無漏の浄
境ふり田村麻呂幼稚ひら守ニ奉ニ一寸八分の閻浮擅金の千手の尊像ニ大の
洞ニ納めひ治國平天下ニ祝ひて深く封じの其後天勅ニ受ニ大同四年ニ御建
立國家鎮護の霊場ふ則山城國音羽山ニ似ふんばて比音山清水寺ニ号ニ鬼神の
むくろハ井上村の深谷ニ大鬼摧現ニ崇ら今ニ大ケ丸ニ鬼神ニ退治ニ天下無双の功ニ臣も此尊像の擁護ニらるれば一度
結縁の輩ハ現世安穏ニ遂ニ後世ニ菩提ニ者ニ

金立山青巌寺

大泊村の北の辺ニ在ひ開基未詳
本尊千手阿弥陀佛 聖徳太子の作ニ云ひ

木本峠

大泊村ニ在ひ

清水寺觀世音遥拜所

木の本峠の半腹ニ在ひ前ニ茶屋在ひ

鬼ケ城

木の本峠の左の岬ニ在ひ清水寺の縁起ニ云ふ所ふ峠ニ見ニ所ふ船ニ乗ひて見ニ
すべて岩屋の高サ波打際ニ在ひ凡二丈五尺余上ひ百疊も敷ニ廣ニ地ニ在ひ又八尺

ぐらり上に二十疊ぐらりの平地ありて岩巖あれば上下周ともに磐石あり奇とすべし
いつさぬいくしへ夷賊のともがら蟄住し事もありなんと覚ゆ

鷹見ゲ島　木の本峠より左の沖の方に見ゆる巨巖二方に峙つ清水寺の縁起に見へたり

木本湊　峠を下りて此地にいたる東南をうけたる便宜の舟着なるゆへに職家高家旅駕屋漁師あんど打ゆずりて人家しバく建つらあり萬端に足りて豊饒なり

井土川　木の本の町をづれより二丁許にあり海際の川にして波あらぬ時は飛ふし引汐の間を見合せ通るなり

七里濱　木の本の町をづれより百数十丁の間をいふ俗に七里の御濱といふ

此濱は木本の湊より新宮にいたる街道にして右の方は並木の松原百数十丁連り左は東南の滄海渺々として白浪磯に打よせ向ふに新宮の岬を見るこし奥を走る大舟釣する海士の小船などの風景言語に絶ぬ實に旅中第一の景地といふ此濱辺は一圓に碁石めたるにして余の石を見ることは則ち那智黒と称するものなり左は大小相交り色青ぬあり黒ぬあり又清く麗しぬ事磨き礱たるが如く其形ち一として圓くして平なるなるは故に此近辺の人家の庭などには此石を多く布用ゆるを風とぬ是當國の名産にして本朝名石の一なり

阿呼両巖　七里が濱井土川の向ふにあり高サ凡十七八間の巨巖にして則ち二ツあり此間に大馬権現へ系詣の道あり故に権現の二王石ともいへり

木本湊

木本の町は近隣にあらびるれ繁花にて
子は海邊あるが故に
魚類多なり長大なる
鯨を射にあらべて事へ
京は彼にありて志殊に
あらる所容をとる人あり
御乃市にあつて
此地に限まり

大馬権現社 井出村の西北十里許山中にあり。社の北北同ぐらゐに滝あり高サ二十丈ぐらゐ。街道の右の山の麓

花之窟 七里が渓の内有馬村より往還の道の右の傍にあり。巌の高サ凡廿四五間周廻凡二丁許此巌の前に玉垣ありて正中に幣を立てり

此窟ハ日本紀に所謂伊弉冊尊を葬り奉る所ありてそ例年此巨巌の上より濱松の枝に注連縄を引渡しと縄を以て旗を作り是を懸る祭礼ハ二月十月廿三日にして神官ならび村中の男女花を備ふること恰も岳のごとし是神代より此風俗の故と花の窟ともいふ

花の窟 右窟と称する巌岩の類ひこれ多し只高サ廿四五丈ばかりの巨巌より抜き巌岩ハ同字なり

巌を大なる磐とするハ非なり又完居するを窟とし洞とするハ非なり和漢三才図会

されハ此花の窟ハ是ホの類ひにして大磐石ならべ紀とのうち則ち此磐を以て御屋と崇むれハ磐屋と称するもさらん又別に窟の口ありやもまたべし

日本紀曰

伊弉冊尊生ム火神時被灼而神去矣故葬於紀伊國熊野有馬村

焉土俗祭此神之縄者花時ハ以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭

公能 右有馬村ハ則當此ム

久安花

紀ホやみるる村ハまた非のごと向る

夫木

神ぞする色の時もやかわらんみるる乃村ハかくもふるく

光俊 同

春風ハ捲さらねど紀ホや有馬ハ村ハよく人もしる

西行 みるるのゝ御濱にまつる名ハ花の

王子岩屋 花の岩屋ホ動ム是も巌の前に玉垣と結込内に幣を立る此所ハ火神軻遇突智と葬る地云伊弉冊尊化去る時伊弉諾尊十握の劒もて軻遇突智を斬るより日本紀に見えたり

日本紀曰至於大神軻遇突智之生也其母伊弉冊尊見焦而化去干時伊弉諾尊恨之曰唯以一兒替我愛之妹者乎則匍匐頭邊匍匐脚辺而哭泣瀉焉其淚墮而為神是即畝丘樹下所居之神磐嵜澤女命矣遂拔所帯十握劒斬軻遇突智為三段此各化成神也云云

有馬浦 同所の浦とゝ

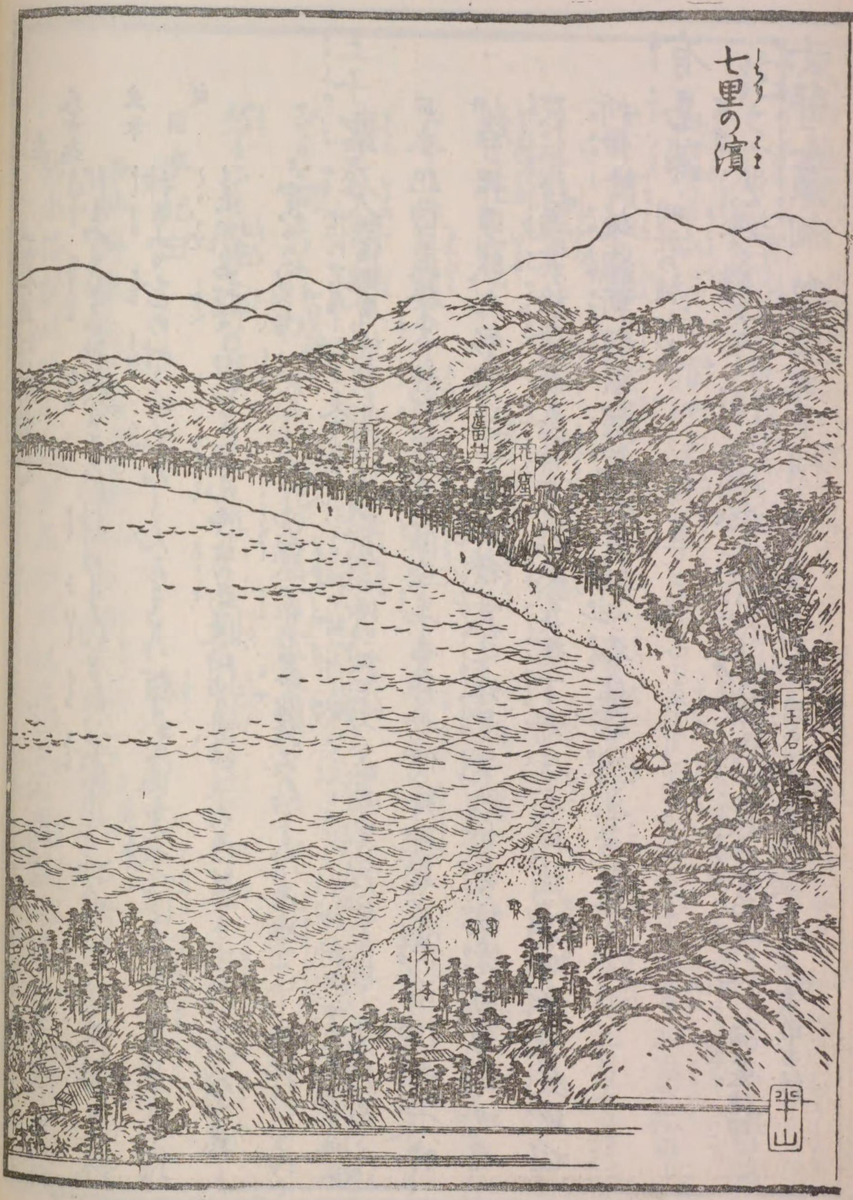
家集

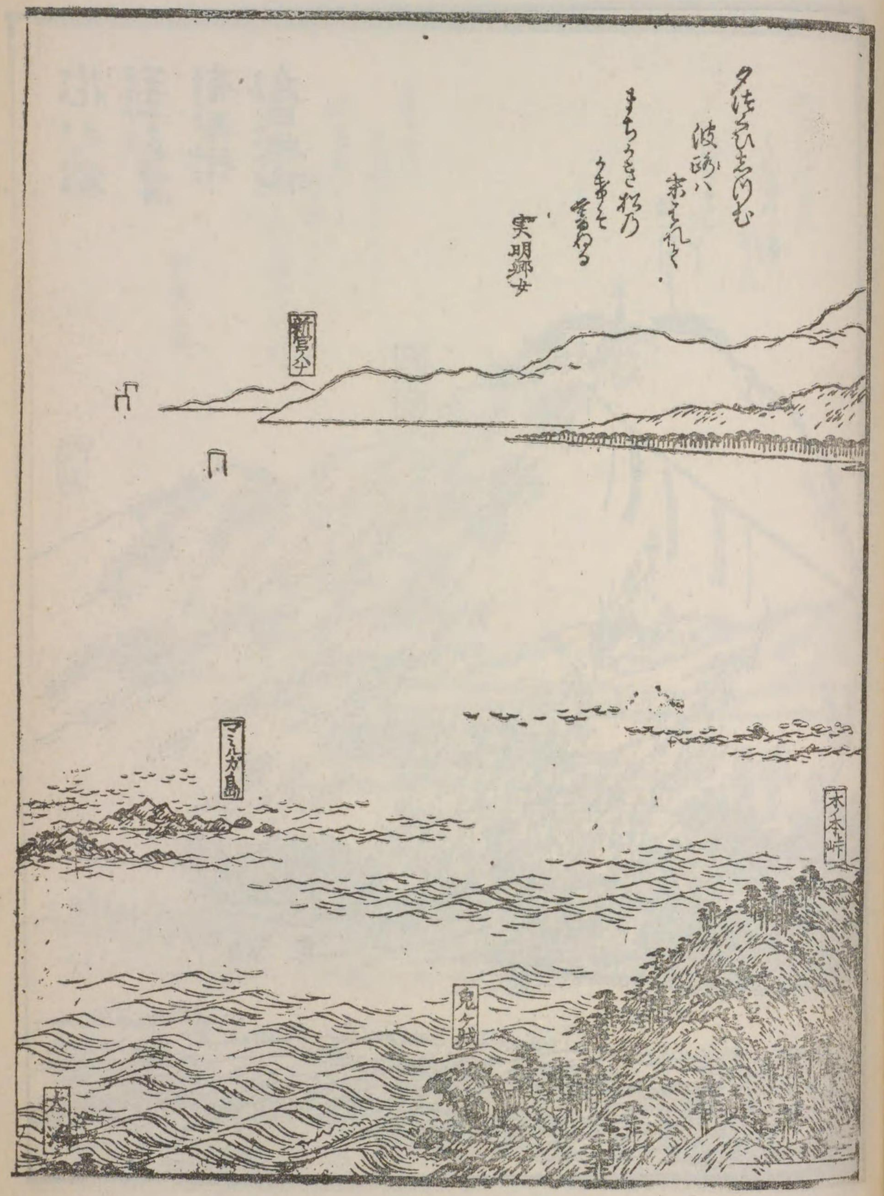
んにけるあるゝ浦の濱風にたゝよひてよる有馬村街道の五傍森の中にあり未曾未詳

増基法師

玄賛二蔵祠 **聖徳太子祠**

七里の濱

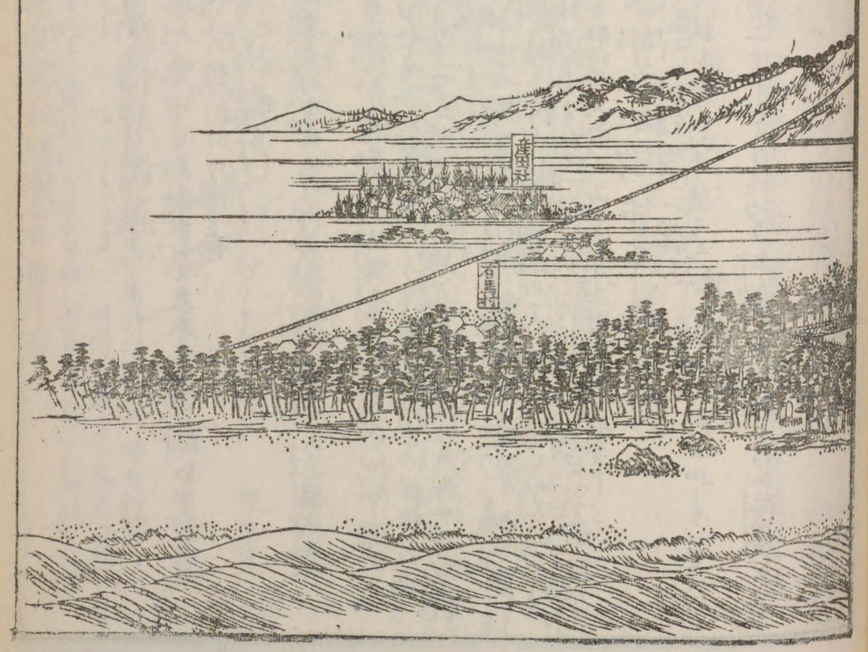




花之窟
王子之窟
有馬村
産田神社

たのむ神もれ
こゝ海の海
ちゝへ
ひきまとけよ
彼此便り
宗良

おきされハ
花村をたゞく
ひさもよし
紀人のまつる
みゝ海の神
賀茂志剛



産田神社　有馬村花の岩屋より十丁ばかり西にあり
當村の生土神なり

本社　祭神二座　伊弉諾尊　伊弉册尊

拜殿　中門　大鳥居　神主森氏の館門外の傍に有

日本紀曰此二神青橿城根尊ニ坐ス　中門の向其余すべて大木の杉の林あり
青橿城根尊ハ天神第六の陰神惶根尊の御事也又の御名吾屋惶根尊又忌橿城尊
又吾屋橿城尊と曰ハ　惶根尊之子也云々

長生山安樂寺　産田の神社の東にあり禪宗臨濟の一派
有馬村の西南十三丁許にあり真言宗
本尊藥師如来　作者不知古佛

東安寺　有馬村より十丁ばかり往て右へ本宮の街道と横ざまに通る道あり

志原川　有馬村より流水此所にて淸道を横ざまに通る道あり
瀕るより若滿ちよりは時渡ることあたハず故に徒歩にて渡る
弱くむるに及ぶときハ右の方へ渡し船あり又前に出せる井土川も是に落ち

市木村　有馬より一里にあり此所より舟にて

阿田和村　一里

湊川　阿田和村にあり此川も云ふ是も海を歩行て渡る

水傳ノ磯　高浪のときハ川上を船にて渡る
街道の左へ入て鵜殿村の東南二十丁ばかりにあり土人水つるの磯と云ふ海端にあり
万葉二　あをによし奈良の都の水傳ふ磯の瀧をも見てしをかむ

夫木　あをによし奈良の都の水傳ふ磯の瀧をも見てしをかむ　衣笠内大臣
器解ニ水傳ノ次枕詞ありと有　紀路哥枕抄　南紀名勝畧誌　紀路名所記ニハ
此地ニハ故ありて出ハ

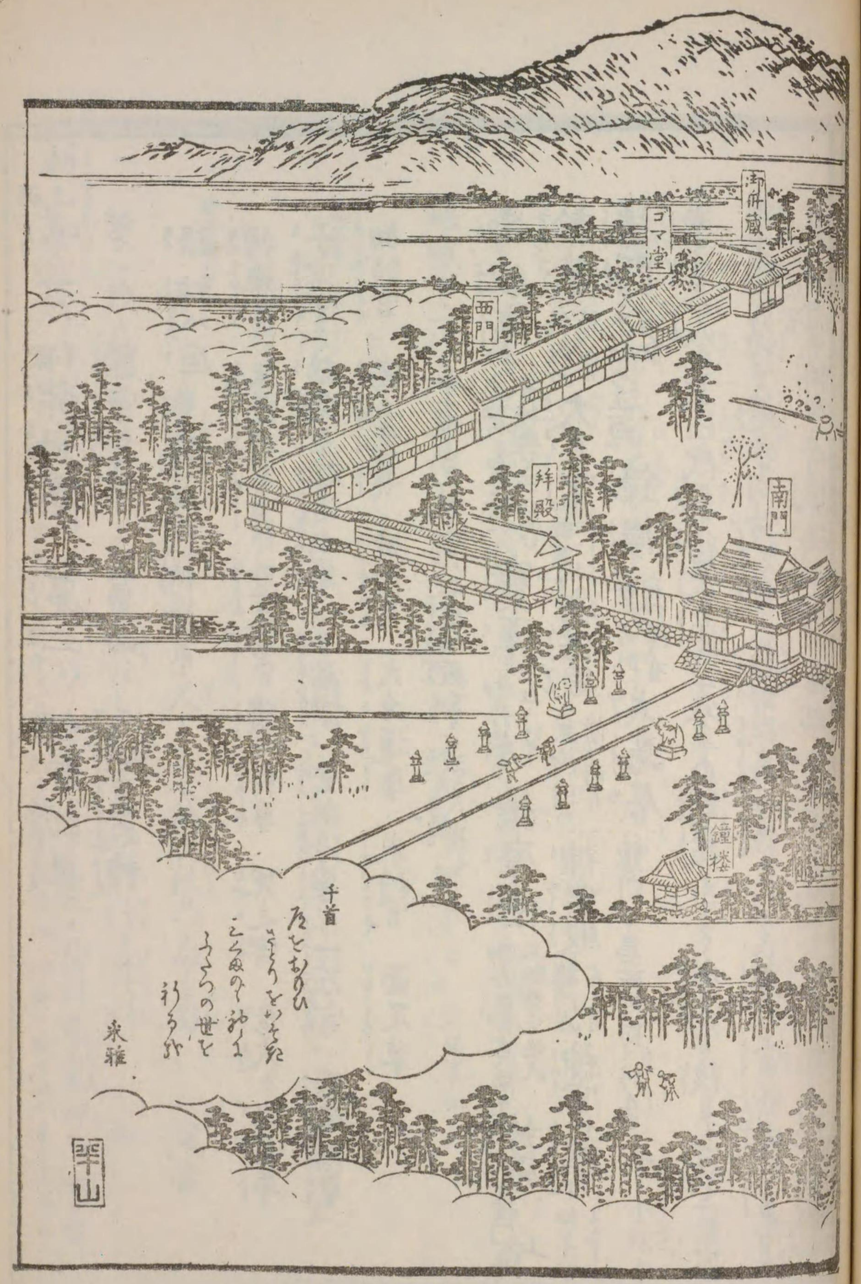
梶ノ鼻王子古趾　井田村より成川村へ行街道の左にあり
熊野九十九王子の内此所ハ定家卿の御幸記にハ井田王子と有
成川の前より阿田和より井田へ此所ハ夫より宇和野鳴川へ行

耳切川　新宮城下の口にあり水源ハ和州吉野より出る又本宮音無川岩田川ハ此川の一流舍人
ハ此所より渡し船にて渡る

熊野川　新宮城下の口にあり水源ハ和州吉野より出る又本宮音無川岩田川ハ此川の一流舍人
山より出る當国第一の河ニ此地にて新宮川と号ス河の此方を成川村より此所へ渡し一番所
ありて旅人の名所を記し船ちん淸取切手をとらせて舟を渡す
又此河にて下ル船ありて本宮へ行舟路九里八丁両岸すべて絶景なり然れども那智山より
結の葺ハ順路より勝手よろしく往路を行べし又後に出せる果ノ一越を経て本宮ハ
ある者ハ本宮より舟にて當新宮へ下るなり那智山より二番紀ノ井まで
新宮より二十丁ばかりにて熊野川にて

新古今　熊野川　行末遠き御代の数ぞ　後鳥羽院
紫禁和哥　おしなべて君がちとせもあふぎ見む　順徳院
結古今　熊野のせばりて漕ぐ舟なれば　後嵯峨院
熊野新宮　熊野川を越て右の方へ行ル門前ハ新宮の町家ニ下馬所の傍に聖師の館あり
社僧金剛寺ハ鳥居の傍にあり
本社　速玉男尊　正面の後に奥の社ニも祢る故紀路名所図會ニ本社速玉男尊と有
熊野名所記ニハ神殿と有

熊野新宮
千首
本社
経蔵
入日堂
摂社
摂社
御供所
東門
神楽殿
社家詰所
納経所
御師
金剛寺
御師館


御舟蔵
ゴマ堂
西門
拝殿
南門
鐘楼
千首
永雅
平山

西より　第一　伊弉册尊　第二　伊弉諾尊
第三　國常立尊　第四　天照皇太神
摂社八座　但九神殿一棟に列ス
禪地宮　天忍穂耳尊　聖之宮　瓊々杵尊　児之宮　彦火々出見尊
子守宮　鸕鷀草葺不合尊　十萬宮　豊斟渟尊　一万宮　國狭槌尊
勧請宮　泥土煮尊　飛行宮　大戸道尊　米持宮　面足尊
右十万宮一万宮八二座相殿なるが故に八座と

御船庫　本社の右の傍に有神輿と共に蔵む
寶庫　御丹蔵の左に有
輪蔵　摂社の後に有
大日堂　輪蔵に傍ふ
御供殿　東御門の左に有
樓門　本社の正面
鐘樓　樓門の外右の傍に有
護摩堂　御丹蔵の右に隣る
拝殿　樓門の西に有
神樂殿　樓門の左に有
神宮籠所　神樂殿に傍ふ
大鳥居　惣門下馬所の内にあり

當宮八人皇十三代景行天皇五十八年の創建にして本宮と後ろ合と百六十七年を経て延喜式神名帳に熊野早玉神社とのみ則ち當新宮の事なり
例祭九月十五日飛鳥明神の祭礼と同日にして飛鳥の神輿を錦の袋に入

奉るを権現の神輿と一時ばかり船に乗奉りて御船島の行宮に神幸し奉るの時川口の船数十艘渡御を借奉りものゝ統一個と廠舟に乗て従ふ祝島に上るとゐて船ゐそこで下つて川口に返て寄を漲ひ會く酒宴を催ふと例ふ是則ち俗に所謂神と祭るの日花を挿し鼓吹をいふ者鉄炮を携へ神輿と供奉すること其遺俗なりて又十津川の五十水舘と本宮社家舊記曰新宮者景行帝五十七丁卯歳に勅勧請本宮二神及天神地祇十二代神霊於御氣山依為新地奉号新宮云々　名勝畧記

熊野新宮にて

玉葉　天降る神や祓ひとゝらむ夏の湊ちくたちざみせよ　中原師光

後鳥羽院熊野御幸之時新宮御會和哥
庭上冬菊　海辺冬月

捨遺愚草　あれとなれ南北流れ淀ひさし久しくなる秋乃末葛　定家

わたつみをひらくる舟のかぢまくらうきねの夢の後の月影　仝

新山御旅所　本社の西北五丁許にあり神馬一騎を此所に牽り又神輿あり九月十五日祭礼の時速玉男神馬に騎て此所に来りのち又神輿を乗て此に来てのち又

御船島　本社の西北六十許にあり例祭神輿をあらに遷に
藻塩　二熊野の御船島に御船島神の御幸に漕ぬるなり　少将内侍
家集　そこの御ふなき捧さして御舟鳴神にまゐりかゝるさせん　増基法師

牛鼻神社　御舟島より二丁許川下山の半腹にあり此地ハ相野の庄鮒田村といふ
鈴木氏の神ト云

如法堂　本社より西北一丁半許にあり有峯寺と号に慈覚大師の開基にして新宮の神宮寺
とゝなりト名勝畧誌に見へたり

新宮城　新宮の社頭の東海辺にあり
紀伊公の御家臣水野殿の居城なり

熊野遊記云此城故新宮十良義盛の居する所に係る義盛ハ六條判官為義乃
季子なり治承四年高倉宮既に平氏を討の謀ありてひそかに令旨を齎らし
関東に降らしむ則ち義盛を以て使とし既にして那智新宮の諸郡稍く
義盛に附者あり是より先本宮大保大江某なる者平氏の為に祈禳乃
事を掌る既に義盛隠謀あり聞き自ら兵二千人を率ひて船に沿て直に
新宮城に抵る攻ること急なり拔すして敗走し大江氏の族に佐野法橋なる者あり
従て又敗して山中に竄れ密に人をして書を持ち状を平氏乃福原に告ぐ是に

由て高倉宮の事遂に露はる義盛後に源大将軍に事へ謀反して家滅ふ兵家
茶話に載し堀内氏善なる者世々紀州の人なり其先ハ熊野別當湛静に出ると言ふ
豊臣氏の時に族を以て叛く新宮城に據て固守し後に豊臣氏に和を納れ是に臣さり
慶長甲子の乱に石田三成等ゟ逆謀に與し國除せらるゝ慶長中に浅野氏
家宰浅野右近ゟ居し元和五年にしめて今の城守となるト云
當城下ハ新宮権現をはじめ霊地多く殊更運送便宜の湊なるが故に商家工家
軒をなべて賑はしく万端ゟの地に来つゝ調ハぬといふものはなされバ其繁花なる
ゟと熊野中無雙の一都會なり

新宮湊　新宮の町より東十町許にあり朝夕商舟出入して交易頗る繁花の湊
憲淳僧正熊野山入堂記　乗舟到新宮湊

渡口宿時望地形　幽奇旁似畫圖屏　沙塘岸遠漁村白
松樹山高鳥路青　帰浴老季抛剔務　行舟曉燭摒残星
一留一去春天壌　霞色潮聲入視聽

本朝通紀
人皇第七
孝靈天皇七十
二年秦徐福來朝

時始皇好仙術東遊海上
於是使方士徐福將童男
女千人入海求蓬萊神仙
不死之藥徐福來朝遂
不得其藥妄誅不敢還
在熊野卒子孫皆曰秦
氏

矢倉明神社 新宮村にあり 宇井氏の祖神と云

八幡宮 同上榎本氏の祖神と云

丹鶴山東仙寺 新宮村にあり真言宗傳云六條判官為義の息女鳥居の禅尼の建立にして本尊阿弥陀佛 薬師 観音を安んずなり弘法大師の作と云

按に六條判官為義の女ハ鶴原として熊野別當教真が妻なり老後剃髪して鳥居の禅尼と号せしなるべし 則ち別當堪曽も此教真の五男なり

無量壽寺 右同村にあり禅宗にして比丘尼寺なり開基詳ならず本尊阿弥陀佛 脇士観音勢至の両像ともに行基の作と云 什物法灯国師の画像賛ハ法灯の自筆と言て佛涅槃の画像唐画なれど筆者不知

東陽山宗應禅寺 同村の西南二丁半余にあり禅宗にして曹洞の古刹なり開山ハ豆州最勝院秀山和尚にて其創ハ香林禅寺と号し殿堂擬々くらしく後世廃れに慶長中時の領主浅野侯の嗣子不幸短命にして没しけるかバ寺中に葬て塔を其上に建つ法諱を因て宗應居士と号し斯て此寺の開基とし香林を改めて宗應禅寺と云ことハ常山の縁起に見ゆ 本尊釈迦牟尼佛恵心僧都作 并佛涅槃之像 達磨大師画像 聖徳太子木像 并画傳細 廿五條の袈裟 珊瑚の念珠等の什物あり尚此余霊宝畧之

仙養山燈明寺 同村の辺社の境内にあり天台宗開基詳ならず 本尊薬師佛 不動明王の両像を安んず各智證大師作 什物 釈迦 文殊 普賢の画像三幅対 菅相丞の画像自筆のよし 役小角の画像自筆と云 大黒天の木像并に翁の假面あり、春日作 法華経弘法大師の筆と聞ゆ

秦徐福墳 新宮の鳥居より凡十六丁許東上熊野地村飛鳥社より五丁ばかり西南にあり 南龍院殿志ありて碑を建てられ書李梅渓墳の上に樹木二三本あり

南紀名勝畧記云 徐福祠新宮庄熊野村の西南にあり今祠なし土人其ところを楠藪と云 順礼細見記云新宮の下馬より十六丁東徐福祠あり世俗蓬莱山といふとも 此所をさして言へるなるべし

熊野の浦辺に秦の徐福が塚をそけり

そのかみや死なぬ薬を掘し人も　蝶夢

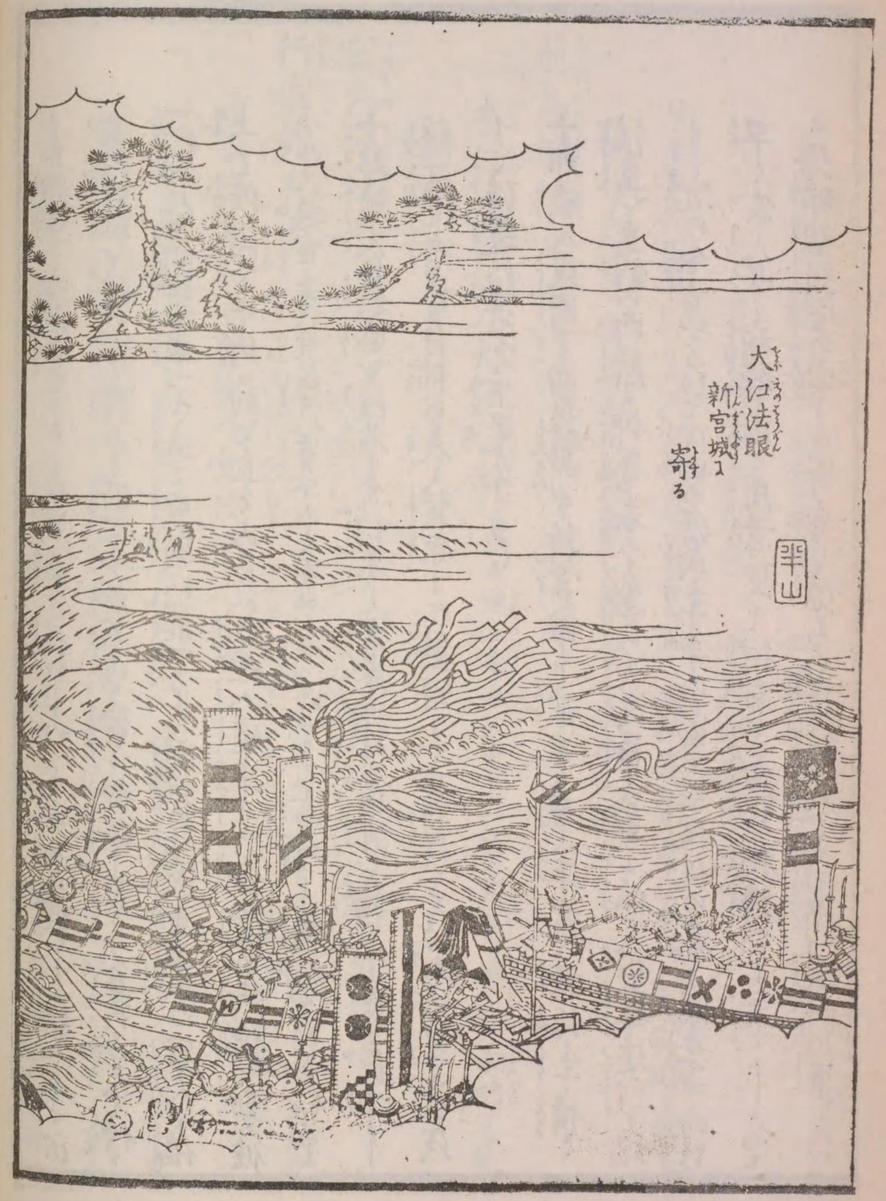
秦始皇帝徐福をして海中に神薬を求めしむ徐福数年を経るといへども曽て求ることを得ず費煩る事をおそれ始皇の譴んことを恐れて乃ち詐て曰臣海中に於て神に見ゆる言て曰汝ハ西皇の使なる哉汝ハ何をか求むる答曰年を延寿を益す薬を請ることを願ふ神曰汝秦王の禮薄し故に観ことを得ども取ことを得ず即ち臣を従がへて東南の方蓬莱山に至る宮闕を見るに使つる者あり銅色にして龍の形光り上りて天を照す是によつて臣再拝して問て曰何を資らしめて献るべきや海神の曰令名ある男子若くハ振女百工の事とを以てせバ即是を得んと秦始皇是を聞て大に悦び振男女三千人として是に五穀の種と百工を資らしめて行しむと云々 史記太史本紀にハ徐市とし列傳にハ徐福とあり

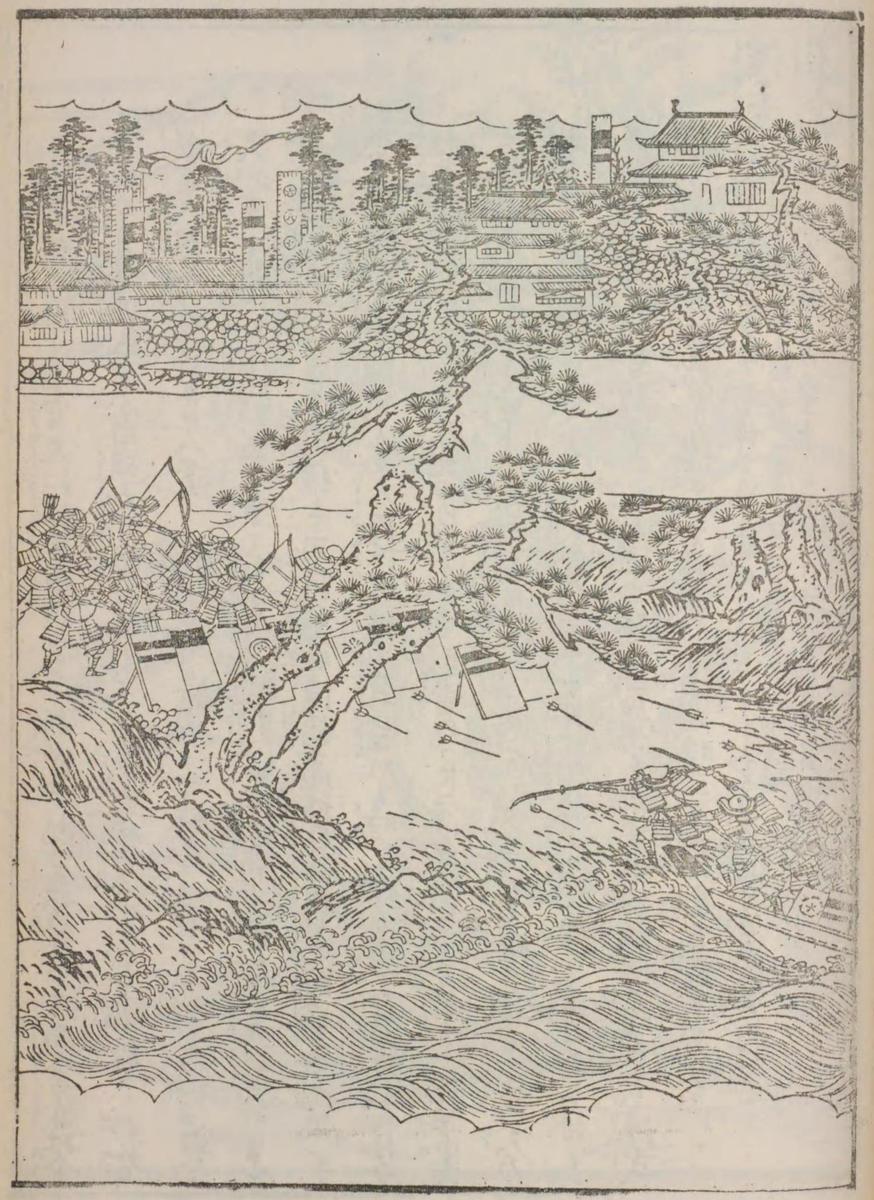
熊野名勝畫図云 徐福帰化ハ人皇七代孝霊帝六年也と云 後漢書東夷傳據とするの本朝沙門中津絶海と号し明に入太祖徐福の事を問答る詩を以て曰

熊野峯前徐福祠　満山薬草雨餘肥
祇今海上波濤穏　萬里好風須早帰

大祖和曰　熊野峯前血食祠　松根琊珀也應肥
　　昔時徐福求仙藥　直到如今竟不歸

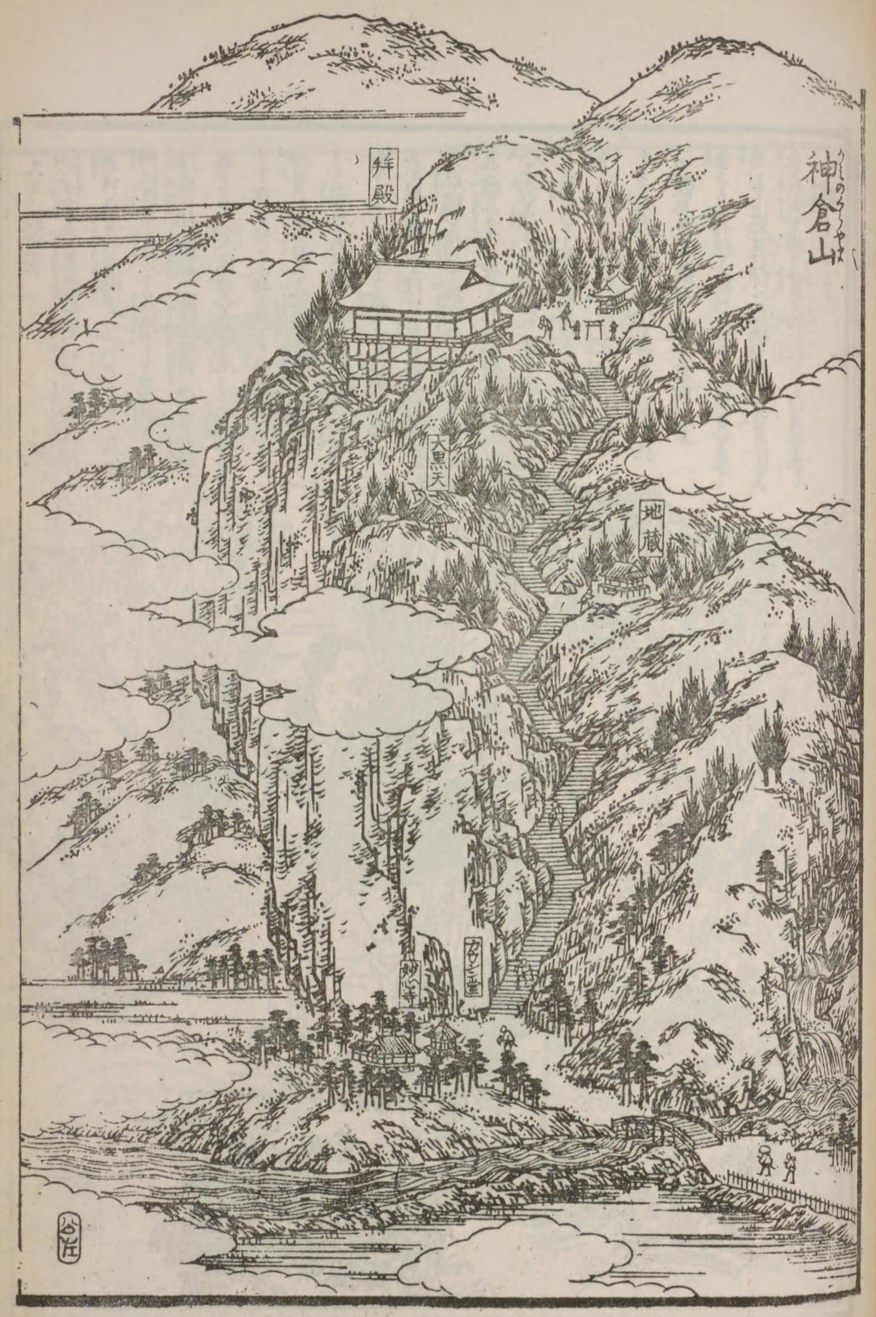
日本王代一覧曰　人王七代孝霊天皇　此代異朝ニハ秦の始皇の時ニ當て
徐福と云者蓬萊山不死の薬を請んとて日本ニ渡ル
飛鳥神社　新宮の巽上熊野村ニあり新宮の町ゟ十丁許東ニ
本社　祭神　大宮姫命　或云速玉尊也又東の一社ハ新宮の地主と齟齬す云
・徐福祠　本社の傍ニあり
宮戸神社　中熊野村の東北二丁許川辺ニあり俗ニ蓬萊山ト云　祭神　泉宇遍神なりト云
行家館古趾　下熊野村ニあり新宮十郎義盛ニ号ス高倉宮御謀叛の時令旨の御使ニ勤むるニ盛衰記ニ見ユ○宮戸ゟ浜の王子ニ行道の左ニ此所ニ泉津手坂の標示もし言つゝ巌石松樹の光景もこゝに寺
源平盛衰記高倉宮令旨使節之條云
抑令旨の御使誰ゝ勤ぶべしと仰れハ二位入道申ケるハ外人ハ憚り多し新宮十郎義盛折節在京ス侍共召さるゝに使節を仰含めらるべしと○可然ゝゝ
義盛と召れ事の次第ゝゝ下知せられをハ十郎畏まつて平治年中ゟ新宮ニ隠れ竄ゐて夜晝安き心もなくして素懐をとげてふたゝび家門の耻を清めんと存ぢる所ニ今嚴命を蒙る條然ゝゝ身の幸ひニ侍る一門たれ〳〵子細を申ざゝ速ニ東國に罷下るて同姓の源氏年来の家人と催上ニ候べしとて御前を立ちにこそ入道申ケるハ令旨の御使と勤る候ハゝ無官ニてハ其恐れ有べしと申せバ然ゝとて當座ニ蔵人ニなされ
十郎蔵人義盛と改名して行家と名乗九日令旨を給て十日の夜半ニ藤茂と肩ニかけ柿の衣ニ壮束して熊野ニて見習ひられバ山伏の学び残して海道に係つゝ下ケるゝゝ
十郎蔵人東國下向の時内々新宮へ申ケるハ平家ハ悪行年積ゝ法皇ゟ鳥羽の御所ニ押籠奉ゐ忽ち逆臣となるニ依て彼輩追討の宣旨を下るゝ事ハ平家の家人を催促の為ニ綸旨を下ケるゝゝ
早ゝ家人等ニ相觸て内ゝ用意ありて行家が上洛を相待べしと云下しゝゝ
れバ那智新宮の者ども寄合ゝゝ隠もなく払語れバ国内通計の事なれバ


大江法眼
新宮城ヘ
寄る
平山



平家の祈の師に木宮大江法眼あれときく新宮十郎義盛あそ高倉宮此令
旨をあり東國に下る白旗白弓袋にありかつる平家を亡ぼさんとするなるを那智
新宮大衆等源氏の方人せんとて用意有りれいざや推寄滅ぼさんとて大江法眼を
大將軍として三千余騎舟に乘て新宮の渚へ押よせけり新宮那智の大衆あの事を
聞て那智の執行正寺司權寺司羅睺羅法橋高坊の法眼等同心して大衆二千
余人新宮の渚に陣をとる大江法眼押よせて互ひに時を作る事二箇度之三目の
鏑矢鳴やむ事なく太刀長刀のひらめく影雷のごとし源氏の方にハ用ことゝ切れ平家此
方に角ゆゑ射きとて軍しばひ六種震動のごとし互ひに半時も退ぐに一日一夜火乃
出るゆゑにあそ戰ひされいきども大江法眼軍に負け相語ふ輩遁るゝ者ハ少く討るゝ
者ハ多かりけり那智新宮の大衆軍に勝て貝鐘をあはし平家の運傾きて源氏
繁昌しのゝべし軍始めに神軍して勝たりと悦びの時三度までこそ造りけれ云々

濱王子社 下熊野村の南三丁許にあり宮戸の社より千丁ばかり濱辺の方松原の内之
社の東南辺に頓宮の跡あり熊野九十九王子の内之
玉之井橋 宮戸の社と濱の王子との間にあり或ハ玉江の橋と云



え立て叙書曰
紀伊國牟婁郡熊野村に永興法師とかに
者あり智行兼備まり一の比丘ありて永
興に從ひて学びき其持ところの具とてハ
法華一部銅瓶一羅狀一の外余の長物
無きとき比丘法華を持て居ると一歳ばかり
して床を以て永興に施して曰我越山より
伊勢の國に往んと欲ふと永興二の僕を
して送らしめ且粮を与て旅の粮とに斯て
行ると一日次日して僕をして返らしめ
其に経と粮とを授け自ら瓶を持ち
又麻縄を携へて独別れてゞ去る
其後二年を歴て熊野村の人山に
入て木を伐るに誦経の音を聞く
日を累ひて止ことなし村人これを尋ぬ
るに見へざりけれ往て永興にて語る
ある永興山に入て深くあまを尋ぬに
一の骸骨あり麻縄に繋て二脚巖に
垂さり其傍に瓶ありけるを永興是を見て
悲しさに近き其後二歳猶誦経の音ありしが
永興重て往て骨を拾ひ収めけるに其舌赤く
して鮮しかりける

南紀名勝畧誌曰新宮の庄に上熊野村中熊野村下熊野村ありて今の新宮もとも
とハ熊野村の内なれども新宮太神鎮座の以後所の名とせりと諸書に熊野
村といへるハ此所なるべしとぞ

神倉山権現社 新宮の町の半途より紀州の道ありて凡新宮の社頭より十五丁許右の山手なり当山ハ魔所なりとて申の刻を限りて登山を禁ず俗に新宮の奥の院といふ

本社 祭神 天照皇太神 高倉下命 或ハ龍蔵権現と称し其外観音愛染の両尊を安んず

額曰 日本第一熊野根本神蔵権現

大黒堂 山路の半傍にあり 生大黒といふ秘仏也　**地蔵堂** 同坂の傍にあり

石不動 自然石の盤石也　**袈裟石** 堅横に筋ありて色浅紫の大石也　**地獄谷**　**餓鬼水**　**閼伽水**

ともに山中にあり本社ハ六間に五間にして巽に向ひ山腹の盤石を以て神座とし其前に建架せる桟造なり此欄干より近く臨めバ新宮の城下の街衢縦横につらなり遠くハ東南の滄海一望にして絶景なり

相傳神蔵山ハ太古神武帝の御時武甕雷神韴霊の宝剱を下したまふ高倉下命の庫の古趾なり故に神倉と号けしぞ委しくハ日本紀に見へたり

日本紀曰時彼処有人号曰熊野高倉下云云時武甕雷神登謂高倉下曰予剱号曰韴霊今当置汝庫裏宜取而献之天孫高倉下曰唯唯而寤之明旦依夢中教開庫視之果有落剱倒立於庫底板即取以進之云く

舊事記云天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊児天香語山命 天降名手栗彦命 亦名高倉下命 此命随御祖天孫尊自天降坐於紀伊国熊野邑云云

續古今 熊野にまうで侍りける時かんのくらにて 太政大臣従一位
きりはめたるを見侍りてよみ侍りける
三熊野や神倉山の石たゝみのぼりはてゝも猶いのるかな　常盤井入道前太政大臣

妙心寺 神蔵山石階の下にあり真言宗法燈国師開基の尼法燈の木像ありて自作なりといふ又鉢拄杖草鞋あり法燈の所持と云中古より比丘尼住持し来る故に尼寺となる

庚申堂 青面金剛童子を安んず 妙心寺の前にあり

三熊野 又ハ御熊野とも 熊野遊記曰有三山曰本宮也新宮也那智也是曰三熊野と実鎮南方なり或云尊神鎮座の地なるを以て御熊野と称すとも俗に伊勢を御伊勢といふがごとしとぞ

三熊野ノ浦 是も同じく熊野中の浦の事にして何くとさして限るにハ有べからず土人曰凡楯が崎より塩見崎の辺まで一円に熊のうらと号けしとぞ

哥枕抄曰仙覚抄に三熊野ノ浦の浜ゆふと読るハ伊勢国なりとの説につらなく三熊野に浜ゆふを読る哥を集めて伊勢の名所にたてたる本ありて此説ふかく覚束

る一此名所と限らず伊勢紀伊の國の名所混乱多し万葉と幸干紀伊國へ時しもと異本に幸干伊勢國へ時と書る流本ひるの誤よりて相違せる説も有そこも見古又熊野五俗の説に新宮より北擔が嵩と云所より長島と

いまで今紀州の内にもかくれど往昔右の擔が嵩よりこなた伊勢の國もありしかば國境古今の相違も有そや伊勢の國より二熊野へ所聞及ばず紀伊國に

沿定て一頭昭や神中抄にも色々の説ありて童蒙抄に説る大饗の時鳥の足と包む料と

伊勢國二熊野の浦へ濱ゆふをめぬきて同れば私のろ簡え決がたし

万葉

二熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨　柿本人麻呂

畧解云　濱ゆふは今濱ちりめんの甚堅の皮幾重もかさなりて七月花咲て

花の形木綿のごとく白く垂れ下るゆふ

拾遺

ちはやぶる神の御代にも絶ずして慮も長き濱の木綿を　兼盛

後拾遺

ちはやぶる神のみよより引つづき七五三縄の濱の木綿を　通命法師

續後撰

二熊野の濱乃濱ゆふ手にとりて幾世しぬべき契なるらん　正二位知家

同

やくとそ伏ぬるろ濱乃濱ゆふ　和泉式部

續後撰

二熊野や濱ゆふ懸る濱さびて人もしらくに年ぞ経ぬる　藤原孝家

同

二熊野や濱ゆふ懸る濱さびて人もしらくに年ぞ経ぬる　従三位範宗

新續古今

二熊野乃濱乃濱ゆふ幾世経ぬあるめ泪を袖にかけそて　洞院摂政左大臣

家集

みくまのの濱ゆふかけてちはやぶる神ぞ心の人をまもれば　乗輔

山家集

二熊野や濱ゆふ懸る濱さびて人もしらくに年ぞ経ぬる　西行

拾玉

秋とつくはやもなりぬと二熊野の濱ゆふかけて幾夜寝ぬらん　慈鎮

夕百番

萬代をみくまの濱ゆふかけてこそ神も祈らせ給はらめ　後鳥羽院

建保

日もそへて人のこゝろを濱のゆふ　定衡

同

二熊野乃濱乃濱ゆふ手にとりて幾世しぬべき契なるらん　兵衛内侍

同

二熊野乃濱乃濱ゆふかけてちはやぶる神と人のこゝろは　行家

新六

浅き糸でそ引こと二熊野の濱ゆふかけて幾夜寝ぬらん　衣笠

拾遺愚草

よの中も我身も今はかくしつゝ濱ゆふかけて神に祈らん　定家

玉吟

二熊野や濱ゆふ懸る濱さびて人もしらくに年ぞ経ぬる　家隆

名寄　三熊野の浜中に雲のかゝりたるを　後頼

夫木　みな底ひ和の泊をかぞへまし我身も数に入る海の浜中

建仁御幸　名代を誰と問ふまでもなし三熊野の月　雅経

同　人もこぬ三熊野の月を三熊野の浦の浜中に残すも　内大臣通親

同　三熊野の浦の浜中に月ぞすむ　権中納言公経

○

詞花　我こそは人とみな思ふ三熊野の浦の浜木綿　藤原長忠

新古今　三熊野の浦の浜木綿百重にも我をば思へ頼むかひなし　和泉式部

新勅撰　三熊野の浦の松風吹向けよ幾世うけきの浦乃ふる声　伊勢

風雅　おもひくもかゝる浦めを三熊野の浦の浜風吹きまよふらん　七条院大納言

新拾遺　海士小舟はてはてに三熊野の浦のかたをこゝろにぞ引く　建礼門院右京太夫

三熊野濱　同上　藻壁門院保嶋

建仁御幸　和田の泉浜ひさしかれ三熊野の浦の浜木綿　入道前太政大臣

月うげのさとりもこゝにひらくらん　藤原定光

御手洗坂　新宮の城下より半里すぐ（虎津野村に至り）此坂路にかゝる此山の崎より大物の濱と大石二つの小島も眺望の形勝に似たり俗に三石ありといひ伝ふ

御手洗ふりくる雨に岩ぬれて通ひとゞこほりくれぬ其頃権現より熊野の走湯の海辺にて手水をつかひ身を清めたまふ

又此坂の夏上りむかふに跳望せば三輪崎秋津浦佐野岡鈴嶋孔子島周覚山黄島鍋島

上野明神社　三輪が崎の手前街道の右山の方にあり

三輪ヶ崎　御手洗より五丁許を経て此浦里にかゝる新宮より此所まで行程一里の場所なり

海辺より漁夫の家多し（数艘つゞく）

紀路寄枕抄曰　此名所諸書に紀伊國に出づ然るに私の手簡を以てあらそひ出づ

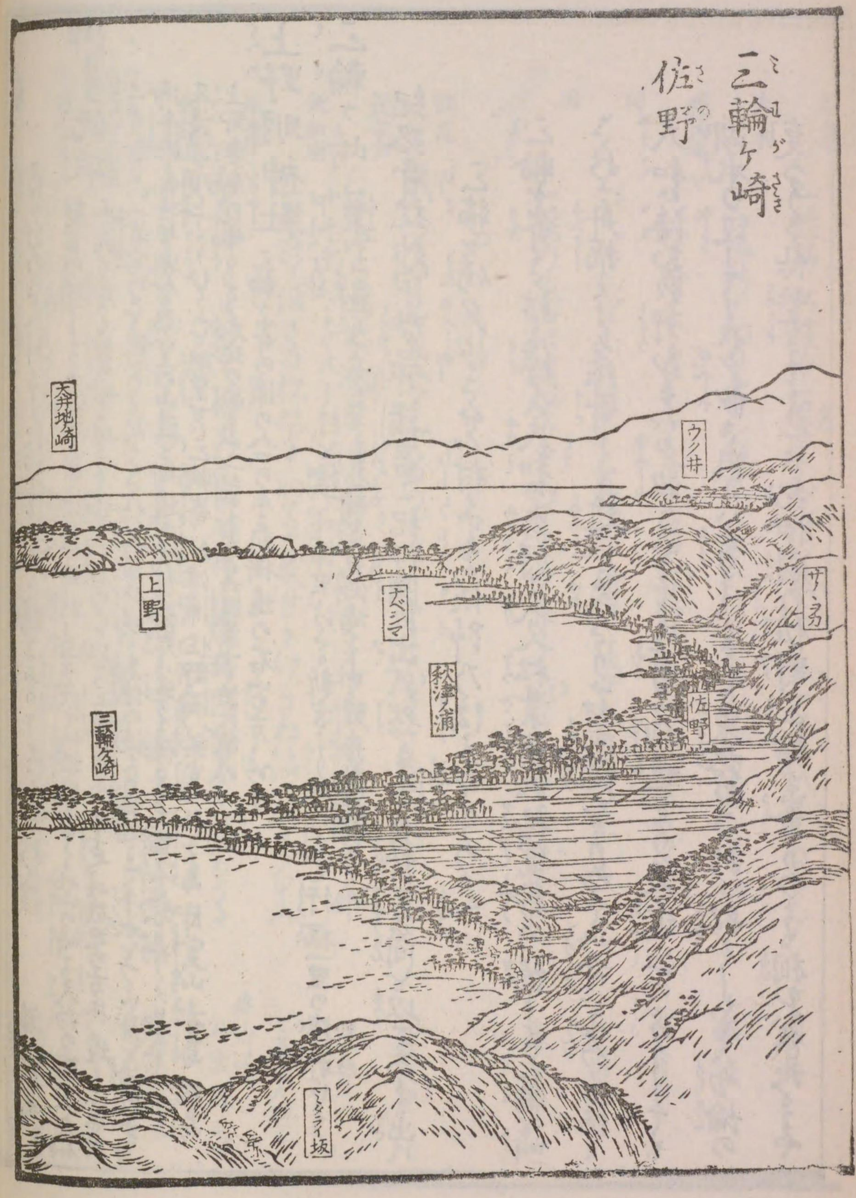
三輪が崎夕汐さゝば村雨を佐野乃渡りの波ぞまがへる

三輪が崎さゝ渡りの大和の名所又松葉集に仙覚抄の説として三輪が崎

さゝ舟橋とよめる歌ども新古今にも近江に入りて右両説をとりて此寄を考へ決す

大和は海もなけれ共ありきばタ汐さゝぬ浦ぞなかりける　有丸

湖水の辺ならねばタ汐さゝぬ東路のさゝ船ならぬ身も　紀伊國の佐野と三輪が崎寄りてもあひかまひなるや


三輪ケ崎
佐野
大井地崎
ウク井
上野
ナベシマ
秋津ノ浦
三輪ケ崎
佐野
サヽラカ
ミタライ坂

目覚山
赤島
鈴島
平山

佐野松原

依て愚意のそ尚猶てう有事もんでも多く出し侍りぬ

萬葉　三輪の崎狭磯の小島ゆ鳴渡る鶴の暁の声

山歌まて荒磯しの事ハ外の三輪の崎まてにこそ

南紀名勝畧誌曰佐野の丹橋ハ上野國なり佐野の地ハ河内國なり佐野ハ此ニ和泉國なり佐野の岡ハ紀伊國なり三輪が崎佐野と續けるハ大和國の一ツ緒書に有てう新宮庄新宮村の南一里許佐野村の東八丁許に三輪が崎なり又處なり最海辺なり然れバ海ハ三輪が寄佐野ハ此ニある名所と疑ひもてゆく

佐野之岡

三輪が寄の浦より五六子許佐野村に有

佐野山

佐野の岡の上の山也

佐野

街道の左の方山のすそにつゞく

松原

佐野村の街道の左右松林あり左海上遠く打て際も一所に渺茫風景の地へ

日本紀　神武卷曰遂越狭野到熊野神邑

萬葉　苔毛零来雨可神之埼狭野乃渡爾家裳不有國

畧解に云みくが寄しの六紀伊國牟漏郡に新宮より那智へ行道の海辺あり新宮より今の道一里半ばかり行て昔ハ此ニ佐野村もありしと宣長のそもしく秋風のそもしく

續古今　佐野の岡越行人の衣手に雪ハ降つゝ

玉葉　秋風ハきそ乍ら佐野乃岡越ゆる人ハ夜さへと

新拾遺　今歟のや佐野の岡を越秋風に

名寄　佐野の岡越ゆる人の袖ハ秋風乃ちりの末さへ袂に

建仁の頃後鳥羽院熊野御幸の時道の辺の哥の中

光明峯寺入道前摂政太政大臣

ふもの日浅数ふるに

名寄　忘れすよ松の緑も波こえて月ハ

夫木　引ならむ佐野の舟人こぬ夜にも

秋津浦

三輪が寄より佐野へ行同街道の左の海辺とも入江とも秋津の浦下云名勝景記曰佐野の王子の社前より三輪が寄の浦へ到て廿丁許とそ

名寄　藻かりし秋津野辺に袖ぬれて

恵慶法師

此濱より出る谷石を那智黒と号し最上とす

七里が浜のいろいろまじて濱辺其石ともしも其石の質劣るべし

鈴島

三輪が寄の沖にあり

鍋島

秋津の浦ホ

孔子嶋

鈴島の右の方にあり

上野島

鍋島の向ひ

佐野王子社 佐野の松原のうしろ往還の
右にあり熊野九十九王子の内 **王子橋** 同向うに **袖摺石** 橋の向うにあり
二位禪尼塔 王子の濱にあり名の五輪の塔なり
事實詳ならず二位禪尼は右大將賴朝の御
臺所にて北条時政の女政子と云正治元年
庚申十月従二位を授られ二位
禪尼と号す俗に尼將軍と称す
建暦六年十月薨

高根島 宇久井村より北三町許 **高根ノ松** 同殘除と有
街道の左にあり 岩の上に社有
目覚山 宇久井の浦のむかふ左の海中にあり
土人傳て云久覚上人の哥よそ
目覚山ちる比嵐のそをすてゝ花の松も袂にぞ
太夫ノ松 宇久井村の十丁許右の傍にあり
うけおゐて一そ按に維盛卿八前に高野
のすゑもとゞまれば強て裝束もあらじ着のまゝ
のすがた全く後人維盛卿の行脚の僧の出拵を
卿入水の体よりてなり身を變さんとの計畧なれ
ども裝束しばされば裝束しかるべきにや
土人曰聖護院御宮御幸入の砌此松蔭の芝に
御休息ありし事旧例ありしそ

狐島 宇久井の浦の向にあり稲荷の祠且
鳥居あり例祭正月十五日八月十五日
小圖坂 大圖坂 宇久井村より過てうのて山道
是又當熊野浦公館を濱する地よりて三輪ヶ崎太地岸あり
峠より島々見渡して絶景之
鳴耶濱 大ニ坂の左の濱をいふ

白菊ノ濱 大ニ坂を下りて小濱あり此磯を打
潮引ば又一奇勝とす大ニ坂の山より見下せば濱の形菊の花のごとし故に号く
赤色ノ濱 大ニ坂より十丁許先左の濱をいふ傳云此所の沖にて平維盛入水ありしそ
丹敷浦 右同所の海辺凡十二三丁許の間をいふ日本紀に荒坂の津とあるは此所の事なりそ
日本紀曰天皇獨與皇子手研耳命一師軍而進至熊野荒坂津 赤名丹敷浦 因誅
丹敷戸畔者云云
小松二位維盛卿入水古跡 赤色の濱の向うに遠く見ゆる島あり山成島といふ又俗に太か
落ちうと是は維盛太刀落名とつく山名ありと以てなり盛衰記には
金島といふ小松二位維盛讃岐国屋島の館をあとにして出高野山に詣で其後此島にうつり入水しの
戒名を改め熊野山に詣で其後此島にうつり入水しの御供には兵衛重景石堂丸舎人武里斎藤時頼
入道之
源平盛衰記云
二位入道二の山の参詣事ともおろく遂れをば漢宮の王子の御前にて一葉の船に
棹さして万里の波にぞ浮びのい遂の沖に小島ありと金島とぞ申る彼島に上て松の
木を削りて自ら名籍を書のこし平家嫡々正統小松内大臣重盛公之子息権亮二位
中將維盛入道讃岐屋島戰場を出て二艘権現之順禮を遂那智ノ浦に入水し畢

平惟盛ハ屋嶋を密ニ志のび出高野
山ニおいて出家し名を戒法房と改め
ゐふ御供し奉り重景もともに出家し
戒實とゆらくゐ石童丸もひとしく剃髮
して戒圓と号ハ主従二個ともに熊野の
浦ニ入水し舎人武里ハ御遺言ゆるにより
存命案内ニ系ヲし時頼入道ハ高野山に
皈庵せしと所ゆ

元暦元年二月廿八日生年二十七と書のび奥に一首と遺されり

生をえて八十あまり世に住めりける
其後又島より船に掛てのり遠の沖に漕出のひね思ひ切さる遥なれど今を限りの
浪の上さすがに心細うもあり二月の末の事もあれば春も既に暮ね海上くるゝに霞
竜め浦路の山も幽うり沖の釣舟の波の底に浮沈むを見のこすも我身の上とそ
おもはれる帰雁の雲井の余所ながら一聲二声音信を聞めしても故郷へ言傳せま
ほしく思ひやりぬ

改暦雑事記曰後鳥羽院御宇元暦元年二月九日檜亮少将維盛於那智
浦入水歌

そるそ思ふ孫陀羅ひの海くしてなかるゝ水の侍りてと遁まそ那智山の辺り色川
土人相傳維盛赤色の衣そ着つゝ伴つゝ入水の侍りてと遁まそ那智山の辺り色川
邳大野村よりの地二十丁余後十津川有田の奥あるに蟄居有しそ今尚有田の奥安田村よりの地より小松某とて裔孫ありて同
色川郷大野村の西二丁許に維盛の社有一云

濱之宮　那智の庄濱宮村にあり宇久井の浦より此地まで行程一里〳〵濱宮とも云御通の傍〳〵

本社　王子権現　黒俗ハ三所権現一云盛衰記ハ濱の宮の王子の御前より一葉つゝじ

丹敷戸畔社　本社の右に有　石造の小祠へ

夫木

飛神社　本社の右に有丹敷戸畔の石の祠よりも一

絶後沖の鈴鴨羽うちそよぐ浦の夕なみ

御供所　本社の前左の傍に有

渚之森　濱の宮の境内の森とりて紀路名所記に見へたり

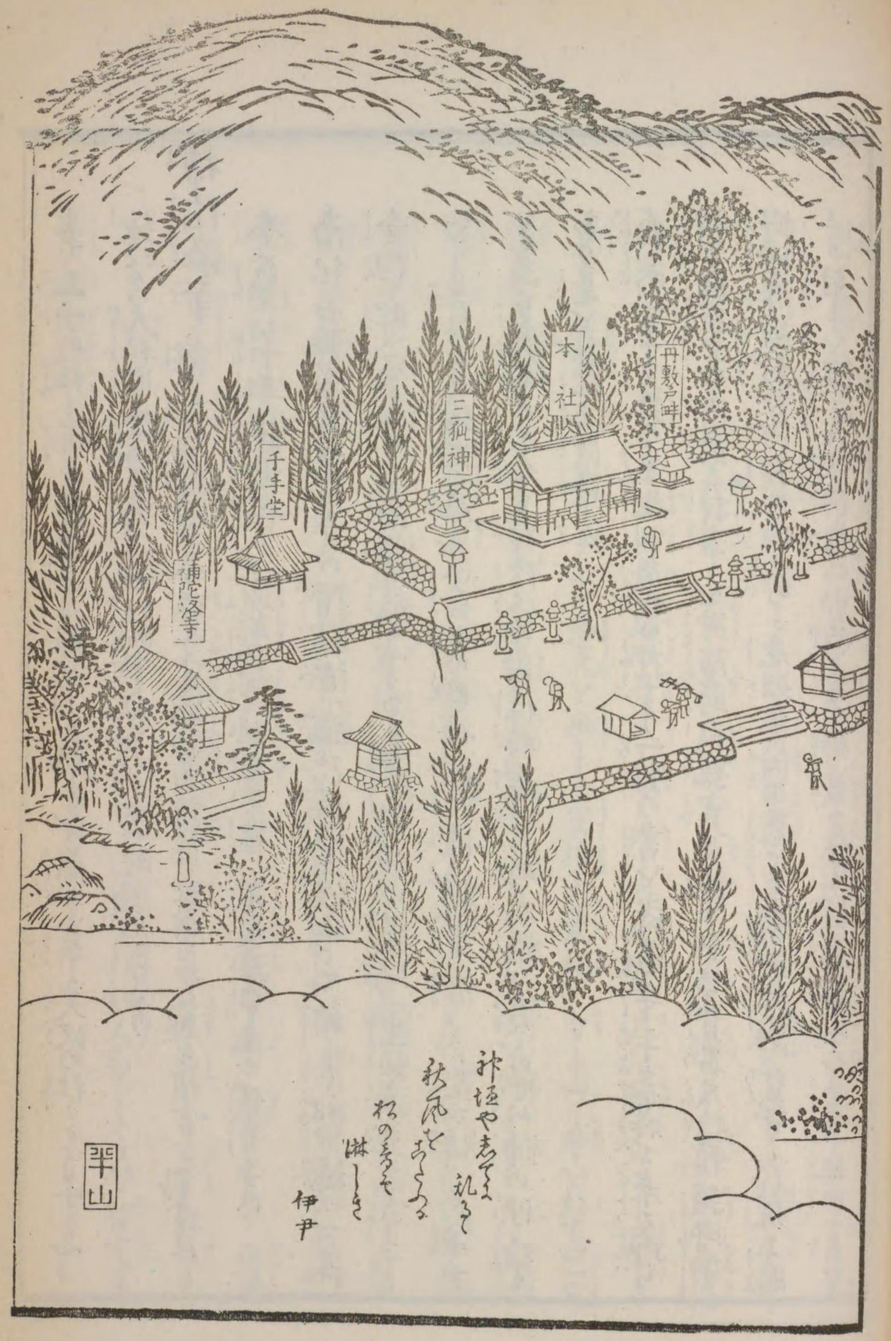
續古今　源仲正

村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

衣笠

紀路歌枕抄曰手萎郡那智の濱辺の宮より有此宮を哭澤森とよへり井出
抄ハ哭澤社渚森ともに紀伊國もり若同所歟とも紀伊と有と渚の森や假
名の書誤にても有べくや決しがたし個藻塩草の説にハ渚の宮ハ那智の濱社宮
なる〳〵哭澤森おぼつかなし若又濱の宮哭沢女命もしくハ哭沢女命くハ有はし記
捜し當渚社の祭神伴ふりくバ哭沢女命只王子権現と称ひりくバ哭沢女命くハ有はし記
哉此神ハ伊弉册尊化去まの時伊弉諾尊歎せの甚涙おちて神と為其名を
哭沢女命と号くと日本紀に見へられバ則ち伊弉諾尊の王子といひつべくされバ熊野某社と

濱之宮
補陀洛寺


本社
三狐神
千手堂
補陀洛寺
平山
伊尹

して王子の社と号すれば是亦義よる事ありけん萬葉集に哭沢の杜といへる歌ト
詠なり大和國香山の哭澤の社の事なるべし一説に
補陀洛寺　濱の宮の傍にあり天台宗にて那智山権現の社僧の中之則ち濱宮と守護ス
本尊　千手観世音　并不動明王　地蔵菩薩　實頭盧尊者の像おし安ス
南紀名勝畧誌曰當寺の僧往古補陀洛山に渡るとて新しく舟を造り二三丹
食物と貯へ風に任せて南海へ放ちやるに是ぞ観音の道場へ生きて至るべきこと
もり其外昔僧俗に限らず存生の内補陀洛渡海の事有るは言傳ふる人中古
より此度廢せり口今も補陀洛寺の住持遷化の時死骸と舟のせ此浦の沖へ捨る
もり是を補陀洛渡海と云
貞永二年五月の末紀州糸我の荘より一封の書を武蔵守平泰時に奉る即ち
将軍頼経公の御前に持来りて周防前司親實に授しより昔右大将頼朝卿下
野國那須野の御狩の時大なる鹿列卒の内に進下る頼朝卿御覧ぜられ殊に勝
れる射手を選ばれ下河辺六郎行秀に仰付られり行秀嚴命を蒙り馳向て矢を

放つに鹿ひるまず列卒の外に走り出しを小山左衛門尉朝政一矢にて射とめたり下
河辺行秀八面目を失ひ狩場にて髪を切出家して逐電して行方を知る人なし
又智定房と名を改め暫く山中に籠り行ひすまし熊野の那智の浦より舟に乗て南海
補陀洛山に渡りて其用意八屋形舟に入口後に外より屋形の戸を釘づけにし
窓も皆日月の光を見るべきやうもなく燈火を幽に食物には栗柿を少しづゝ俗とたすけ心
法華を讀誦して二十余日にして到の著ぬ岸に上りて山の姿を拝みめぐるに山狂
危く険しくして岩谷幽邃なり山の頂に池あり大河と流れて山を巡りて海に入
他の辺りに石の天宮ありて観世音菩薩遊行しの所なり頼行満なる人八たゞ
登りて菩薩を拝もとゝなり智定房此山に五十余日留まりて阿経を讀奉りて又船
乗て熊野の那智にかへりつゝ同法の沙門に書をおくりて武蔵守殿に進らせたり在俗
の時八弓馬の友にて候しが智定房出家以後の事ども委しく記して奉られ哀れ
なりける事ども委しく後に行末とゞめらるゝに更に復知人なりとや智定又
再び補陀洛山に渡りまやうん知れず云々　異應集

按ニ西域記及び経所説の補陀落山ハ南天竺ニありて光明山と云日照山ありハ金剛輪又ハ孤絶山と号く此智定房の渡りしハ昔文徳天皇の御宇慧萼法師漂流して補陀落山ニ到りて海辺ニ庵をむすびて住居し終ニ伽藍を営ミ観音を安置し補陀落山寺と号ハ又黄檗隠元禅師も未だ俗なりし時此山ニ登つて菩提心を発しあふ所ニして震旦の東南の海島なり日本よりハ海路凡三百里許ニして近ハ所くとぞ佛祖統紀ニハ是を佛説の補陀落山なりといひ日本にても是を光明山なりとおりくども震旦の南海ニ孤絶の山なるが故ニ南天竺の名を掠して補陀落山と号けしなり譬ていへバ東都ニ愛宕山あり浪華ニ清水寺など有がごとし今も唐人日本ニ来るとハ不動すれバ此補陀山ニ船をよせて泊り順風を待てとあり又泉州堺乃高人長崎ニ至つて唐人ニ會せしハ夏の事なりしが補陀山の揚梅ありとて与へしと絶きり又元禄の初め讃州塩飽の廻船大風ニ吹放されて補陀山ニ至り伽藍を拝して帰きりと云然れバ日本より海路遠からずして凡人も能いたれバ天竺の光明山ハいうまでもなく分明なり

大邊地中邊地西街道　大邊地ハ海邊の街道ニ中邊地ハ山路の街道なり

濱の宮より凡八丁許行て川閑市の野を經て那智山に登り夫より大雲烏坂を越て本宮に至る二超嶺野中近露を過て四辺に出る行程凡二十一里是を中邊地通といふ順禮道者多く此通を本道とす

又右濱宮川閑より左へ取て天滿二河より浦神古座を過て江田和深馬轉坂を越安居高瀬を經て田辺に出る行程凡廿二里許あれど大邊地通と云順礼の道者高野山より無果越を通て本宮に出夫より熊野川を船にて新宮に下て余後那智山に登り川閑に戻りて大邊地通を行の希にひとし何れも順路もよろしからず萬端に不自由もの也

雍州府志曰往昔役行者入峯の路を慕ひ奉毎に熊野より鳥城乃大峯に入て吉野に出是を順の峯入といふ今は後大蛇大峯より出て道を擁るゆゑに依て入峯年々に絶やがて荒山の如し聖宝ごうず斧鉞を執て土野山より大峯山の後に入蛇尾より始てすゝむ是を截て熊野に出るを逆の峯入といふ

春秋の峯入春を順の峯入といふ本山方是を勤む我を逆の峯入らい當山なれど勤むるの故か　聖護院御宮御峯入の節ハ中邊地と御通行也三寶院御門跡御峯入ハ大邊地を通らせらる

潮清水藥師　川閑より左へ入大辺地通天滿村の南十二丁許にいろ真言宗岡基詳るゆゑ清水寺と号ス　本尊藥師如来弘法大師の作なり

松音寺　同天滿より十二丁ばかり勝浦にいろ相傳後白河院熊野御幸の時此寺にて樂奏ありしゆゑ勝浦の東二丁許海中にいろ傳云補陀洛山渡海の船此所より纜を切て放つなり

帆立島　勝浦の東九丁許にいろ補陀洛山渡海の船此所より纜を切て放つなり

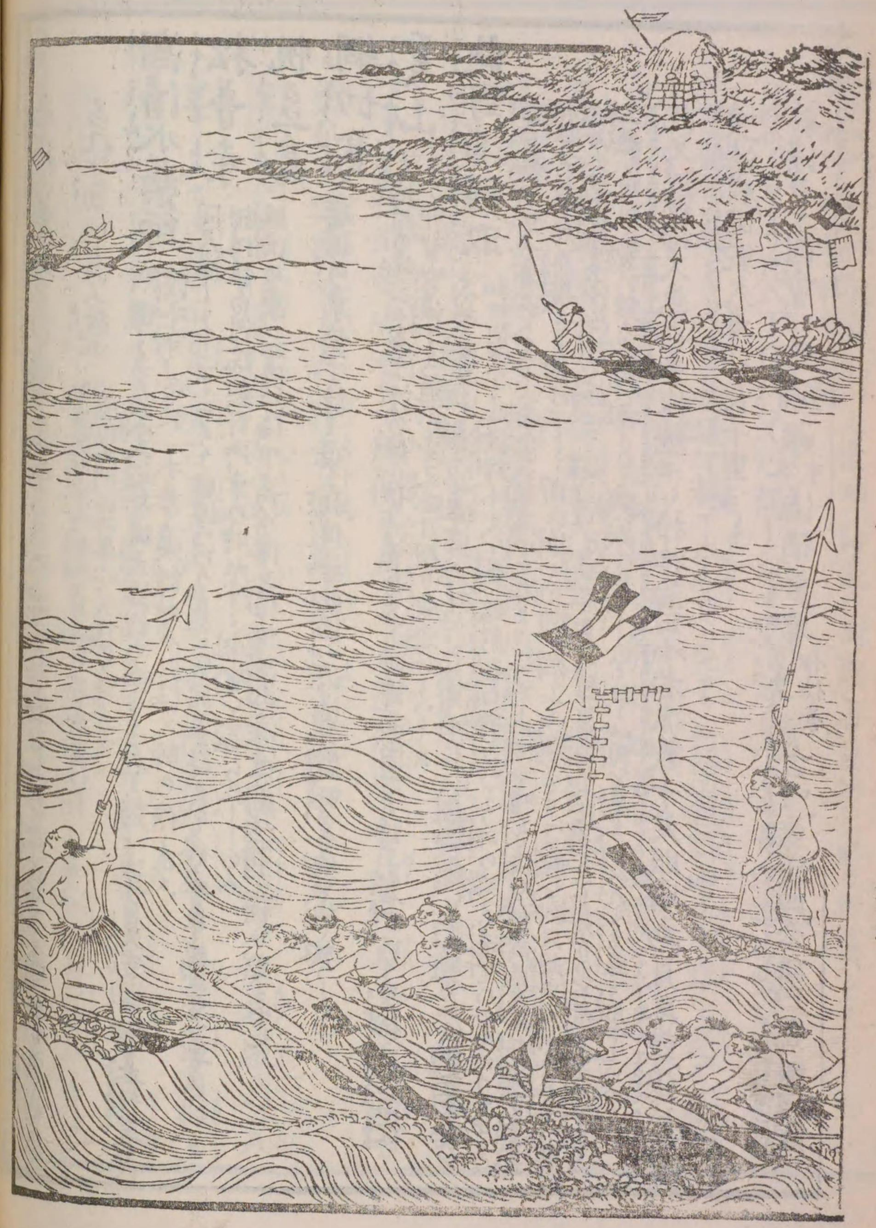
綱切島　勝浦の東九丁許にいろ補陀洛山渡海の船此所より纜を切て放つなり

夏山　太地村の北二十余丁濱の傍にいろ山の高サ十間許西南一丁許に岩穴いろ岩穴より那智山の瀧下に通ずと又每月朔日壹燈ともすと云

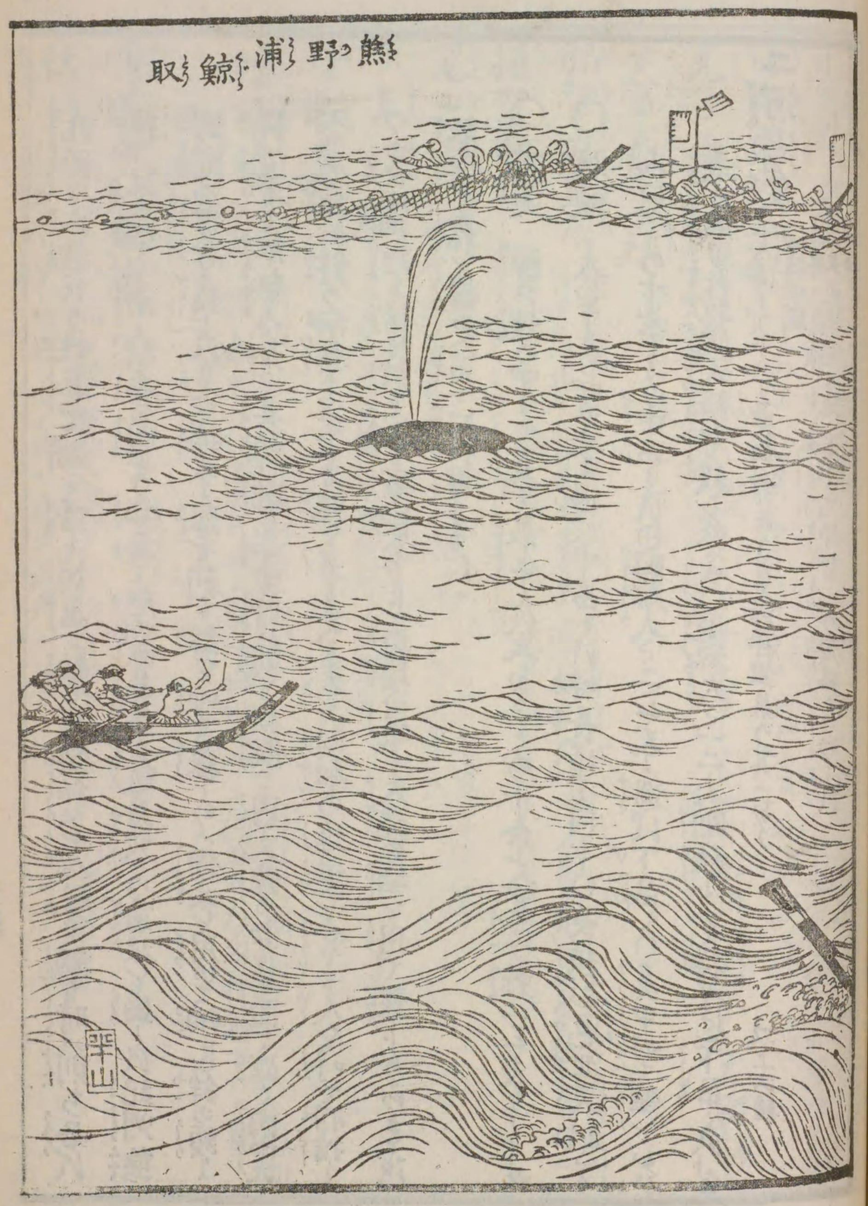
熊野浦鯨取　太地ゞ寄て漁人と爲ス鯨師十人を屬ス一鯨師ハ一船を領ス一船ハ十人の三艘海中を遠目鏡とりて海上をうかゞひ鯨を見出せバ此浦里ハ和田何某と云鯨師千人と屬ス一鯨師ハ一船を領ス一船ハ十人の三艘海中を相圖をもて互に知らせ合ふ其間の遠近ハ帆柱に登りて見る也其長生鐵を用ひて製ス鯨の皮肉ハ厚くして鋼の如し其背に搶の如き小穴ありて此穴より潮を噴出す故に此穴を見て鯨を刺ス小穴より潮を噴出すを指しるしとす山子ハ鯨を屠るに故ハ此肉を屠る刀ぐんも生鐵を用ゆ

說文曰鯨海大魚也本作鯷ニ招物論曰小者亦數千尺眼睛爲月珠鼓浪成雷噴沫成雨鯤大者亦長千里ニ

和漢三才圖會曰鯨音擎鯷本字海猶勇魚万葉訓伊佐魚古呼魚也曰奈雄曰鯨雌曰鯢



熊野浦鯨取



九鯨ニ六種ありり性喜で鯨と嘗く諸魚ニ敵せ𠮟海舶若尾鬢ニ觸る時ハ則ち必ず
覆ル冬北より南ニ行春ニ南より北ニ去る肥州五島平戸辺ハ節分の前後ニ盛ニ𠮟紀洲熊
野浦ハ仲冬ニ盛ニ𠮟是ニ捕ニ鯨と刺く鉾を呼で森ニ〻握木を用ひて柄ニ挿し鉾の頭ニ
縄ニ著て舩ニ牽ニ〻ゆく其鉾鯨ニ中る時ハ則ち柄ニ脱て肉ニ入鯨の動作ニ隨ニ深く肉中ニ
入ニて抜ケ鉾の柄脱ニ〻ゆく縄と著る者ニ失ひ一舩の進退ニ當る人を呼で羽指と
いへ長ケ袖短き袴ニ被て宛も軍配のごし近頃ハ遠く大縄の綱を用て躡ニ〻あまた浅
艘ニて森を擲ニ百ニ一失ニ〻ゆく

○世美　鯨ニ六種の中ニて是ニ最上ニ𠮟大なるもの十余丈甚子鯨ニ三丈ニ𠮟云

○座頭　大なるもの四五丈ニ過ぐ中品ニ𠮟味長須ニ同ニ〻○長須形色世美ニ似ニ〻
大なるもの十丈ニ𠮟中品ニ𠮟○鰛鯨大さ二丈ニ過ぐ下品ニ〻○真甲好ニて鰛ニ食ひ
来る脂少ケ故漁人好ンで殺さず云○小鯨大さ二丈ニ剛猛ニて得ニ〻ぐし下品ニ𠮟云

二河温泉　天満ニ〻十八丁西二河村ニ〻ゆく今ハ半漏郡温泉の其一ニ〻ゆく
功鉢中風
○以上大辺地通の地方ニて那智山の順路ニハ〻ゆく

以上六種

市之野王子社　市の野村街道の右山の手ニ〻ゆく九十九王子の一ニ〻ゆく
川関村ニ〻ゆく那智山ニ登る街道ニ是ニ〻ゆく千ニて瓜先上ニ〻ゆく村中ニ川有橋ニ架ス

千代の井　同村道の右の方山の根ニ〻ゆく　天照太神影向石　同村道の右の方ニ〻ゆく

光ヶ峯　同村右の方山の峯ニ〻ゆく今ハ水ニ〻ゆく昔仏釈帝母神光ニ〻ゆく故ニ号ニ
或曰此池ニ五部の大乗経ニ納ニ〻ゆく

妻富家王子社　那智山の坂口ニ丁許向ニ〻ゆく

那智山大鳥居　那智の村中ニ有ニ〻ゆく下馬石制札　鳥居の前ニ〻ゆく
此所ニて行程凡五十町余

拔架瀬橋　拔所の辺ニ〻ゆく道の右ニ有ニ〻ゆく
二の瀬の橋ニも云水源ニ新宮の滝ニ〻ゆく流れ出此下ニて大瀧の流れニ合ニ〻ゆく

児之宮　道の右傍ニ〻ゆく
下馬所凡四丁許ニ〻ゆく

二王門　鳥居ニ〻ゆく此所ニて六丁攅門造ニ〻ゆく
額曰日本第一大霊験所根本熊野二所権現
二王門ニ入て左ニ〻ゆく右の道ニ〻ゆく

御幸道　未詳道ニ〻ゆく

晴明橋　晴明の社ニ〻ゆく此辺ニ晴明さゝげ奉ニ〻ゆく陰陽の博士安部晴明と云て
社ニ建ニ〻ゆく多ク魔類を祭りもの是ニ〻ゆく

順禮手引地蔵　九丁目の道の右傍ニ〻ゆく地蔵尊ニ安ニ〻ゆく

伏拜　十二丁目ニ〻ゆく新宮道ニ〻ゆく直ニ滝本ニ〻ゆく左ハ本社ニ詣道ニ〻ゆく
伏おがミ奉ニ〻ゆく則ち権現遥拝所ニ〻ゆく

那智山大鳥居
市之野村より鳥居
まで十二丁鳥居
より大門まで六丁
市之野の川ハ
瀧の下流之
市之野

是ヨリ二王門ヘツヾ
一野村
旅人此村に到つて那智山ハいづれの山と問ひしに早
大滝を積翠欝蒼の中に見るゝ名勝畫圖に
書ゝるに聊も遠ふことなし
半山

鐵塔之趾　滝道の左傍にあり。廻国の僧一国一部の法花経を納め鐵塔婆を建てしが今は廃して其趾と言ふのみなり。

金経門之趾　むかし行基上人といふ僧千日堂山に苦行せし滝の上にて金を得たりとて五部の大乗経と書写して金経石といふ名石をおきて金経門と名づけしもの今は廃れ故もあらしの石をおきて金経石といふ。

鐵塔の辺といふ事未詳

御幸道　滝本に至る道をいふ天皇滝の本にて下馬し給ふ故名づくるなり

天下第一那智瀧　下馬呼ばはりて十二丁ばかり遠く隔てて滝見の殿といふ所より瀑を眺望す実に無双の名瀑なり二重に落下る光景白く凄く綿を繰出すごとく吹雪のごとく滝の口より二條に分りて懸り落る又水炭を散し時は露のごとく風雨の驟るごとく吹散し満山に飄散する甚勢ひ恰も白龍の雲間を蜒蜿するとも疑ふ実に天下第一の名滝絶勝奇観といふべし

冥應集曰二重百尺の瀧の水は修禅の峯より流れ出て衆生の罪垢を洗ふ文覚上人は二七日断食して此滝に打たれ船に乗りて沈倫の生類を度し補陀落山の東門幼験無双の霊場なり普

花山法皇は二年千日の間若行の人龍神如意宝珠一顆水晶の念珠一串九穴の海貝一枚と奉られ法皇宝珠を岩屋に納め念珠を千手院に納めて地鎮とし給ふ九穴の海貝は一の滝壺に沈めらる〻九穴の貝を食ふ時は長命して老ひず又事ありて瀧の水を飲むときは壽命を延長せしめんと欲りてなり白河院御糸詰の時水練の者を召して詣らしめ瀧壺に入て見せしめらるゝ猶あるべし

往二尺ばかりあるべし

續古今　那智の山速に落ち流れ流れて年ふる滝

新後撰　二年ゐし那智の滝山のかいもちの世をのがれて後那智の滝山のかいもちの

こゝにゐて滝の白糸いくもをかへりぬる

山家　雲消るもちの木の花ちる月さけて光をめぐる滝の白糸

格玉　かくてのみ滝をも掬ねこと経ばや漢の世中よりの歌の枕詞

玉吟　雲うつる那智の滝津瀬ぞ吹ば古にも影ぞ動ぬる

武乾門院御画

前大僧正道瑜

法眼慶融

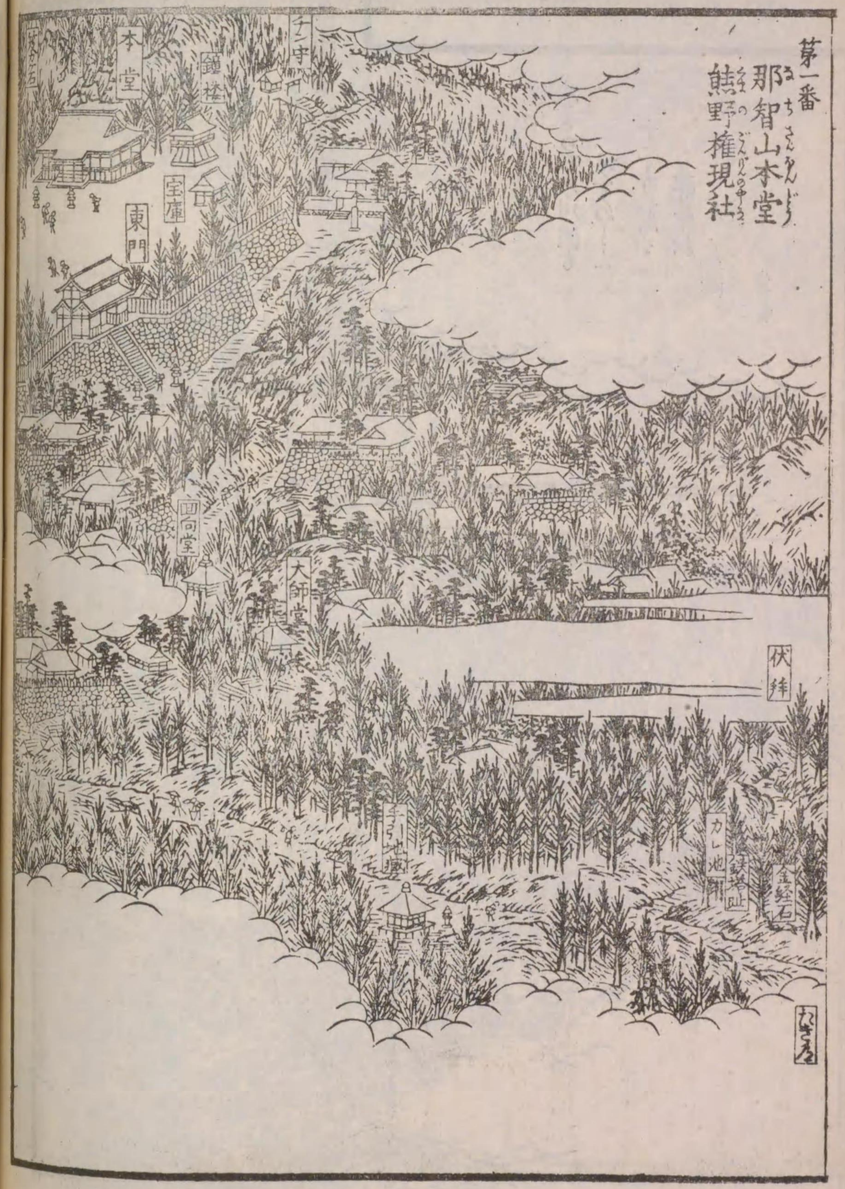
西行

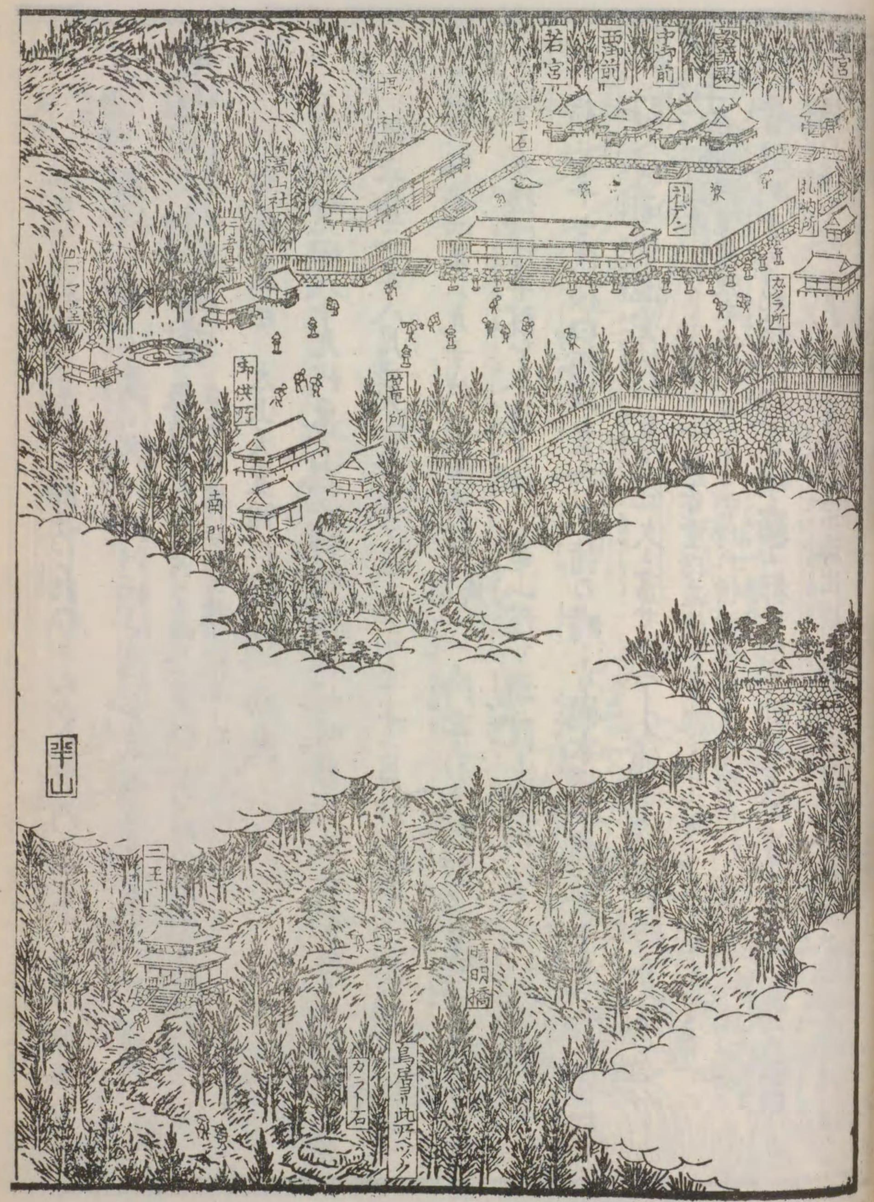
慈鎮

家隆

天下第一那智山瀑布

第一番
那智山本堂
熊野權現社





夫木　雲かゝる那智の高根に風吹バ花ぬきくだし瀧乃山系　仲正

草庵　山深き雲より落る瀧津瀬ちらしかゝりけり雲ハ晴る日もなし　頓阿

亀山院初度卒堵婆

瀧道の左傍にあり高凡六尺許本を以て造る也是ハ其模にして真の卒堵婆ハ宝蔵に納むと云

牌面ノ文ニ曰　太上天皇恒仁　弘安四年二月晦日　初度

王代一覽曰　八十九代亀山院諱恒仁後嵯峨第六之子後深草同腹ノ弟也正嘉二年八月ニ東宮ニ立テ正元元年十一月即位時十一歳

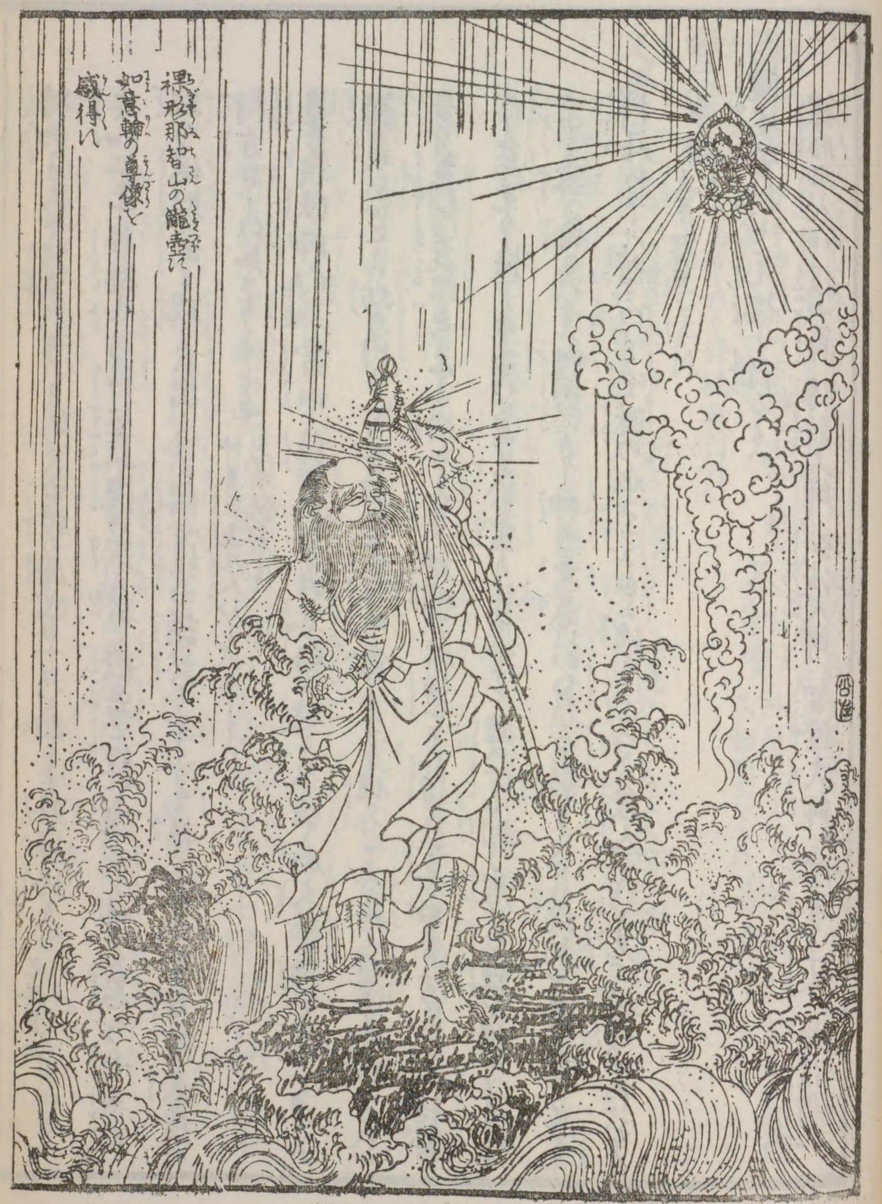
按ニ弘安四年八九十代後宇多院　亀山院御子　御宇なり此時上皇二方ましまはにより後深草院を本院と称し亀山院を新院と言はしとぞ

前ニ七十七代後白河法皇御系詣の時にも瀧本に卒堵婆を立させたまひ智證門人阿闍梨瀧雲坊行真と銘文に書せのへし源平盛衰記に見へたり

千手堂

瀧本にあり本尊千手観音堂内左傍に帝釈天四天王大黒天を安置ハ飛滝権現本地堂ト云一千日苦行の僧此堂にて長日勤行はしとぞ

昔醍醐寺の範俊永保年中竊に都を出て那智山にいたり千日籠の発願し愛染の法を修しけれバ壇上に如意宝珠出現し精修いよ懇誠之已にして七百十日に満す



時勅ありて帰京ありて苦行の僧七百十日を期して修練終る 名勝畧誌

安和二年興福寺の仲算此滝の下に於て般若心経を講ぜしに忽ち千手千眼の像眼前に現れ出る偈心経の講説もありて後ハ山谷の上に昇れり余後ハ行方さへ知ざりしも 仲算原表凡人もあり 元亨釈書出

真義法師 興福 當山に詣でられる時に及んで脚大ひに痛て道をゆくこと難義もしバ坊の肉に入られ其ハ平愈しかり 傍又のでんもれられ又種々にれバ其ハ平愈しかり 傍又のでんもれられ又種々にれバ

尋の苦行の者皆立ち去る 恐らく是神明の試なるべし此上ハ法施をさげて見の比 申ありて真義も実りしてやがて瀧の下に到り般若心経を講ぜられそ心中に密に念ぜられる ハ此講終り神の表意にかもいるハ願ハくハ其瑞相を見るべくあれと待居らるゝに時こうして瀧の水さらさらと流きたりて衆人これを見て感嘆せぬものもなし 元亨釈書出

瀧本苦行七先徳と称するハ

裸形上人 同山 役小角 傳教大師 弘法大師 智證大師 曇豪上人 範俊僧正

此七人とのハ其後ハ花山法皇御修行ありしより数多の名師ハ此所にて修行ありて今にありそ一七日二七日の間断食又一千日の苦行なる事ハ一時にあれ上人と権興ハ此所にて荒行せし事実に明

瀧拝殿 千手堂の下の方瀧の正面に對ふ 不動堂 拝殿の下にあり 不動明王を安ず

愛染堂 川の向ふにあり修練勤行所 愛染明王を安ず

文覚之瀧 一の滝の下流にあり文覚の荒行せし所 一説に文覚瀑布にうたれし此所ハ深淵にて遠藤左近将監持遠が子にして梵中の瀧口の武者

文覚姓ハ藤原名ハ盛遠とよぶ故に遠藤武者盛遠と称ぶ然るに肉感の姨母にあり其昔事の縁にて奥州衣川に有るが帰り上りて故郷に住む一家の華あれども衣川のと号く時に一個の女にあり世人衣川の子あればとて異名して袈裟とぶ天稟容顔美麗にて楊貴妃李夫人ハ見ゝバ知ゝバ愛敬百媚一も欠る事なく詩に心さ情うしくりのを憐ミ多くて恐るゝ事斜もゝバ深窓の内に扶けられて既に成長十四の春を迎へたり斯て一門ありる源左衛門尉渡の妻ともりてこゝに年を逐ふて今年十六ありて盛遠ハ十七歳に成るが其年三月中旬渡辺の摘供艘にありる盛遠ハ奉行に命ぜられ摘の整固とはる折ゝ彼袈裟を見初ゝより意慕の心止あるく終に九月中旬ハ

文覚那智の瀧つ荒行ひ

いくら嬶母衣川が許へ帰ると我儘を架裟と我
北條と談ずと思ひきれバ母の命にかゝる不孝の罪のがれ
如何とも為ん方なし斯て一程と架裟盛遠を諫めしかど夫左衛門尉景渡を殺しゝを
維ぬかを呼ぶく君と係ふせんとて其謀計を約しゝ夫にかりて助くるなが盛遠
斯と露志ゝ尓て夜陰に至て忍び入渡と思ひ終と架裟の首と斬るれど色と忽ち
通心と変じ難髪と名と文覚と更ら霊區と回て修行ると折ゝ此那智山の
瀧壺と入ゝ苦行ゝるとゝ

元亨釈書巻第十四　擅興七曰

文覚ハ苦行とゝも耐忍び勤め行ふ事他人の努くもうゞ所ゝらゝ嘗て那
智山と在ゝ時大なる誓いと發して七日の間滝の下と立て居られゝ折節臘月
ゆうれバ平家物語ニ十二月十日頃の事ろゝく有　頭の髪みる凍つて瀧の水あれと的れ金石の音と操と
同の稍ニ日と過ぬるハ躰も膚も冱て入て氣息ハ絶ぬれども急度立ゝる其身ハ
傾むゝとゝ　平家物語ニ文覚滝壺ゝもの浸つて魔situ悪ゝてゝろゝて魔situ悪ゝてゝろゝ
斯有ゝ時忽一個の童子来つて文覚の頭ゝ

脚と至るまで手と以て擊ちろゝ其手甚ゞ暖なると覚へゝ　平家物語ニ八人の童子来
ゝく文覚ゝ左右の手と取てゝろゝく文覚ゝ左右の手と取てゝろゝ
ゆゝくる天童二人滝の上ゝ下ゝらせめて世ゝ暖ゝ薫ゝ
手足の爪さ紅掌ゝろゝまで摩ゝてゝろゝ有　文覚則ち蒲団と向ゝ回ゝ何人ぞ候ふぞゝ対ゝ回不動ゝ我ゝ
ゝて師と保護せゝらゝゝ言已るや其伏天上ろゝと　平家物語ニ不動明王の御使ゝ
是ゝろも文覚ハ益ゝ行力勇健ゝもろゝが叡慮ゝれ一様明王ゝてハ我と加護ゝのろゝと
著ゝ此上ハ我豈命と慮らんや今ゝ又日限と増つゝ二七日ゝ盈んぞ願ひのごゝく
勤めんゝ其後ハ瀧の水煖ゝて始湯のかゝりて又寒苦ゝろゝもろゝ
去程ゝ文覚瀧水と受て難めゝ二七日と竟ろ　平家物語ニ三十日の後
那智ニ二十日竟ろゝ
内ゝ云ひ戸麻生の谷町ゝ喜八ゝらゝ人工近ろゝ一日ゝたちゝ物狂ゝて罵り駡ゝと妻もど
ろゝて傍辺の人ゝ告ろハ皆未ゝ心ゝて制とれゝ更ゝ叶ゝ是ゝろ人捉縛れろ木と
ゝて言居と立ろゝゝゝ脇なし然ゝろゝ世のろゝざりかハ添ゝ物ゝ任ゝせんゝハ
つゝ立駈ゝ人ゝ為方もゝて其故と求むゝハ何ゝろゝのと申ゝ大名ゝゝ
其里第の稲荷の社と修理せゝれろゝ喜ゝその事ろけゝゝゝろゝて語ろなろゝ

撤せられたる衣を而己たらり又へ用ひしおりしそ又ハ思ひ擔つてせし事とも侍らじ
心つでの息つれバさしも脳ましのる此物狂ひも止ゐ侍しバやがて取りへ請ひ参人し
畏りて頭申せどゆるく氣色もなくて二三日ハ過ぬ夕つかた邁ろひ来るに此傍辺の
鳥の者何ごとろや喜八が家ゐし立る時ハ常ゐ凌ひかれて世を渡る者なり斯ての
狂ひすと問ふ訪ひ来て腰のいたうりに着衣けしれぞくり引かきむしりて赤裸のまゝにて
つゝ入来たりいかにつゝ喜八ハ物に狂ふと言ハ実にして喜八畏りてさ候ふ
侍まで其れハ唯かり初める事に侍るとおもしく人の申おほくやし袁ひしつゝ
さぬ人ゝり此を見るに此男ハ平生に喜八が傾の下ゐて女子をも養へバものを
いたて恐属ゐ事もれ打返し斯くなる最心得ぞこれハちぎれおもしても適怡なる
事もなくひとし猛く思ひあるにいとう怒れる形容してまた猶此喜八とあやすれ
らんしく落るんやさしぎバ等と同みせむと言ひつゝ畏みて今に落侍りなんと
いさゝる責のひとと手をもみりて俺ひせあえ浅ましくして甚苦しけにさらバ必と
言て出てつゝ跡ゐて物に狂ふて唯同じさるなり家内の人々もし斯恐れつゝん猶

物欺く狐の所為かと思ひとり彼男も同じ様に心も得ねバ又の朝とく来きバ喜八
畏るさぬ昨日に異なれバ扨ハ欺きにハ有しと思ひてあざむ落ぞしむ唯しく責催
して備ふりね出て去るうけ見送りて物狂ひ高やかに打なりて嗚呼の奴なる己れと
怒るしし思ふしつ伝ハあど今ハおちつきん甚苦しげに見へつるのとといふバ物狂ひ
さるもへ有事どもしし己むかし熊野に住しおろ文覚上人の荒行すとて那智の瀧に
うたれて座しつると見るにしに氣色つよし顔つき猛く怒りて最おそろし氣なり
しが渠が肩腕に其形を画きなるをよしハ唯其となりの心地して身ふるみて聴しがハ
覚つバ畏まりてひきし答へしバ人にいさされるなし且いられしうて彼いちら行の
繪を物に書く壁に押つけて置しかバ物ぐるひ見るたびにさましうおびつく怯ゆ
落ちりりと年し随筆に見つきりこれバ文覚上人の荒行ハ実にすさまじかりし
とし此物語にて思ひやるべし

遊那智山
二十韻

西福春随

那智大悲閣　巍然聳碧岑　環山高万丈
瀑布落千尋　不雨岸凡潤　無雲渓半陰

下田谷

狐著文覚が
画像を恐ぬ
日大明神
皇太神宮
幅大菩薩
平山

那智山如意輪堂　記岸波寺ニ云　紅僧坊中許多ノ天台真言高此
五間四面異向　つゐ仏も妻帯ふり頽紀の道者と寄ん
本尊　如意輪観世音菩薩　長一丈二寸座像
抑當山如意輪観自在薩埵傳曰人王十二代景行天皇の御宇何もの
風ニ吹ゝるゝ熊野の浦ニ漂ひ着く舩中ニ居りの七人既ニ二人本國ニ帰ると一人
熊野の地ニ住る是と裸形ふり（冥徳集ニ云是天竺の沙門ふり）而も袈裟を
掛る也日本の人見て裸形上人ふらるゝ（裸ニて袈裟を
按ニ此時佛法いまだ傳来せざる上人の号始めて神蔵ニ在て練行の功を積ゝ夫ふり那智
うつゝび後人尊んで上人と称するもの）
山ニ登りて練行する事凡仁徳天皇御在世まで七百余歳を経ふり朝ニハ滝の水ニ身を
清めタベの岩窟ニ座ス所謂摧化の異人ニてすゝる長寿あり或時滝壷ふり御
長寸の尊像出現ニて光明赫奕ふり裸形これと感得ニ栄の庵を結んで安置ニ
勤行おこたる事あ（今の本堂の地あり云）然れども甚頃ハ佛法いまだ本朝ニ傳ふらざれハ
何の像ぞも世ニ知るの（ママ）終ニ裸形入滅ニ庵室も廢ニ時の人も只庵室の
趾とのミ言傳ふ爰後欽明帝ニ至りて佛法
本朝ニ弘ふる時ニ生佛ふらゝる人帝願の事ふりて熊野山ニ糸詣ス然ニ裸形

夢中ニ現れ生佛ニ告て曰漢の明帝金人を夢ニふり佛法東漸ぜり今又
時いたりて我朝ニ弘る往古吾當山の滝壷ふり得奉ふ尊像ハ如意輪観世音
菩薩ふり今庵室の趾ふ石と重ね一所ニ祭ふり抑本朝の補陀落山ハ此那智山
ふり菩薩ふゝらゝも観世音の利益ニ越たる（ママ）是婆婆有縁の薩埵ニて
未世の凡夫ハ殊ニ此尊を憑ミ奉るべし尤此山ハ本朝第一の霊地ふり急ぎ此青を
帝ニ奏ニ奉ふて一宇を建立ニ金輪聖王天長地久の守ふらゝ末代の衆生ハ
渇度すゝミ新ニ霊夢を蒙ふてのひ信肝ニ銘ゝて生佛急ぎ都ニ奏ニ奉ふり
ゝれバ時の帝叡感斜ならゞ本堂を建立ニ造ニ庵室の趾ふり得る所の裸形感得の八寸の尊像ハ如意輪
本尊ニふさゝれバ滝ふり出現の観音薩埵ハ尋常もゝゐ尊像ふれバ霊験
日ゝに新ニて代々の帝都尊敬ひさゝゝび都鄙遠近の貴賤ひもとゝゝび

西國順礼第一番の霊場ふり観音霊場記大意
或説ニ裸形の傳詳ふらゞ其身裸ニて袈裟のゝうけふる故ニ寺の人裸行者ニ言ふそ
又山海経おゝびニオ図會を閲すゝバ名夷国又道明國の人ハ常ニ衣服を着ゞゝふるゝバ題おの

國の人〻や又七百歳を経よ〻とうけんば不死國の
人〻やつどう一方宝全書曰不死国八舎千歳ゑ
霊験真抄曰那智山の躰よ〻〻〻妙法最勝の岸高く〻て樹頭盛衆のつらひと
遷一二重百人の水晶ハけつよ〻〻白露の波ゝ渾ハ此處ハ補陀落山の東門惣
して光験無雙の庭利生殊勝の砌もり倶ゝ黄金瑠璃の玉と拋つてゐ〻と
室の海濤ゝ垂れ居と南海の濱ゝトハ二山十二の玉の間垣おとぐく八万四千
の霊光堆一是を以て神験疑ふべ谷の響ゝ應ずるごと〻佛力限もく月れ
水ゝ移るごと南無歸命頂禮観世音菩薩ト云〻
誄哥 補陀落や岩うつ浪ハ三熊野の那智の御山小鄽ゝ流ゝ清
按ゝ補陀落ハ観音の淨土もり花嚴経曰於此南方有山名補陀落迦彼
有二菩薩名観自在一云此補陀落山の岸ゝ打よる浪の音ハ歷却不思議
と同ゑ聽もの缺もりとの苦と滅せり其岸より波も吾朝の那智ゝ滝
の水ゝ音も同じ〻妙音微妙のひびもあるとの心もり畢竟ハ那智の御山ハ
本朝の補陀落山観音の淨土もりとら〻義もるべ

那智山權現社 如意輪堂の右ゝ列ハ 例祭九月十四日 臨祭 同十八日

本社 相殿 拜殿 解脱門 伊弉諾尊 或ハ早玉男命ともゝ西御前の左ゝ垂上
中御前 國常立尊 天照皇太神 大己貴尊 或ハ國挾槌尊 豊斟渟尊ともゝ中御前の左ゝ垂上
證誠殿 若宮 瀧宮 拜殿 五社の正面ゝより祭祀神拜ゑん於て勤む
摂社八座 東ゝ向ゝ一殿ゝ列ハ
禪師宮 忍穂耳尊 聖宮 瓊々杵尊 兒宮 彦火々出見尊
子守宮 葦不合尊 若女一王子ともゝ是よでを五躰王子ゝ称ハト云
十萬宮 相殿 豊斟渟尊 國挾槌尊 飛行宮 大戸道尊 水持宮 一面足尊 是よでを四所明神ト称ハト云
一萬宮 飛行宮 大戸道尊 水持宮 一面足尊 是よでを四所明神ト称ハト云
滿山社 摂社玉垣の外ゝより護法善神ゝ云 八百萬神と祭ゑ 鳥石 摂社の前ゝより 泥土煮尊 勸請宮

神樂殿 拜殿の東にあり 笈掛石 如意輪堂の後にあり 鐘樓寶藏 ともに如意輪堂の左の後にあり

行者堂 護摩堂 ともに滿山社の右に並ぶ 新客ノ瀧 本社の南三丁許にあり 滝本初心の行者此所にあつて執行はしらふ

南門 行者堂の東にあり 御供所 籠所 ともに南門の傍にあり

東門 如意輪堂の前の左にあり 寂光橋 東半町許にあり 井上のくしとも云

尊勝院岩窟 本社の北一丁ばかりに有天神地祇降臨の所ニ云 滝本苦行の僧年中三ヶ度の祭祀をつとむ 或云いまく此窟へ宝珠を納むといふ

鎮守社 同所にあり 少彦名神を祭るト云 此所大雲島坂の道すじ之此街道ハ奥に出し山中滝禪定の名所を左に記す

回向堂 奥詣道の傍にあり十六丁目 本尊手引の観音を安ず 大師堂 回向堂の奥にあり 本尊弘法大師を安ず

釵ヶ淵 一の瀧の上四十間ばかり水上にあり其形紐長く釵のごとし故に号くとぞ 右あの地に至るにハ滝禪定して身を清浄にし滝預りの僧坊の案内を以て至る是より次ぎ次ぎ山上あり

寶螺石 一の滝の上右の岩上にあり 鐘石 同左にあり 瀧之口 此所に注連をかゝる長さ凡八間余ト云此辺より眺望すれバ南海渺漫として絶景之

轉法輪峯 釵が淵の上をいふ 山上堂 同山上にあり不動明王を安ずるに不動堂ト云 聖護院御宮あらん籠らせのふト云

柴燈護摩之壇 不動堂の傍にあり 錫杖杉 同所に有 布引瀧 護摩壇より二丁許傍に有 横に走る滝あり

花山法皇御庵室趾 不動堂より二丁余に有少しく平にして礎の跡あり 御所持の茶碗小壺ホ名の樋におさめ此所に有俗に挾筥石ト云 元亨釈書云 花山帝那智山に入りて出ざる事三歳其厨に苦しんで精進修行ありトかゝるハ則ち此所にましましけるにし

櫻枯木 同所に有 枯のこと様のこと

木のもとをすみかとすれバ月にむかひ人にあらぬこれ那

花山院

花山院の御庵室のあとの侍る前に桜の木のさぐりを見てすゝとすれバとまるせなりけんとおりひ出られて

山家

木のもとにしたりけんこれをこゝろ那智の花をみるにて

西行

二之瀧 不動堂より四丁半ばかりに有高凡三十間ばかり或三十丈とも云其流れ岩に當て摧け散光景尤奇之滝下測して其深さらに測ぶらしに観音出現しゐる滝あると以て如意輪の滝ともいふ

西行山家集に那智に籠りて瀧に入堂し侍るに此上に一二の瀧おこしまれ夫へまいぬ

ありし申れ住僧の侍るにしてありしを花や咲ぬらんと尋ひまゐしかりける折ふして便ある心地して分まいりて二の滝のもとへ急をつさしかり如意輪の滝とあん

由と聞て拜しけれバ折し打傾きたるやうに流を下りてたりとく覚へりうらし

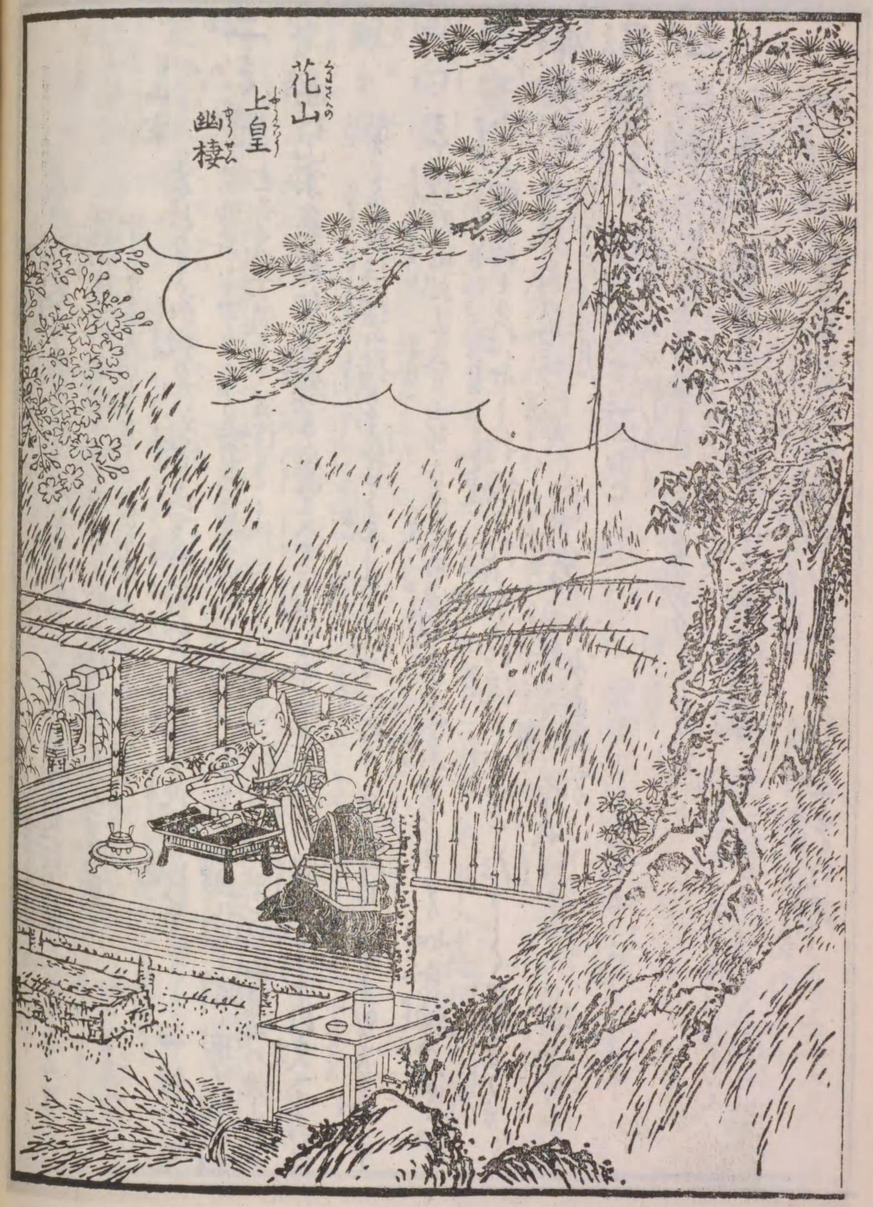
屏風岩 二の滝の前の山にあり恰も屏風を立てるごとし 猿岩 形似たるを以て名とれすなる巨岩あり

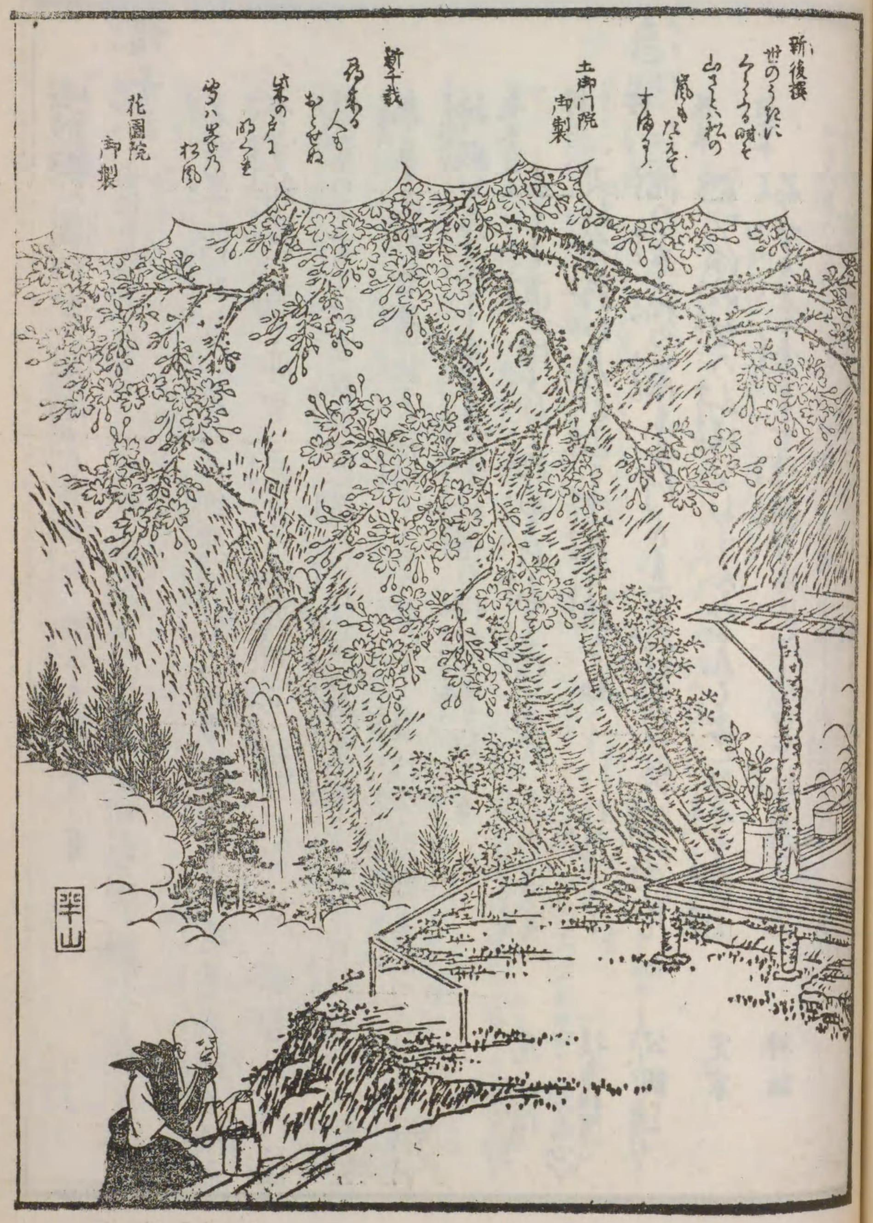
最勝ヶ峯 二の滝の上の方にあり也 最勝王経を納むる所ト云

三之瀧 高ヶ凡十間余二の滝より五丁余奥にあり其勢い二の滝にかはらず又一奇とすべし 三重の滝おもしろしに殊にたうとく覚へて三葉の

山家

身に積るものとハの花も浴ませてんすとぬるこゝろの瀧


花山
上皇
幽棲


新後撰
土御門院
御製
新千載
花園院
御製
半山

此余奥ノ瀧　岩屋ノ瀧　振切ノ瀧　滝谷ノ瀧等東北の方に有

帽子石　本社の東五十町ばかり山上にあり土人傳云役行者ここに帽子を残し置のち石となりしとぞ　護摩壇の跡　瓶子石　亀石等あり

名勝畧誌曰那智山権現の創建何代よりの事詳ならず延喜式神名帳に本宮新宮を載て那智を載ず又本宮新宮に祢宜祝部ありて那智は沙門優婆塞のみ有て祢宜祝部なし然れば後世浮屠氏観音安置の後権現を勧請し奉るか又那智舊記には裸形はじめて建立し其後空勝朗善等つゞいて十二所の神殿を造立すといへり其余社僧の傳説區々なりとぞ

夫木　石はしる瀧にまがひて那智の山高ねをみれば花のしら雲　花山院

同　みなぎはる那智のお山に澄月の清さまさりに松風ぞふく　後鳥羽院

同　瀧の音は松の嵐もうけりまね那智のお山の秋の夕ぐれ　公朝

愚草　雲かゝる那智の山路いかならんみだれを過し遥き夜の闇　定家

新古今　おもふ事身に余るまで鳴瀧のしばしよどむを何うらむらん（恨むイ）　神詠

此哥は身のまづしき事をなげきて吾妻の方へ下らんと思ひ立ける人の御前に通夜して侍りける夢にみえけるとぞ

按に色川郷に鳴滝といふ所あれば依て名所集に載られども此哥は色川郷の鳴滝をよめるには有ざるべし此那智の滝の事とすべしと名勝畧記にいへり

武蔵の國にありける人熊野に詣で證誠殿の御まへに通夜して後世の事いのり申ける夢のうちに

色ふかく思ひけるこそ嬉しけれ今の誓ひをたのむにつけて

應照法師　當山に住居の時代詳ならず　生身にて火定につきし人なり　妙法山縁起には弘仁年間の人と有

薬王菩薩の焼身焼臂の行を勤めんと慕ひく

釈應照は紀伊國那智山に居住せり法花を誦するとて薬王品にいたる毎に随喜心を生じ其跡を追慕ひ思ひけるが正しく一時穀物塩をたちて松葉を食し身を焼くそなへをはじめけるが其期にも成ぬれば新しき紙の法服を著て手に香爐をとり薪の上に跏趺して西方に向ひ諸佛を勧請し發願して曰我今ここを以て妙法蓮花経に奉り頂を以て上方一切諸佛に献じ脚を以て下方の一切諸佛に献り背を以て東方一切諸佛に献じ胸を以て西方一切諸佛にたてまつり左右の臂を以て南北二方の一切諸佛に献じ五臓を以て五智如来に献じ六腑を以て六道の衆生にほどこし此善根を以て無上道に回向して速に菩提を得んと欲するなりと言い終て自ら火をつけて薪をたき手に定印を結び口に妙経を誦しけるが煙はよく

嶺の巓る時も亦た経の音は乱れざるを其煙の氣の薫ずるも沈檀香を燃すが如く相似たり扨火の滅て後までも光の余かやうさて山谷をてらし明らかなれば鳥は数をつくして和らかなる鳴をなし飛ひかけるも甚聲宝鈴の音の如くもれば遠近の間をてらさを同見る程の者数を深く嘆き沈むばかりあり

大雲鳥坂 那智山本堂の後より山を登ること二十許行て左へ入る小道を妙法山と名く妙法山まりて直道の十五丁目出る大雲鳥の山中道の右の傍に有弁天の社あり是より名づく

辨天森 滝の傍に有弁天の社あり是より名づく

辨の滝 是より妙法山の道へ行ば直道へ

花折坂 那智山より妙法山へ登る道十二丁許行て花を折て佛に供ずる故に名くるそ

妙法山阿弥陀寺 那智山より妙法山へ登る道十二丁許行て花を折て佛に供ずる故に名くるそ

本尊 阿弥陀如来 弘法大師一刀三礼の作と云

無縁堂 本堂の前右傍にあり

閼伽井 本堂の前右傍にあり

眺望亭 大門の外にあり

鐘楼 中門の傍にあり

地蔵堂 無縁堂の右にあり

浅黄桜 大門の外にあり

弘法大師禮拝石 大門の外にあり

樒山取来峰 当寺奥の院十方浄土より本堂へ手折て佛に供ずる道の傍にあり

本尊 釈迦牟尼如来 長二尺余木佛白檀木にて作れり

右霊像を紫銅にて摸し漆箔を施せり

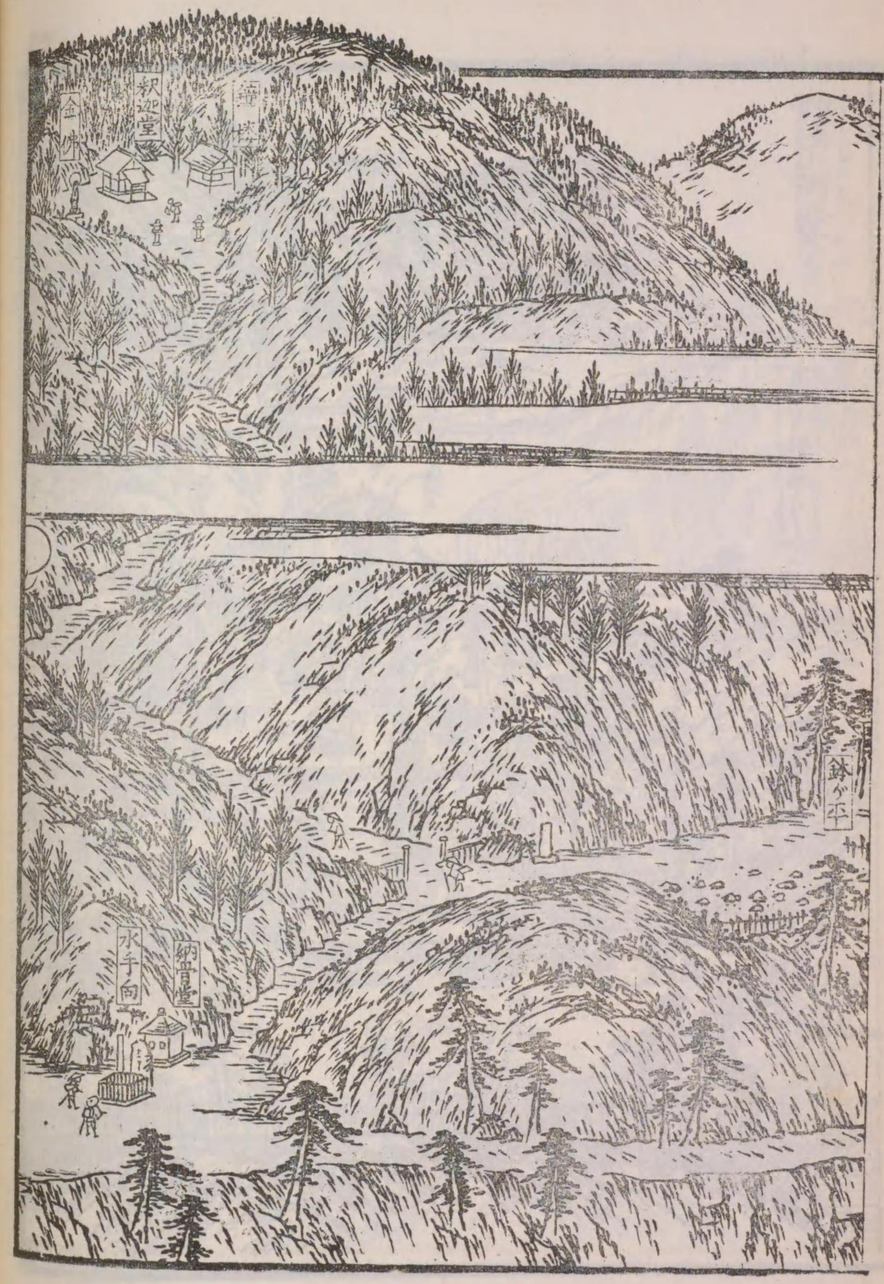
一鐘 釈迦堂の左傍にあり

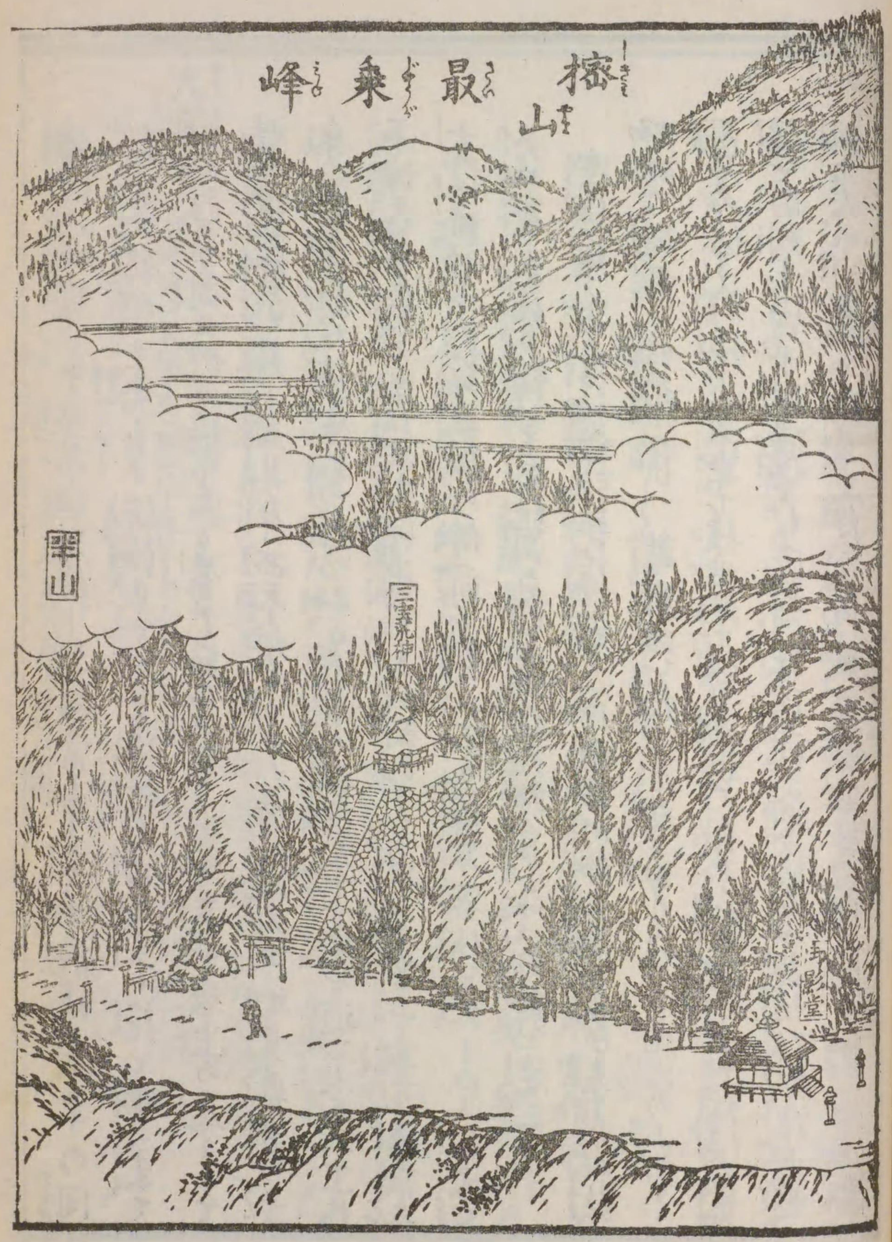
銘曰

然巧妙をつくしてそのことばをつくすといえども

當山十方浄土釈迦牟尼佛八王四十二代文武天皇の御宇大宝三年癸卯の春唐土天台山蓮寂大士なる東方より當て霊地の氣瑞あるを見て則ち白檀木を以て一刀三拝の霊像を刻み遠く相随ひ来りて此山に登りて一千日ばかりの夜瀧行を修し佛前にあつて法華懺の法を行ひ願満るに至て此峰自然に曙て霊像の如来と共に光明を放ちて此峯を照らすのみならず山頂を十方浄土と号し山を妙法山と称する此蓮寂大士と言は始なり

妙法山阿弥陀寺


釈迦堂
鉢ヶ平
納骨堂
水手向


榕山最乗峰
平山
三宝荒神
玉影堂

唐土天台山に於て法華経を修し、其後當山に来つて前後七八年の間
住しの内、毎日本尊に佛法守護の頃あり、亡灵多く花を携へ来て
如来の尊前に供し拜すること屢々ありさるによりて末世衆生の為にとて
此尊像を當山に残し置其身は西天に帰せりとぞ傳聞此大士は迦葉尊者の変
身にて吾朝を済度の為に渡らせ給ふ事後九十一年を過ぎ人王五十一代
平城天皇大同元年弘法大師唐土より帰朝ありて直ちに當山に登り道寂大
士の旧跡を尋ね此尊像の佛前に於て二七日護摩密法を修し給ひ又七
昼日夜こもに参籠せる処絶間なく見給ひ大師自ら一口の鐘を建立し
空海が抑々の通ひ一鐘弥陀の浄土へもに南無阿弥と縁の深き夫より此熊
野路の難所を修行し給ひ 熊野路を物うき旅とおもはず死出の山路を
思ひたちぬと詠じ給ひしより後世菩提の為にとて自ら一刀二礼して弥陀の尊
像と影向し山の中腹に庵をむすび阿弥陀寺と号し給ふ其後弘仁年間應
照上人此山にのぼり釈尊を拜し海内無二の霊場あることを感し林泉に奏

剛とこげ迫郷の民家へ課役いりうれば衆人ちからを随喜し山をひらき道
通じ堂塔日にそひ全備せり然るに若干の星霜を経て終に堂舎も
破壊し及び霊像も雨露のために朽ちんとす是によりて邦君より霊像を再建
の堂に安置し奉り閉扉して秘佛となし奉れり

大器記

然るに當時の住職耕玉和尚丹誠を抽んで遠近に勧進し本堂僧坊をも
境内の結構を再興し且釈迦牟尼佛の霊像を紫銅を以て摸し秘佛堂の
傍に安置し参詣の男女に拜せしむ正しく中興開山なり

又當山の門外より向ふに望む南海洲々
宇久井勝浦二河の入江森の浦太地の端遠く浦神大島山成島綱切島より大洋
往来の廻船恰も栗を散すがごとく風景言語に絶して実に熊野路の勝地なり

大雲鳥坂

妙法山大師堂の傍を過て山径北五丁余を経て直道の十五丁目に出る
妙法山への四り凡一里六丁許とぞ是よの道とりうべし（紀詣すべき地）

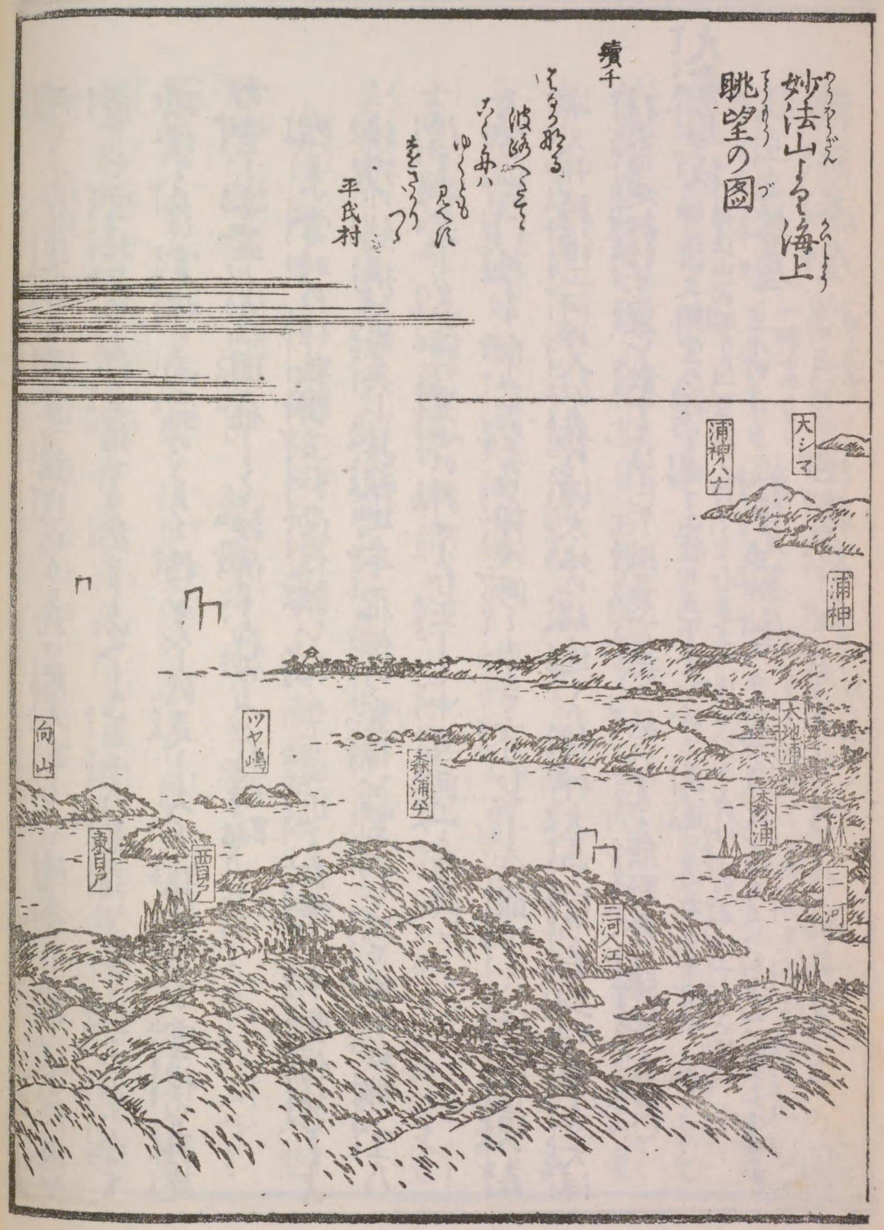
上立石茶屋

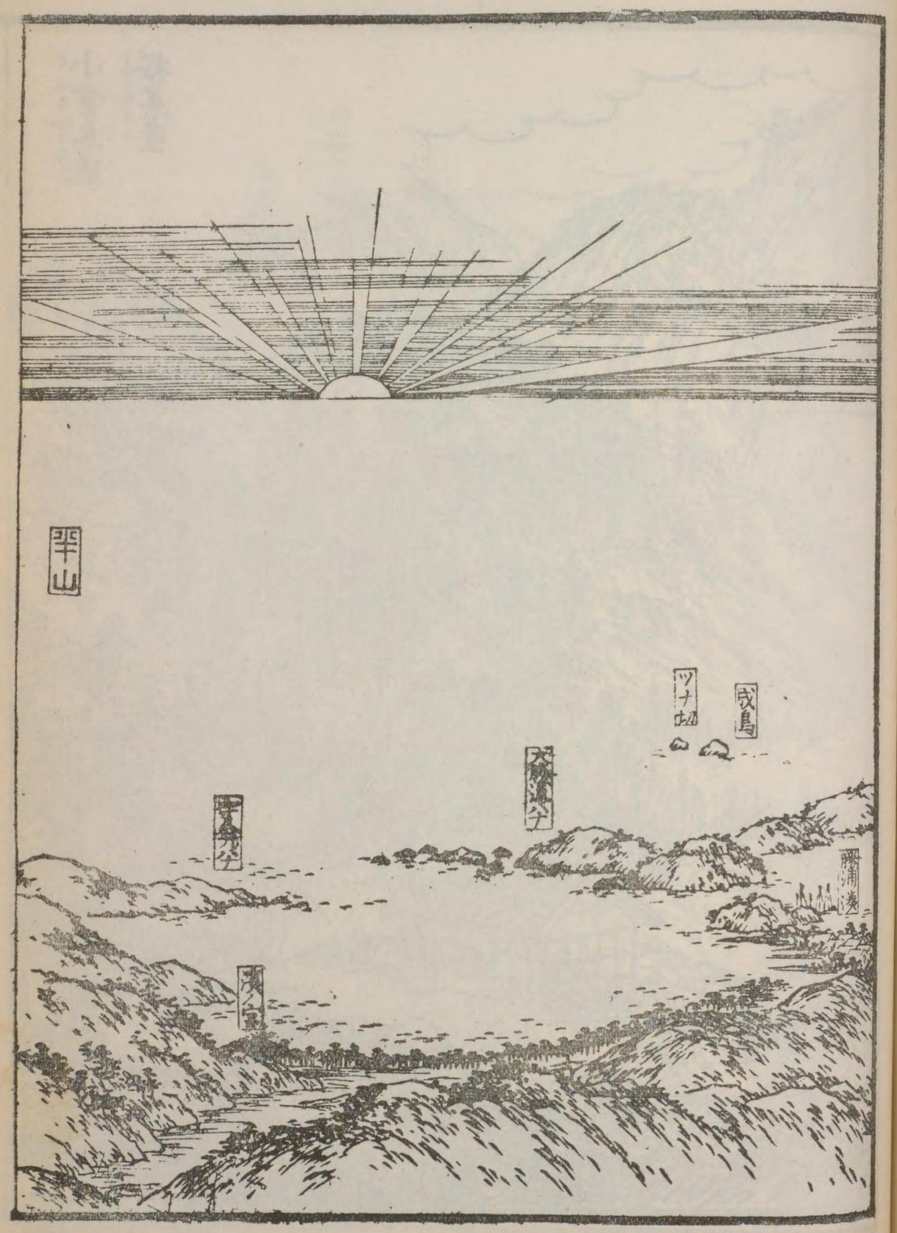
三十町ばかり 船見茶屋

五十五丁目にあり此所より海上を見る（風景）
一軒家なり 帆舟をうかべ（舟見茶屋と号す）

擂餅茶屋

百十九丁目にあり傍に地蔵堂あり
一けん家


妙法山より海上
眺望の図
續千
平氏村
大シマ
浦神ハナ
浦神
大地浦
向山
ツヤ嶋
泰浦
泰浦
三河
三河入江


平山
成島

小雲鳥坂
桜茶屋

越前茶屋 百五十町目より先地蔵茶屋より次て百廿五丁目にあらし茶屋といへる軒家ありしかとも近年断絶に及ひ故に此所まて休息一所もなし此一軒家是より小口村まて五十町人家なし都て此街道ハ食物ハ勿論草鞋のるいを用意すへし時によりてハ此茶屋もなき事あれハ外に求むへき家なし嶮岨の山径にて難儀に及ふ事あり心得へし

小口河原 小口村といへり大雲鳥上下二百丁を経て小口村といへる西村川古和瀬川ありて別に小口河原と名つくる所あれとも村中に川あるを以て小口河原といふなるそ

山家
雲もいや志古の山路ハさておきつ小口か原のさひしからぬか　西行

小雲鳥坂 哥にハおぐち河原とよめり今ハ小口村といへり志古の山ハ志古村といへり小雲鳥坂といへる山ハ則ち志古山なりといふ雲鳥ハ雲鳥坂の事也
小口村の間半里余其間にいささか人家ありて楠窪大山中根西村古和瀬長井ホの小名ありいづれも小口村なり小雲鳥坂ハ上下百五十丁難所大雲鳥に同し

桜茶屋 坂口より五十町目にあり前に大木のさくらあり
故に号く一軒家あり

石砥茶屋 七十五丁目にありむかし此山中より砥石出しゆへに名とす今ハ出すといふ
一軒家あり

松畑 九十五丁目此地ハ宿茶屋二軒あり是より受川まで五十五丁のあいだ人家なし

受川 音無川の下流河岸の村々受川村とも書す是より本宮へ廿五丁又湯の峯への道あり凡高野より無果越を経て本宮に參詣せし人此地より湯の峯に出る有行程一里之
音無川の向ふにあり音無の里といひ又本宮村ともいふ

熊野本宮

第一宮 伊弉諾尊
伊弉冊尊　証誠殿 御門の正面にあり

神樂殿 式日御神楽を奏する　一の宮の西にあたりて社の後にあり

第二宮 速玉男命 中ノ御前と云

第三宮 事解男命 西ノ御前と云
右両宮一棟にして別殿なし其中間に御車の玉座あり
是當宮の秘決也と云

第四宮 天照大神 一の宮の東に並ぶ
國常立尊 相殿 若宮と云
以上上四社と云

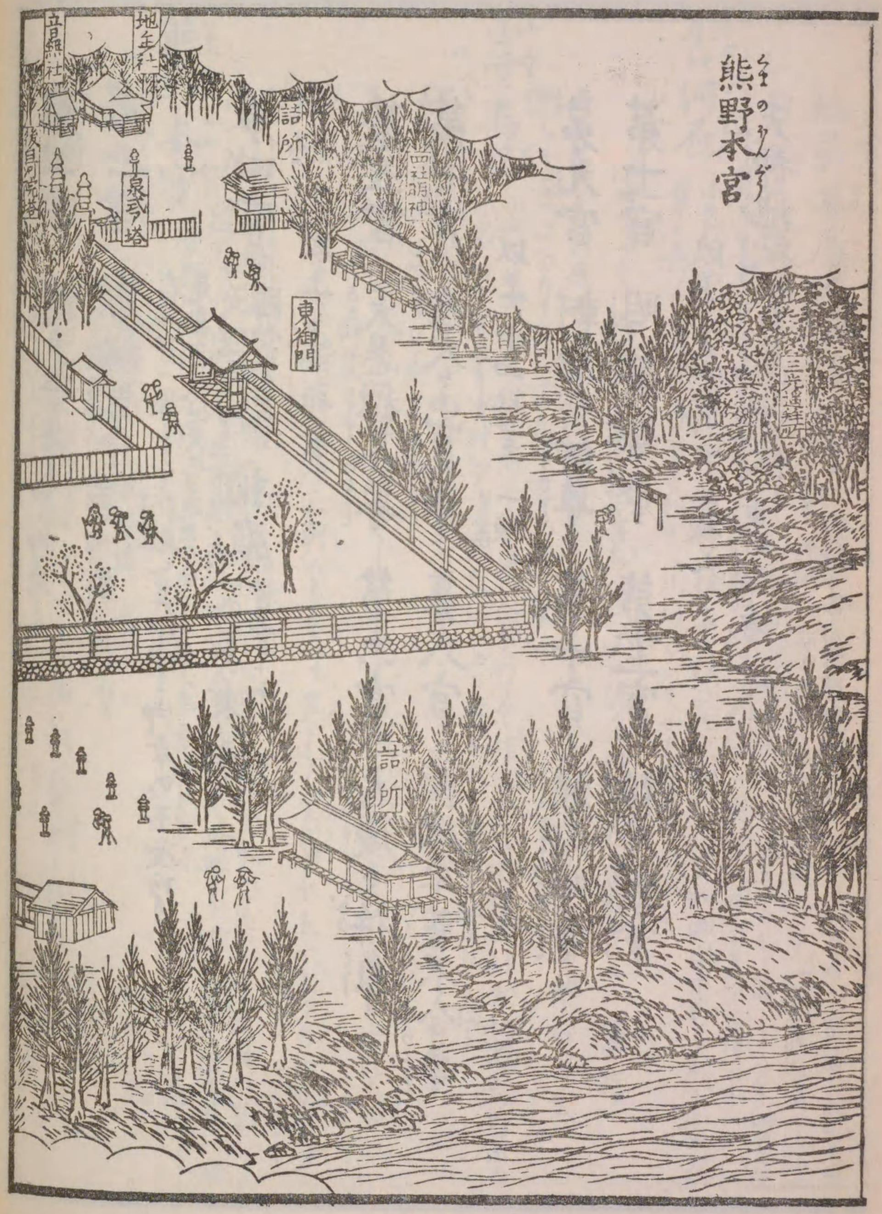
第五宮 天忍穗耳尊　第六宮 天瓊々杵尊

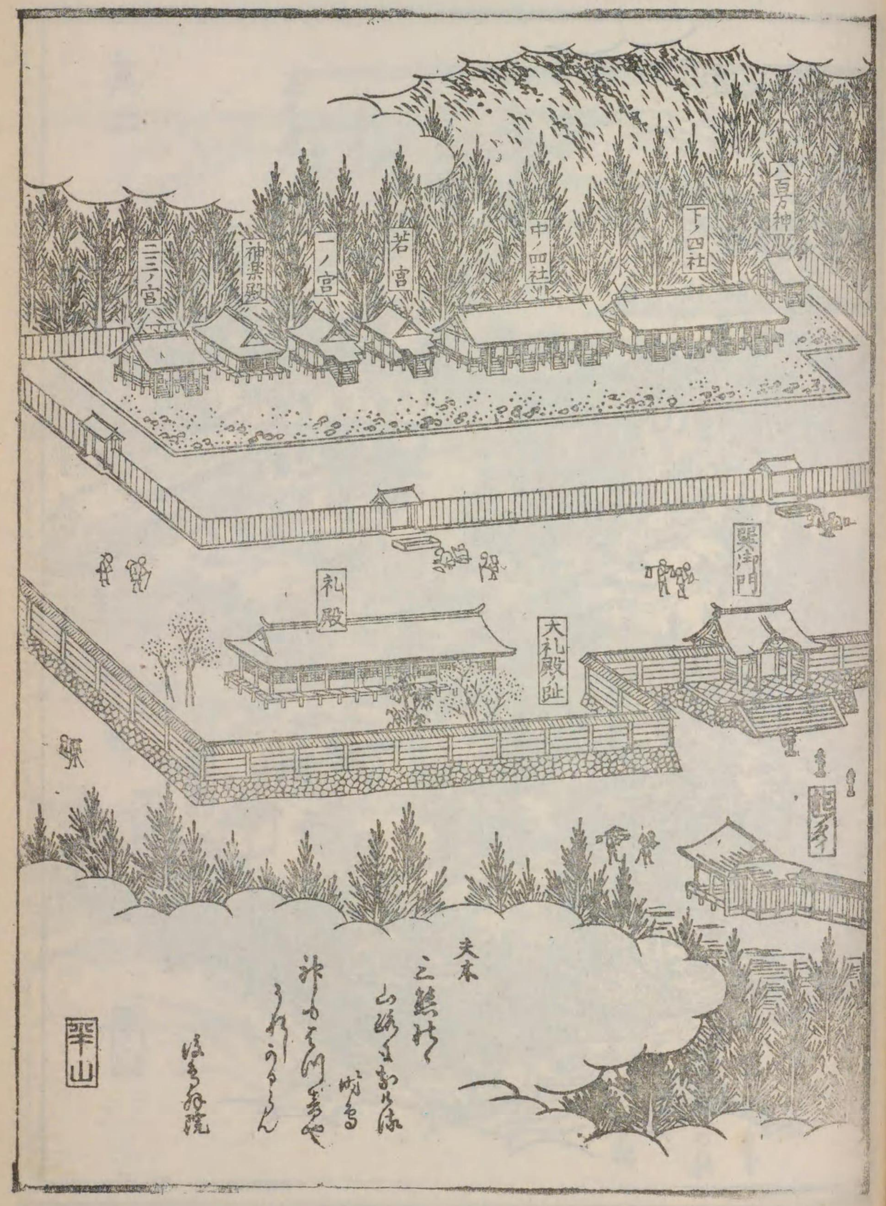
第七宮 彦火々出見尊　第八宮 鸕鷀草葺不合尊
以上中四社と云 一棟之

第九宮 軻遇突智尊　第十宮 埴山姫命

第十一宮 罔象女命　第十二宮 稚産霊命
以上下四社と云 一棟之

天神地祇八百萬神社 東の端に有
右第一の宮より万神の社まで築地の内也


熊野本宮
立鼎社
地主社
詰所
四社明神
泉式ノ塔
東御門
詰所


八百万神
下ノ四社
中ノ四社
若宮
一ノ宮
神楽殿
二三ノ宮
礼殿
大礼殿ノ趾
平山

其二

大禮殿 巽御門の西にあり以前ハ折行二十八間梁行十二間にてありしが大木の危きにより造る柱員百廿九本　大和大納言秀長卿建立と云然るに明和七寅年回禄にて火上りしが其後再興あり今ハ仮に小社殿を営ハ則ち其旧趾ハ小礼殿の後にありて俗に千畳と云ふ所なり

例年正月七日夜二月三日夜牛王宝印神事大々神楽修行ハ此殿に於て行ふ

大釜 建久四年の銘あり　**御供殿** 西御門の傍にあり此殿に於て神供の湯釜なり　毎日神供を調餅ハ毎歳正月二日連哥ありハ御神詠ハ山のうちとハたの撓ふる　腰ハ例年尾崇氏吟之

連歌所 式日野虎亀之太夫奉幣之節ハ管絃役人勤之

管絃所

地主権現社 二座　**高倉下命** 穂屋姫命 東門の外 例祭 三月廿三日の夜 十月廿三日の夜

旧事記に高倉下命ハ磐余彦尊の時侍臣とし一男七生む天村雲命これ是本宮社家の祖神なり異妹穂屋姫命を妻とす

巽御門 唐門造にして表檜あり

音無天神社 少彦名命 地主の社前右の傍に有

神官結所 地主の社前にあり當社守護職の結所なり

後白河院御幸之塔 天神の社前右の傍に有 石の塔婆なり

和泉式部参詣之塔 御幸の塔の右に並ぶ

御幸道鳥居 本社の北に有

乾御門 本社の不開門なり

摂社四社相殿 市杵島姫命 住吉三神 瀬織津命 四建角身命

御戸開社 手力雄男命を祭る

右往古おのおの別宮ありしが明和七寅歳炎上の後相殿に祭るとぞ云

三光遥拝所 四社の左林中にあり石を積み前に鳥居を建る日月星の拝所なり

鉦鼓舞臺 巽御門の前右の傍にあり例年四月十五日御祭礼の節鉦鼓舞臺の西にあり

宝庫文庫 西御門の前にあり

西座番所 西座社家の結所なり

手水所 西御門の前にあり

祇園社 素盞嗚尊を祭る　御橋の東詰にあり

神楽所 西御門の前右の傍にあり

抜所 天児屋根命を祭る

玉置権現遥拝所 祇園社と並ぶ玉置権現の社ハ當所より五里許北方和州吉野郡玉置山にあり本宮の摂社なり

笈掛石 聖徳院御宮二宝院御門主神前にあり例年正五九月祭礼ありて遠近より聖護院御宮御修法を伺ひ笈どうけ置石なりと云ふ

本宮結所 巽御門の前右の傍にあり本宮の社家結所なり

本宮御橋 来清道音無川に架す高欄凝宝珠づくりにて結構厳重なり

凝宝珠鎮石 奉建立 紀州熊野本宮橋 擅那

源中納言頼宣卿 奉行水野出雲守重央 干時天和庚申歳十月吉辰

大鳥居 御橋の西詰にあり此所より下馬所にて標石あり

禁殺生織悪の禁札あり

抑當社ハ人皇十代崇神天皇の十五年の創建にて帝都より四十七里高野より音無川の流れに副て北辺の大社なり東西横へ二町許越へ

南北堅くして二町河岸の浮洲ハ其形亀甲のごとし故に亀甲山と号く又東方ハ青山高く旋也是を七越の峰といふ廻廊ハ六十間四足門二方に秀で牡丹の彫ものゝ美を尽せり南門の前に流きて大河あり参詣の男女船に乗て新宮に至る 歩行七里半 船路九里八丁 難所にして遥ありといへども水有とれハ一時の間に至る水渇しても二時許にハ越べき事なし

熊野 諸 社家勘文曰熊野ハ伊弉冊尊事解男神又ハ速玉男神なり惣て末社二百十五社御社領千石也ちし先代旧事本紀曰天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊兒天香語山命此命御祖天孫尊に随ひ天より紀伊國熊野村に降坐ト云し盤余彦尊時侍臣と為る異妹穂屋姫命妻となり一男を生む天村雲命と曰ふ

按に熊野権現ハ諸書に載る事區々にして極らズ日本紀扶桑略記帝王編年類聚國史水鏡朝野群載巡禮紀古事談社家記録等に出らり其中に五衰殿の事ハ附會の雑説あり都て二山ともに各十二所を以て天神七代地神五代の神を祭る故に日本第一宮と号く是神道の秘する所あり慨かれ

華をぐしれ又是恐れあれバ略しぬ 霊験記

又本宮と称する事ハ人皇十二代景行天皇の駿宇此音無川の末海岸の入江に臨んで新宮を造営ありしより此を以て本宮と称し奉まつり

往昔帝御幸の事ハ平城天皇清和天皇宇多天皇花山法皇白川上皇堀川院鳥羽法皇後白河上皇後鳥羽上皇土御門上皇亀山上皇ホ 年月委しくハ名勝略誌に出 しかして就中後白河法皇ハ三十四度詣でさせのごとし将治承年間にハ小松内府重盛元暦のころにハ三位惟盛其余代々の公武崇敬浅からズ尚霊験掲焉なるハ挙て数ふるに遑あらズ今に至つて聖護院御宮二乙寶院御門跡御参詣ましまして関るといふ実に日本第一の霊地といふべし

例祭四月十五日五歳以前の小児神前におゐて田植の学びあり夫後御神楽を奏し神輿を渡し奉る且神事法楽の能あり

熊野にまうでさせ給ひける時

続後撰 世をてらしかげしるべる熊野山南の峯に澄る月かげ 鳥羽院

熊野の御幸二十二度の時御おとて思しめしたけさせ給ひ候

玉葉

思ふ事に雲は都を隔つとも思ひ入しは三熊野の月　後白河院

御かへしかんるゝに詫宜とさせ給ひける

同

志ばしもいゝ思ひ入しは雲を出る月

熊野のお宮やはて後としのうちに遷宮

たゞりしにまつりかひく

熊野界記

契ありければ嶮しきかけにおひぬ思ふ神も仍来乃雲　後鳥羽院

ける人多の深めるを熊野にまうでゝ入れ給ひ候しかれば志しかしく久しくこゝろ候ふとこゝろみて御おに恵候て

同

たゞこまぬ人こそ御らめ憂によりて神ぶに身をいひ捨ける

とよとてまどろみ給ひ候に西の御前の方より

人の夢にて志しめしめしける

同

志ばしまく怒こゝろとて思ひ出る人の果ハゆく手へを見候

傍更に住ける人熊野へ三年まうでんと願を立て来り給ひしかはいみじう苦し

かりければ今ニつさびといふにせんと歎きて御おにふしこゝろ後の義に

同

見をし程もたゝるに隔たりぬ思ひをあせに我も日手まじ

熊野に給ひける人の子にして病ひして日数重り候を親のおぼきに熊野に来られてさよし

新書を書き出るがら無りけるを年月経て七歳にて重く煩ひける時院宣ありけるに

同

詰ひけれいつかは夜に紀の函やむろ乃那もたゝるなまじも

尚此余奇瑞霊験許多ありしといへども事繁ければ畧之

懐中

手に振熊の文にあらざの義をかけしぬ千代のなりしにぞ打　定家

治承元年平判官康頼丹波少将成経法勝寺俊寛等相計つて平家を討べき

密謀露れ終に鬼界が島に流されしに康頼原来熊野権現を信じ奉るがゆへに千

本の卒都婆を造りて哥を記し都の母に見せしめんと権現に深く祈て西風の吹く

毎に八重の波に浮べけるが熊野新宮の漾に一本漂ひより又安藝の厳島にも一本着

なり此事叡聞に達し龍顔に御涙を浮めさせ給ひ是よりして飯洛の緒とはなりけるを

且康頼は兼て二十三度熊野系詣の宿願ありて十八度まで詣で今十五度を残せ

らば鬼界が嶋の岩殿といへる神社と熊野山に准らへ日毎に系詣しけるが少将も其意に

同じ倶に連立て歩を運び数飯洛を祈りける俊寛僧都は佛法に皈して此系詣には

随ひ遠て祈念の所作はなりしとぞ康頼成経はまでに十五度の願を満し一時の祝

詞を申けるが不思儀や尾上の風に誘はれて木の葉乱まで散りとれ両個の前に落ちたる

康頼成経
鬼界ヶ嶋ニ
熊野権現の
利益を蒙る

中に最怪しき葉二枚あり一ひら〳〵帰雁となり文字を蟲食ふり又一枚ハ二ふり文字を
喫食ふり二の木葉を取りなせて漾連ねバ帰雁二ひら二人ハ互に取り追ふつけ
ても飯雁二と有事ぞ心得ぐと二個ひしく流されて誰一個偏ごとやらん窘ふり但し
信心丞請の志権現つゝ御納受もやらんうれバ神明の御ちからぞ我等二人ハめし
返され俊寛もど残し置るべやらん又ゝ渡ぎるも安ど心もる也斯有し程に
又楢葉の廣ふりが何方ともく飛来つて康頼の膝の上ゝ留まりね取てれ哥く
よゝ拡神ゝ祈ゝの聖ゝきハもゝ
ゝゝ康頼成経の二人ハ思ひ定りて悦び又或夜神前ゝ終夜法施ゝ手向奉り
暁方ゝ康頼歌ゝ詠ひ其終ゝゝ足柄とうたふ
ふる夢の中ゝ海上ゝ見ゝゝゝバ沖の方ふり白帆ひかる小舟浪ゝひれて浦ゝ
ゝゝ見れバ紅ひの袴着ふる女房二人やゝ舩ふり出ゝて誠ゝ膝ゝ挟ふつ拍子ゝ
打て足柄ゝ哥ゝ合ゝゝ謡いふり諸の佛の願ふも千手の誓ハなのりや苔ふる木
草も忽ちゝ花咲実もるふゝ聞けゝこと人声ゝ一ゝゝ二返ゝゝ誦つ猶ゝ此女房

達舩ゝ乗んゝゝ汀の方ゝ下ふる女房も康頼も名残ゝ惜ゝ遥ゝ是ゝ見おくれバ女房立
ふつゝ人ゝの都ゝ頃ゝも近られバ名残ゝきふゝゝ未ゝゝふゝゝゝ水中ゝ入ふり夢
さゝて後是ゝ思ゝゝ所権現の御影向ふるゝんゝ二個いもゝ悦ゝ尚も信仰急ゝ日毎ゝ
祈願ゝゝふゝふ数漸ゝ重ゝゝ治美二年の秋六波羅維の使丹左衛門基安渡海ゝゝ康
頼成経二人赦免の御教書ゝ進ふるゝ二個余の嬉され夢の心地ぞやられる聽ゝ愛度ゝ
洛ふゝゝ俊寛僧都只一人島の巣守ゝ成果るゝ偏ゝ蛭野権現の御利生ふるゝゝ感
涙ゝ催ふるゝゝ

同二年五月小松内府重盛宿願ふりゝゝ権現ゝ祈誓ゝのゝ父清盛入道乃悪逆
無道ゝ歎ゝ深き祈願の旨趣ゝ告ゝ子眼前ゝ奇異の霊験ふゝゝ終ゝ其秋八月一日ふ
薨ゝの人事権現ゝ祈誓ゝの御利生の揭焉呵ゝ後ゝ元暦元年三位入道惟盛
當社ゝ参詣ゝゝゝゝ又重盛の命ゝ召ゝゝ後世ゝ助けゝゝゝ申ふれる事思ひ出ゝゝ斯有
音無里 本宮村ゝ

（参ゝハ源平盛衰記ゝ見ゝふ）

夫木　寄月述懐　秋風夜とともに身のびぬる人や夜おそき

同　憂き世にはいとゞ心ぞ澄まれぬる月は昔の秋ならねども

音無川

本宮の西、橋の下の流れ、水源本宮の庄三超山より出て三超村小森村を経て本宮へ出大峯川へ入

拾遺　寄月述懐　元輔

音無の川とも人をいふべしや我が通ひ路の跡だにもなし

金葉　恋　源盛清

郭公なきてもいふか音無の川とは水の名にこそありけれ

新古今　大納言行高

音無の川の水上しらねども言はで思ふぞわびしかりける

續拾遺　藤原忠資

音無の川の流れの絶えずのみ思ひ渡るぞ我が身なりける

夫木　後鳥羽院

音無の川とも人をいふべしや我が通ひ路の跡だにもなし

音無滝

上の滝、大山の上より中の滝、小森村より下の瀧、本宮村の北一町ばかりに有

詞花　中納言俊忠

音無の滝の水上たづぬれば言はで思ふぞ我が身なりける

續古今　為家

音無の滝の水上たづぬれば言はで思ふぞ我が身なりける

新拾遺　為家

音無の滝の水上たづぬれば言はで思ふぞ我が身なりける

續拾遺　能因法師

我が恋は音無の滝の水上を尋ぬる人に言はずもがな

土御門院

音無山

本宮の山をいふ

六帖　頭昭

寄月山時

音無の山時鳥いかなれば聞けども聞けどなほ恋ひらるらん

七超峯

本宮東門の出口より八丁許東の峯を云、昔役行者大峯を開かんとせしに、此地にて吉野より其の間を七十五靡の峯と云、此地にて七人の土人七つの峯を出す、是へうけ出の子なり、故に七超峯と云、當所長床坊其外明松を灯して御むかひ供奉す、善鬼村五鬼の徒御供一奉る云々

熊野へまいるにはまづこの峯の月を見そめ

山家　西行

音のごる月のいろかな雲消えて光ゆたかに澄める夜の月

大黒島

本宮村の前にあり、向ふの山の裾の岩組を云、大黒嶋の左に有岩組を立島と此所より龍燈上る云々

海神社

七超峯の東六七丁山の腰にあり、延喜式神名帳に出

今底海明神と云

已ケ淵

本宮の村の前をふかり音無川岩田川大峯川三流の落合にて已の字に故に号、此所より新宮への下り船出る舟路九里八丁両岸の勝景絶妙なり

笠川村

川合村ともいふ、向ふの山の裾の岩組を云、大黒嶋の左に有岩組を立島と此所より龍燈上る云々

高山村

本宮村の前にあり、向ふの山の裾の岩組を云、大黒嶋の左に有岩組を立島と此所より龍燈上る云々

胃神社

川合村ともいふ、本宮末社にて泉道寺命を祭る

網代淵

浮屠岩

三重石

衣巻石

北山川

水源吉野天川より出る、云々

此落合を蛇蟠と云

楊枝薬師

楊枝村の川ぞひに有医王山浄楽寺と云、昔京都三十三間堂建立の折、楊枝の大木出し地にて其枝を以作る所の薬師仏なりと云々

左 御本明神社 和気村山の半腹に祭神菊理姫命本宮より四里川下之本宮の末社にて後白河法皇御幸の時此所より神詠の御告ありき義を登下に書り
右 雲島山 志古村より揚枝村の小口川雲島山より流を出る
志古山 向ふの山
再出
山家 すべて此あたりの山渓さそ地ならん小口川の流れ
右 達摩岩 右 萬歳谷 左 銚子口瀧 田長村の内 左 蛇蟠之瀧 布引の滝、対ス
右 布曳瀑 銚子の口の北にあり 此辺右にある山神君山の後面に
左 飛雪之瀧 蛇蟠の滝の北丁ばかり川下にあり
右 白見之滝 布引の滝の北丁許川下に有
左 畫島 浅里村の瀬川の中にあり 下之瀧 畳島の北一川下にあり
右 爐岩 右 膽石 右 鐘岩 左 鳥谷之瀧 下の滝より二丁許川下にあり
左 御船島 川中にあり 牛鬼社 御舟島より二丁許川下 左 掬島 川の中にあり山の半腹にあり
新宮 舟着 右順路にあれども巴が淵の舟場の因みにて舟路の次第をかゝず出ス

低語橋 音無川を渡せる橋なり此橋にて音無川吉野川會流して新宮の海に出る
熊野川 音無川吉野川岩田川會流ス 此橋にて他國の橋なる事を知べし名所記に見えたり
大峯川 和州吉野郡より流を出る本宮の後をめぐれて音無川と會流ス吉野川とも云
岩田川 湯峯より流れ出本宮の町に入此流を橋ありて岩田橋と云
湯の峯にいたるまで此川の岸を登るなり名所と出せる岩田川ハ別にありて此川ハあらず

本宮の街 音無川の西岸にて工家商屋擔を列ぬ交易す隊あり且社職御師の宅若干ありて國を定めて支配の社家夫々に旅宿を一宿せむ所謂伊勢ヶ御師ひとし 御坂千王寶印おも御師より出ス又町宿の類ハ橋より北に多し
至て繁昌の地もり備當地より田邊に出る両道ありて本宮の町鳥居の地より北に至まで伏拜發心門を経て二超嶺に出る行程凡二里半
又高野山より無果越を経て本宮に来る者ハ三軒茶屋より山北の道にきたる
又那智山より雲島坂を経て本宮に来る者ハ南の道より入り
湯峯より廻りて二超峠に出る者ハ本宮の町岩田橋の北詰より右に入て車嶺より
湯峯小至る行程凡て二里半ばかり両道ともに下り出ス
産田社 本宮より二丁北の方に有本宮の末社にて此地ハ伏拜に出る北の道に
三軒茶屋 大居村の内に茶屋二軒ありて昔し本宮より北五丁北に此所ハ若山街道に高野街道の追分にて無果越より来るものあり出る是より無果山の麓小鬼尾迄北五丁ばかり
伏拜王子社 本宮より一里北伏越より二超嶺に出る事 行程凡て二里半ばかり両道ともに下り出ス
御旅所 本宮より四丁北に有北の道に 扱所社 本宮より五丁北にあり
和泉式部舊跡 同街道の傍にありて和泉式部熊野に詣りし時此地に有て月の障りを歎きて

晴やらぬ身にうきまたなびきて月此濱とかぞ遥れ

かく詠て此ゆるに其頼の義此者に

風雅

なかるも茲にゆゞしき神あれば月の濱もあふかくるしき　ト神詠ありしと云傳へり

一説に伏拝といふは遥拝の地にして所とあり城州伏見南都の菅原の伏見あど皆伏拝の略語にして帝都の遥拝所ありといふ

水呑王子社　伏拝より北丁余街道の右傍にあり今社あし

三超川　三超村にあり街道の右の谷合を流る

音無川の水上あり

發心門古趾　三超村にあり伏拝より四丁許西の方に此山中杉の大木多し道の左傍に一株より幹三本にはなれて生立てる杉あり世人發心門の三本杉といふ是則旧趾にして

今ハ里の字となれりのみにて此地本宮の惣門にてありしとし

今ハ尚礎石多く存せり

南無房庵室古跡　王子社の北の方に庵主屋敷と字する地あり是則庵室の趾に

定家名月記曰　十五日午ノ時計着發心門宿南無房宅云云

此門柱始書詩一首門ノ巽ノ角ノ柱閑所也

惠日光前懺罪根　大悲道上發心門

南山月下結縁力　西刹雲中予旅魂

入雑さ沙法の門に帰今ようにおもふ

發心門王子社　街道の右にあり祭神饒速日尊ト云本宮の末社ノ

千載　時しらも神の掟をまもるぐて名を發心門に入ぬる　権中納言経房

猪鼻王子社　發心門より五丁許西にあり街道の左傍ノ

玉之瀧　猪の鼻王子より四丁許西に有音無の上の瀧もり道の右傍ノ

○以上北の街道也　○次に本宮より湯峯の街道を記ス

小塩山堂　本宮の西二丁許に有本尊阿弥陀薬師の両像を安ス　真名井　小塩井も小塩山の下にあり社家の神人役を勤るの始も此に於て

瀬織津姫社　本宮より四丁許西に有　月見岡神社　本宮より未の方十五丁ばかりに有今神二本ありて社ヒ

車嶺　湯峯街道より右の傍に車塚ありて小祠あり傳云往昔小栗判官助重異病にかゝりて本宮より湯峯へ湯治に行と聞ゆるの路にて此所にて車をすてゝ歩行と修ゆゑに名つくと

小栗判官カ石　湯峯の此方二十許手前にあり小栗助重病平復の後カ墓と云今尚存ス

不時稲　右カ石の下の方田圃の中にあり小栗判官助重異病にかゝりて本宮より湯峯へ湯治に行と聞ゆるの路にて此所にて車をすてゝ歩行と修ゆゑに名つくと

髪を結ひ其ころべと捨しを是より自然と根を生し実のるゆゑ号くと云ふ車塚カ石と云ひ此稲の故事ハ正しく後人の妄説なるべし小栗の事実も尚詳ならず

一遍上人名号石　湯峯川の橋の向ひにあり凡一丈余の磐石なり其上に名号を刻ス事実詳ならず

石面に勒して曰

奉法樂

名号の上に梵字三有

熊野三所権現十万本卒都婆并百万遍念佛書寫畢

南無阿弥陀佛

高廿凡一丈　巾六尺余　文字之間長廿六尺許

乃至法界衆成所願也　正平七年八月十五日　勧進　佛子敬白

一遍上人ハ豫州住人河野七郎通廣の次男ニて出家して敵討ニ登りて受戒し一旦西山の善恵上人ニ遇て本願念佛の法門ニ入其後十一年ヲ経て名を知真房と改め熊野ニ詣て本宮證誠殿ニ百日参籠の内ニ或夜の夢ニ老翁忽然ニ来ル告て曰一切衆生ニ六字の名号を以て称名を聴聞する時ハ則ち佛種ニもるゝ宜く是を教化ニすべしと則七言四句の偈を授て曰

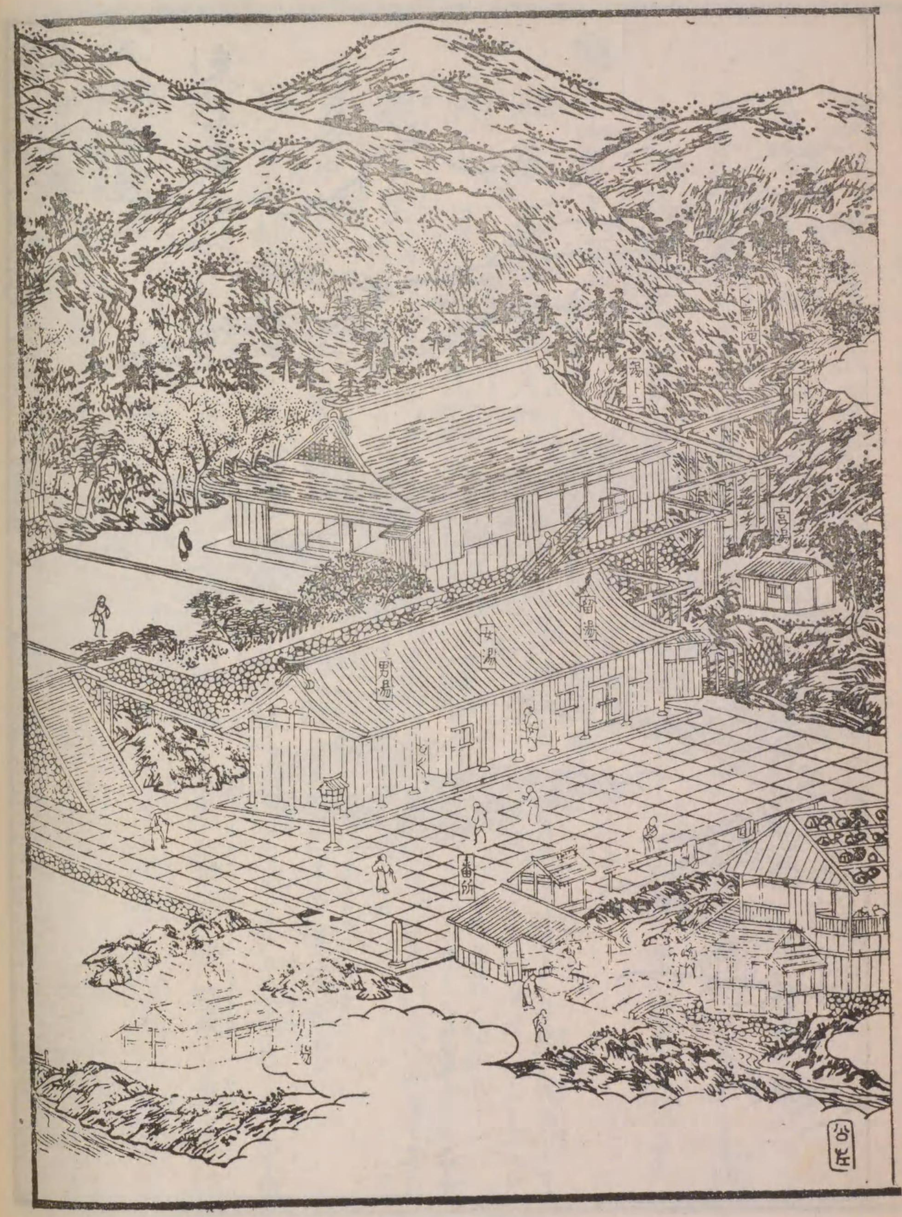
六字名號一遍法　十界依正一遍體　萬行離念一遍證　人中上上妙好花

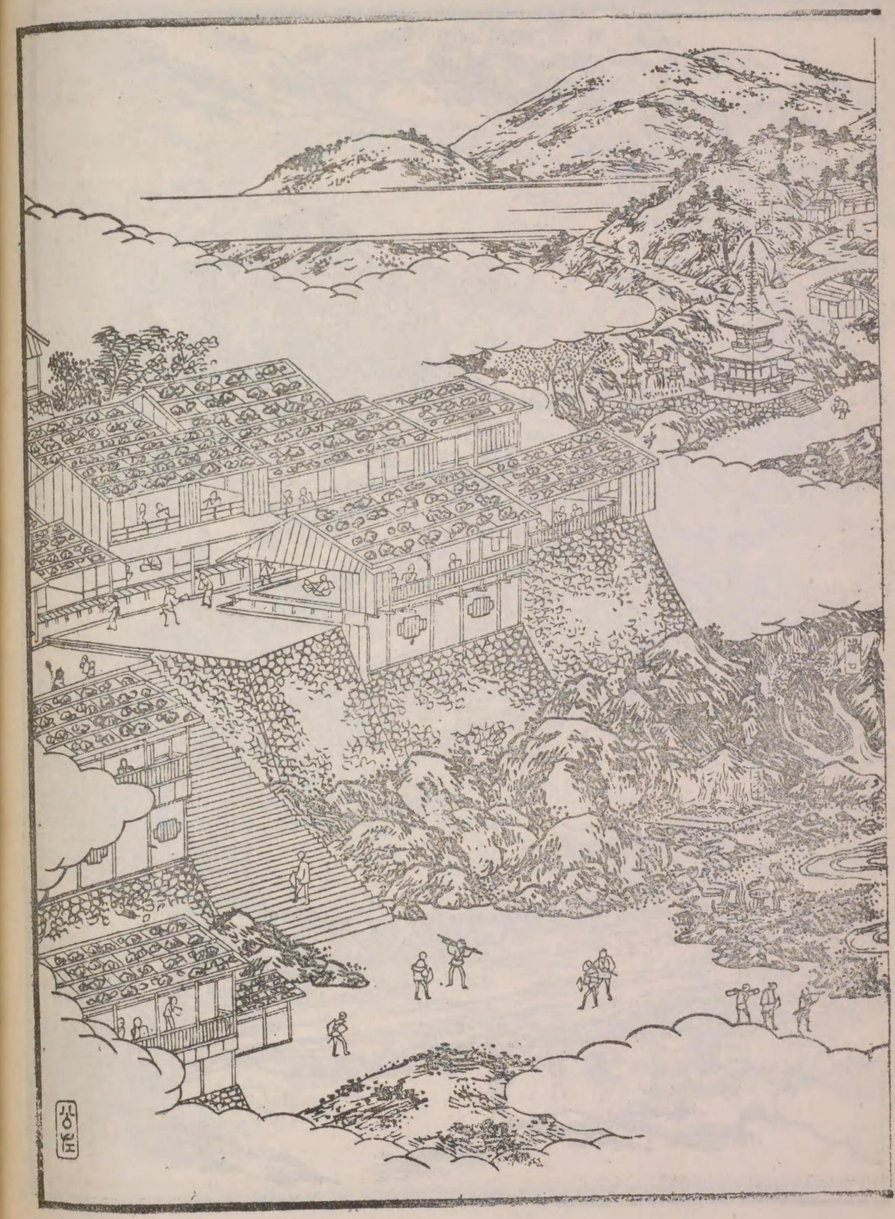
時ニ夢覚て其偈を書ニ上の字當ニ二十万人と成べし是ニより名を一遍上人と改め弟子ニ俗阿弥陀佛と名付て随身せしめ西濱東奥都鄙遠近廻國して老若男女ニ普く此偈を授つゝ

相州藤沢に至り一宇の道場を草創に後摂州兵庫観音堂に於て正應二年八月廿
三日年五十一にして終る（イニ五十）藤沢寺縁起大意 又後醍醐天皇正中元年遊行上人第四世藤沢寺を
再興にト云 按ニ此名号石ハ正平廿年とあるハ宗祖一遍上人正應二年滅期より凡七十七年後
これハ彼藤沢再興の四世の上人なるべし又五世にもあるべし土俗元祖一遍上人とハ非るべし

藥王山東光寺

湯峯にあり開山役行者ト云無本寺にして真言宗之
例年正月八日會式正五九月本尊開帳あり
本尊 藥師瑠璃光如来 總長七尺余座像長五尺温泉の湯花にて自然と成所といふ
胸の辺に穴あり此所より温泉涌出せしとぞ故ニ尊像ハ地上よりのべけ
脇士 日光月光十二神将 弘法大師作 湯峯王子社 本堂の左にあり
祭神大己貴命少彦名命
観音堂 本堂の前右の方下の段にあり正面観世音左右地蔵尊多門天の両像を安ハ
弘法大師作ト云 又不動明王を安ハ覚鍰上人の作ト聞也
多寶塔 川の西岸にあり本尊釈迦佛並ニ文珠普賢を安ハ春日の作ト云
内陣四面の板壁にハ六祖大師の像を図ハ傳云飛驒内匠の造る所也とぞ
抑當山ハ往古役優婆塞小角の開闢なりといへども堂塔の開基ハ久遠にして詳なるべし
且温泉涌出の始ハ神代より有て扶桑第一の温泉とぞ本尊藥師如来の尊像ハ沫
餑凝て自ら其形を現ハ所にして世に双びなれ霊佛之當時の本堂宝塔ハ後鳥羽院乃
御建立と聞也什宝にハ平相國清盛書寫の菩薩戒羯磨文一巻 紺紙金銀の泥一行で交書 湯花

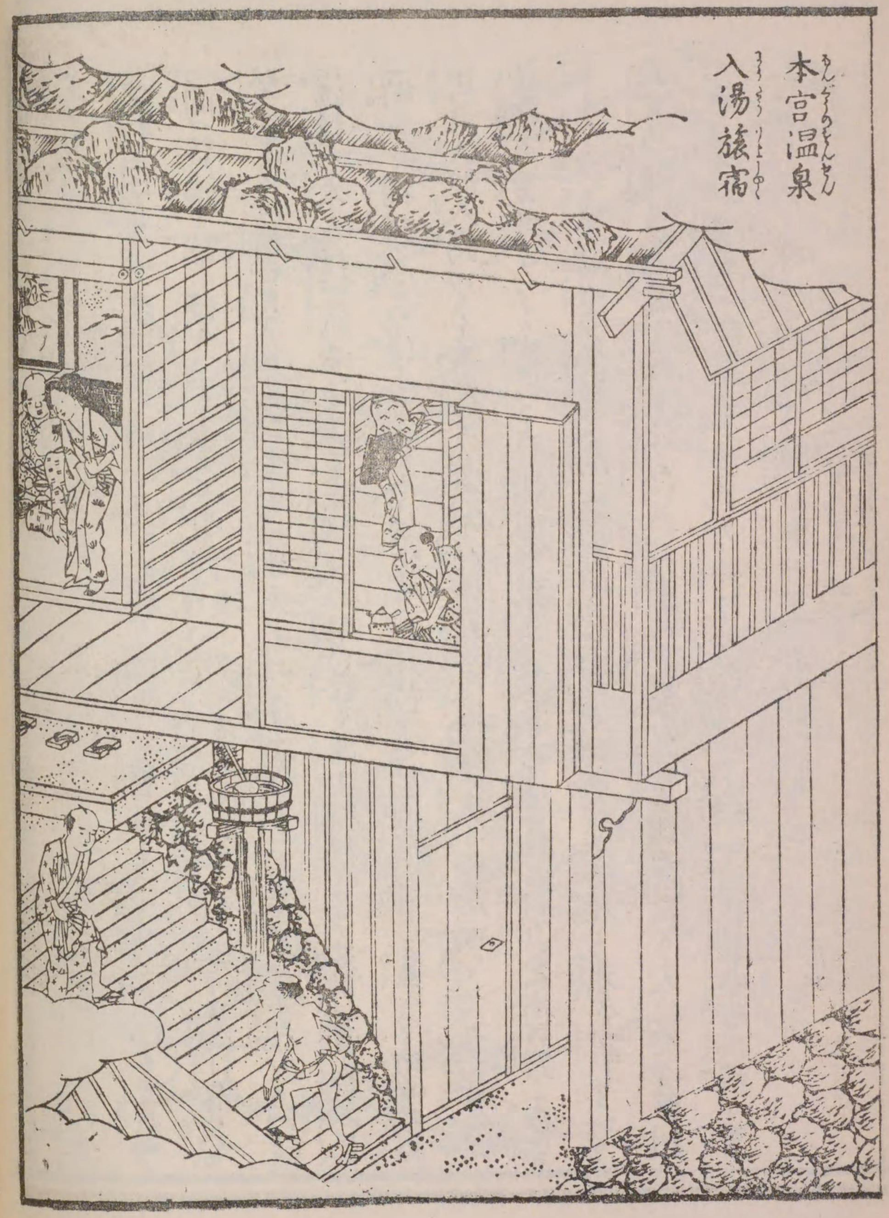


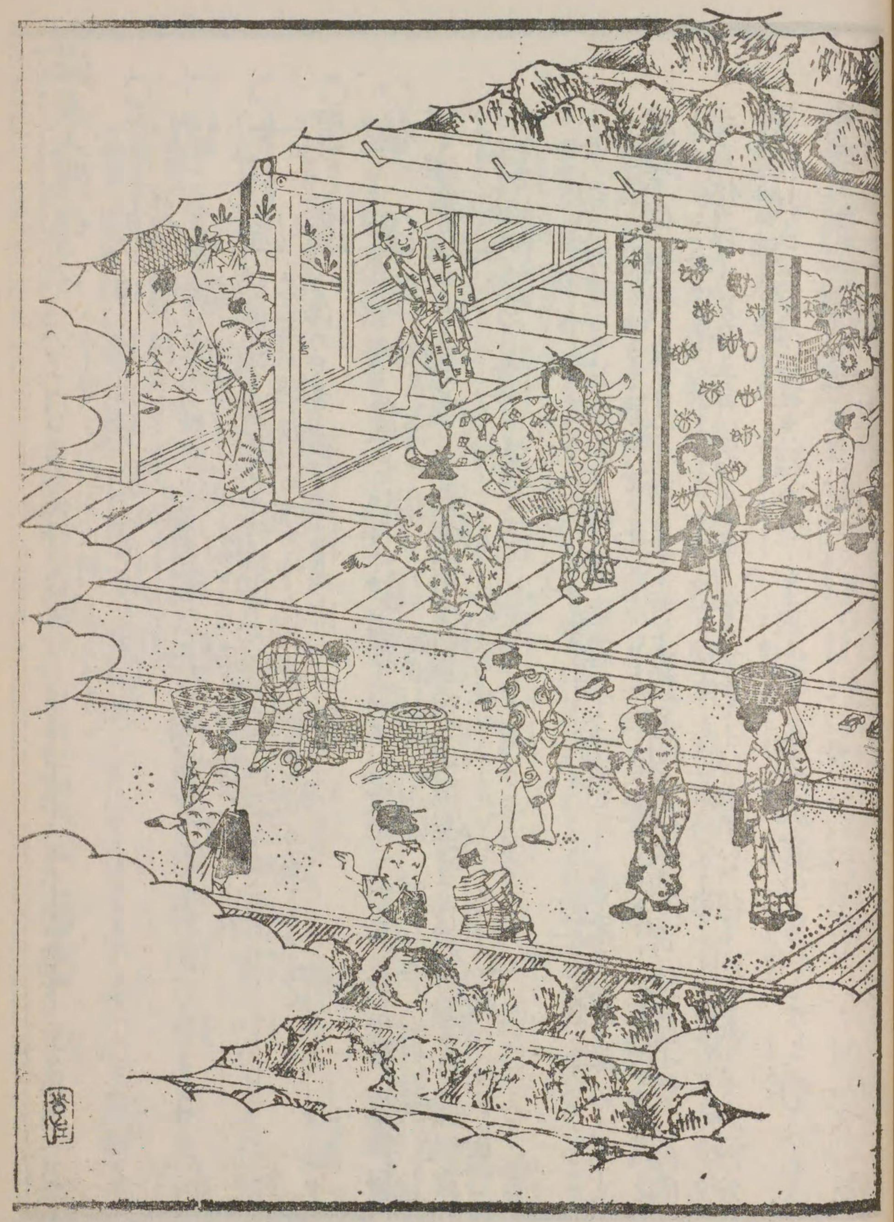


石の花器其余書画の類若干蔵に備又温泉入浴の湯殿といふは凡折行九間余
梁行二間余の堂造りにして内にて是を二構に隔て口を男湯といひ次を女湯と云奥の
一間は留湯と称し猥に浴する事を免さず（傳て是を小栗判官の浴せし所と云故に小ぐりの湯とも号せり）常に鎖して出入を
堅くせり湯槽の大さは凡長一丈余横巾九尺許にして深さ二尺余あり湯は規をもつて
湯槽の天より傳下はるゝ落来る温泉の勢ひ恰も瀑に彷彿たり其外貴人此入浴
所は別に補理て宮の湯と号ひ又川の辺りには桶湯といひて居風呂を並ぶるあり橋の
辺りには非人湯ありて貴賤老若心に任ひ艱生の客屋は大小の居間を許多かまへて
遠近の男女をあつて宿にされば諸國の艱生客終日入湯に往返ありて街の賑ひ言
ばかりなし或は時候の食類を高く男小間物を鬻ぐ女なんど客屋に来て進むるあり
此方の一間には書籍を読む老人あれば彼方の座敷には絃を彈若徒あり又は謡浄留利
小哥碁将基雙六拳なんど思ひくの嗜ありて入湯の閑暇を慰む其上萬端に事
を闕ひ四時とも小豊饒にして幽谷に無双繁花の勝地なり

入湯旅宿　湯峯川の両岸に有凡十六軒ばかり
いづれも座敷奇麗にして客のもてなし叮嚀也

本宮温泉
入湯旅宿





温泉入湯場入口

○宮之湯　東光寺僧坊の左の谷間にいう貴人の入湯一ヶ所ありて平人浴をゆるさず

○留湯　往古小栗の湯一ヶ所本堂石階の下左の傍湯屋の奥にいう

○女之湯　留湯と湯槽の置所同じ右二ヶ所の湯ハ僧坊の後の山より湧出る温泉を導きて湯槽に入る

○男之湯　女湯の口より内の構右に同じ

○桶湯　橋の詰にいう食（此二ヶ所の湯ハ川中より湧出る温泉を導きて造りたる浴槽なり）

不動瀧　僧坊の後にいう此流を汲て温泉の滝と視る

川岸にいう居風呂と視て温泉と傳ふ

小栗判官助重當山の温泉に浴し異病忽地に平愈す一事未正説と聞ゆ

當地の傳説及び普く人口に膾炙する所小栗系圖云桓武天皇の後裔小栗次郎重八代の孫小栗孫五郎滿重の一子を初名を小次郎と云ふ後に判官代と号し鎌倉管領持氏公の為に遂を後入道して東山殿に屬す虎賁の勇將たり文明十八年八月十六日卒ス又照天姫（或曰照姫ハ清和天皇の後裔佐竹信濃守昌義十代の孫佐竹常陸

守萬光の女もろともに

小栗實記巻之十

永享六年の春の始つかた小栗判官助重その心地例ならず先立つ望ある身なれば医療祈禱さまざまに照姫が言に及ばず水戸小四郎為國も心を尽し看病を色んども若為異疾や次第々々に悪症もなり始の程は大勢にておもてれ讒言と云ひ甚だしく在りし者共悉く邪熱退くと覚しきより日ごとに瘦衰へ耳聾て手足なえ終に瘭瘡と生じ癩病の如く両眼ともに塞がれば昔と変る形容まことに佛家にいう餓鬼の形勢もさながら斯ぞ見えける其頃人の言りけるハ紀州熊野某宮の温泉にりやうある難病も此湯に浴すれば健やかに平復するとの噂なれば照姫も心付くままに判官を彼温泉に入れんと思ひたち女の身の才覚と叶ひがたけれど結髪国結村の長にて照姫の幼事を語て懇に頼もれしが鎌倉の聞へを恐るゝや又ハ判長と乳母侍従の所縁もあり官の形勢類い希なる異病なれバ俗に餓鬼病と言ひて忌きらひ誰ひとり伴ひ行んという人もなければ如何ともせんかたなく唯その幸ひハ悪瘡にして昔の判官助

小栗親子権現の霊夢と蒙る

重と見知人も紀ぞ仕合もれと一箇の車を拵へ判官を抱さの世照姫と大六今年七ツ
母子の人が綱を引き諸人の情を頼そろぐひもから熊野山へと思ひさら頃しも皆月
昔ひそれとも憂年月住もし美濃國を立出て一方ならぬ哀れさも夫迄とかそ
思ひしら〳〵佛神の護念や道中恙ろ日を重ひ旅ふひ山坂の難所と未だ纔
大六その足とり介損じ歩くかねバ照姫も心細く何方と湯峯と尋ん人も見へざれど
いふ所と車とせ判官の病苦浅免角熊野権現の神力とそくのて一心と祈願をやらー
もりまふ折ふ湯峯への登山と覚へ僧従侶ひまふ見へて打通りやひまふ原
来人倫もれもる山路とて此人ふ逢めんバ照姫親子ハ冥途とそ佛と逢へ心地へく彼
僧の衣手とをふり見の如く遠國へふ入湯のふる病人と伴ひ連ふ参し旅人
湯峯ついふ多り候ふへん御僧の恵ふふ教さへふひふて尋ひれバ湯の
人ふて座まふ先此方ふ薬王山東光寺と号ふる寺ひり本尊薬師如来そ
則ち湯の泡沫を用ひて作り立ふる御佛もれバ先ふ此寺へ参籠ひりて本尊ふ
祈誓して其後湯本ふ至らんとぜ

急がれる照姫親子ハ此教と便ふて又りや車を引出へ心ふづく東光寺ひ
薬師如来ふ願をひけ夫ひり直ふ湯の峯ふ車を返へ引ふふ大六ハふ〳〵足弱ふふえ
則ふの山路をたどりふひ最勞気ふ見へふる照姫も為方なく本の所ふ車とふめ
親子ふふふく憩まれへ長途の労れふ親ふふも草と敷褥ふ引もれ照姫ハ扨の
許へ白髪の老翁ひふれひ告の人ハ善哉く照姫汝女身へて斯る大儀と思
立ふるふく山川ともへて夫の為へ心身を尽へ事比類もれ負節ひり忝くも熊野権
現汝が丹誠を納受ひり夫が病難と救ひ得させんふる吾権現の使者へて神慮の
趣き告るひり早へ車の綱を引夫を入湯せふ判官が積善の余慶へふく
病苦頓へ快然せんて疑ひ臣但時刺抜さバ障碍へん一刺ハ時も急ぐべ
又其児ハ権現の加護へれバホーもふ気遣ふ事もれと言ふ声のふ耳へ残ふ有へ形ハ
忽ちへ神隠へて失ひへ照姫ふふし起上ひ夢ふ現ふ有難やへ最ふ信心勝へ鉾ひ
此上何とふ疑んへ同ひへ手の法輪車も早本復ふの神託へ重ひふ憂を忘れへ覚へ
女の力も念力へふ岩上松が根もんどの嬉ひふく難ひふく峯迫へて急ぐ湯へふれ

抱き入心の内に熊野權現神託ありやうの事も一心不乱に祈誓ありて神力擁護の上に薬師善逝のかしこき有しうを一度入湯の験にて周身の瘡ろ〳〵痂と結び二三度に及び早ろ〳〵と落て漸く昔の面影と覚ゆるやうに成しが夫より手足も些づゝ自由をもえ出し尚引つゞいて入湯さへ無りしハ耳も聞こえ言語もわけ聞りれバ照姫親子八此世に七人の再び蘇生の心地して偏に神力佛力の奇特と感じ居のうち数日数一廻り七日満れバ両眼くらく明らかに開き五體全く具足して昔小栗ぬ小栗判官助重の盛りの身となりしとの事思ひ遣らるゝも余りありて湯壺ハ遥の峯にうつして東光寺にうつしたが後世温泉涌出の口もかろう且繁栄にもなりぬ又往来の通行にも今の道しるべに異ありてぞ

播州湯之三熊野社湯ごりの湧れさへ掉乃もろひろがりてうたゝ

草根

熊野路やもるゝ中にも湧る湯の峯うすむす山風　正徹

河湯温泉　湯の峯より半里余奥にうつりて

此温泉ハ山河の流れの底より湧出する故に河湯とうよ何れも河原の石と等うて

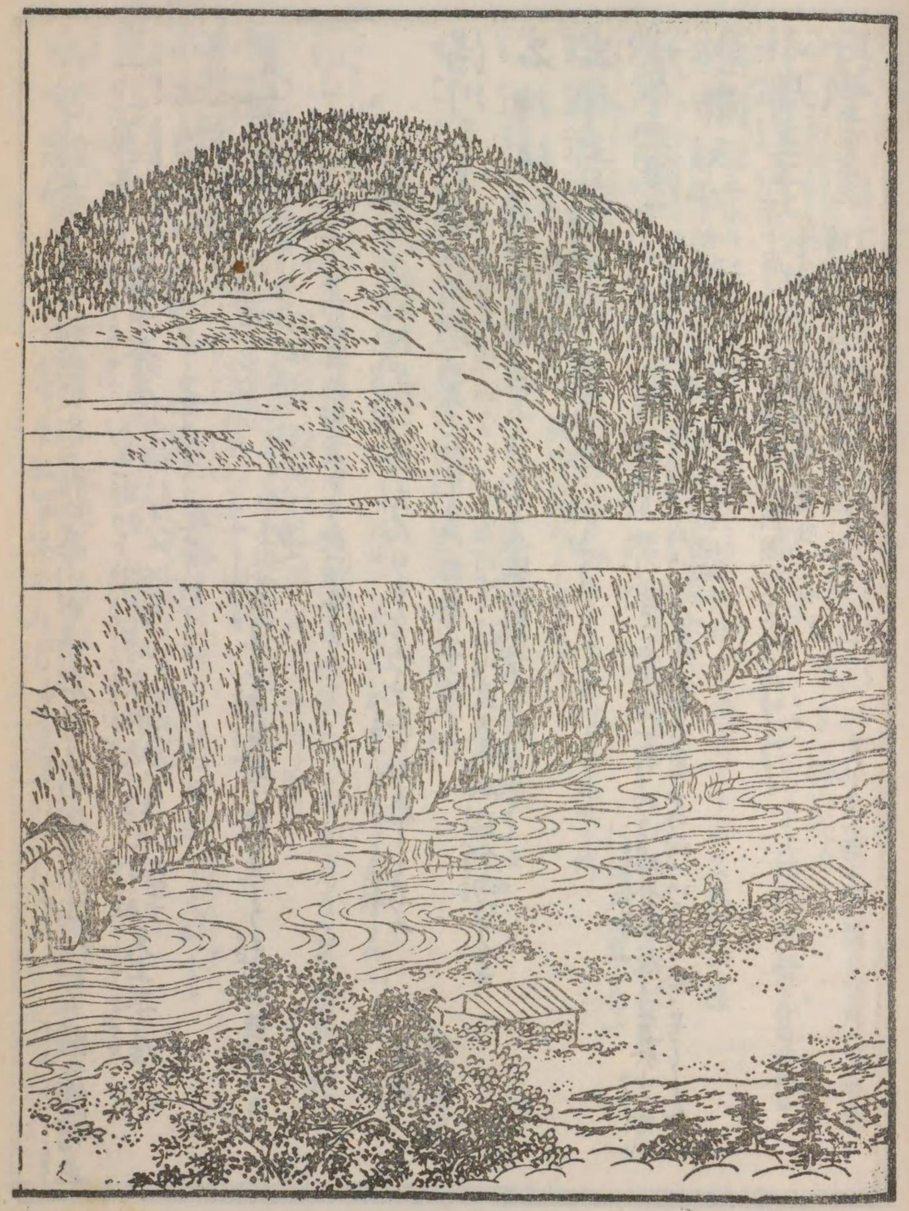
湯壷ハ凡四五ヶ所ありて右流水ハ冷る故に水多く交れバ温るゝ又水嵩増る時ハ湯壷水中に埋りて其所を失ふ事ありて常にうつり然るにバ又水減して後石を取のけ穿ちて湯壷を造る再興をなしうつし容易に一奇しらべ此辺ハ水底に凡て温泉ゆ火脈ありと見えて流れの水も湯気立ちて昨日の湯の功能ハ痲疾消渇疥癬其余冷一切の子もなき婦人ハ必ず姙娠をうつし本宮の湯に入浴の者難生の日数満て後留湯して此所に来て一廻り或ハ二廻りうつり入湯もるを例にて但し容屋にうつる者別にもうけず只農家をたのうて滞留するにうつり土地いとゝ絶景にて村中に薬師堂一宇にうつり此地ハ湯峯にうつり熊野に至るまでうつる湯峯に似る幽谷にうつり且釜川にうつの道にうつるみち

豊後國硫黄洋の海辺別府村に温泉にうつり潮盈る時ハ湯海中にうつる又能登の海中にうつり信州諏訪湖の中にも温湯にうつ和漢三才図会

皆地檜笠檜籃　湯峯にうつ一里余奥にうつりうつぎにも檜を応て編うつものそれバ此河湯の温泉も是よの類もうべし

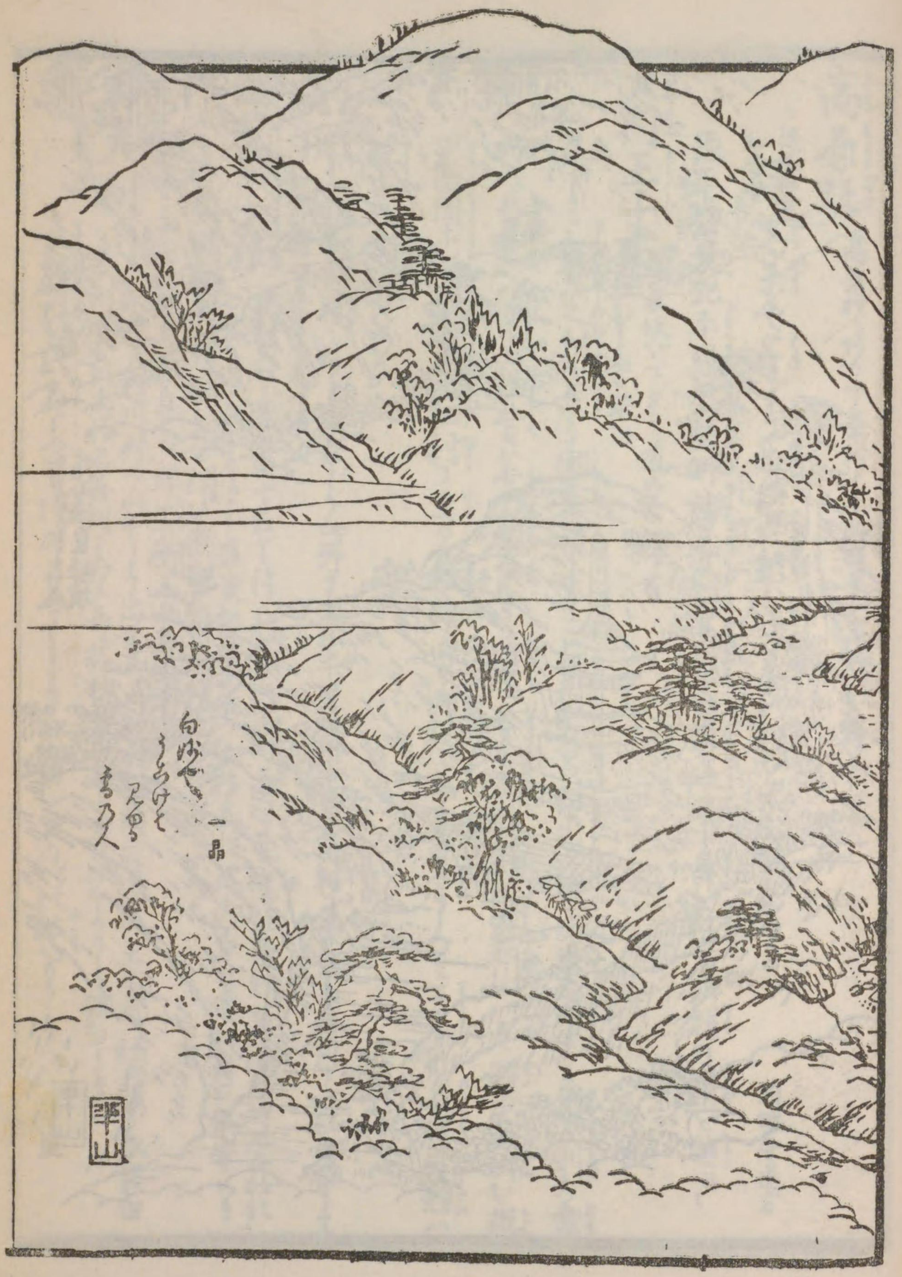
按檜ハ以て笠と作て出れバ多く本宮湯本おうて商人是をうつち檜の薄く応ると以て編うる竜もうつ予先年ものれと換して持てうつ

河湯温泉
永嵐法師
湯本道
平山



○湯峯より見越嶺へ出る八湯峯川の傍名号石の碑より山径より頗る難所也
湯峯より柿原茶屋 人家一軒あり 鋼荒峠 赤木坂を経て 行程凡二十丁許
人家一軒あるのみ 上より云来る凡二十丁許にて
再出 見越ノ峠へ出る 或ハ越嶺とも書す 天上茶屋
見越嶺 此所より北の街道の旅人と出會ス
中宮寂仲実熊野へ参詣の時この嶺にて
家集 雲のいろ二越岩神もしるらんわれもそこなる人とかたれと
湯川王子社 湯川村にあり 二越とも此所より八丁許
道の右傍にあり ○當村中に湯川直春の未裔今尚あり 俊頼
湯川より一里許岩上峠へ入通名男坂と云
岩神坂 上下五十丁難所
岩神王子 同所の右の傍にあり 今ハ社もなし
岩上坂を下り此所に川あり 此川岸に茶屋一軒あり 媒介茶屋と云 是ハ岩神と
媒介茶屋 男坂とかの向ふに熊瀬坂とあり 是を女坂とも男女の間にあるをもて俗に号くるなり
熊瀬坂 俗に女坂とも云 上下四十五丁 嶮岨峻嶺多く
小廣王子 小廣峠の道の右傍にあり 熊瀬坂を下りて此峠に至る
今ハ社もなく標石を立て其址を存ス
野中村の領内街道の右にあり
紅葉ケ丘

中河王子 野中村の領内坂の内にあり街道の左傍に今ハ社なし
接攖王子社 同村道の右傍にあり當村の生土神にして若一王子と称ス 例祭九月廿九日
接攖 右王子の社の石階の前道の左にあり大樹あり傳云ふ〻の名木かれて後
先君の命にて山桜を植しと俗に秀衡桜と云
比曽原王子 同道の右にあり 手枕松 同坂の左傍に有 ○伏拝より當村まで
行程凡四里十丁許
近露王子社 近露村道の右傍にあり野中より當村まで凡廿丁許
社前に芝あり頗宮の跡のよし言伝ふ
近露王子則宿近露郷に云
憲淳僧正熊野山入堂記に云
路多九品超二界 河濯煩塵除業障
峯つゞけたる山のみち〳〵
花山法皇経塚 右同村近露川を越拇嶺の往還左の上の方にあり 石の宝塔を建
道の傍に標石ありて花山院宝経塔と彫ス
相坂王子社 御幸記に大坂本の王子と云 相坂峠 拇峠とも 近露より
相坂峠 峯屋一軒有 十条山領 すぐで山径にて
重照王子 十条峠の左大内川村にあり
永命山慈恩寺 街道より右同村にあり禅宗なり 墓洋あり 此地まで凡二里許十丁峠とも
出沢山中に草鞋をのこしあれば古跡なるべし 永く不亡寺と叙書に見えたり


白沙で
うらけて
見ゆる
春乃人
一晶
平山

男坂女坂
媒茶屋

高原坂

高原村ゝ有り十条村より此所まで凡四十丁許

滝尻王子和哥會

高原や峯より出る月新ハ子峯孔相をてらしたるなり　因幡守通方

源平盛衰記平維盛熊野詣之條ニ高原の峯吹風ニ身を任せ二超の嶺を越云々

大門王子

高原坂を下りて道の左傍ニ有

今社なし古跡之

是より二番芝村ニ至り潮見嶺より二栖村万呂村ホを経て田辺の城下ニ出る則ち當時の本道之然るに往昔ハ當高原より左ニ入て真砂村ニ出鮎川一之瀬岩田川を越岩田岡ホを過て下二栖村ニ至て秋津より田辺ニ入るゝ是によつて王子の名所の類ハ往古の街道になり

芝川

二番芝村ニ有り高原より此所まで凡半里此川下ハ岩田村ニいたつて岩田川といひ富田にて富田川と号し末ハ海ニ入之

瀧尻王子社

芝村入口より左へ十二丁許入いりくの街道之平維盛熊野糸詣の時當社において通夜しのへし盛衰記ニ見へたり又後鳥羽院御幸の時和哥の御會なり

傳云奥州藤原秀衡妻を伴ひ熊野山ニ糸詣の砌ひの所ニおいて

男子出生ハ則ち和泉二郎忠衡といきるゝとぞ

石夫利川

水源大内川村の山中より出て石夫利村を経て滝尻王子の社前にて岩田川ニ合ひ土俗石舟川といふ哥抗抄云石舟と書て石ふりと續なりとぞ

夫本

二熊野社石ふりの川のもやくより取ひとしたる社なり　忠盛

石田愛渓云石夫利村ハりしを石ノ訛より雨を舟の字にて石舟と書るもの頃ろ又雨を石と書て石舟と書ならん然るを遊行頃より又石夫利と書ならん或いはやがて石伏といふもいづれぞ

剣山 滝尻王子の東にあり芝村の中にそびえ左山の後に見ゆる往古此山に寺ありて玉剣ありしより剣山と号ならんぞ後世兵火にかかりて焼亡ぬと云

真砂庄司第宅跡 真砂村にあり今何家にもあらず只里俗の傳えて言のみ真砂庄司の其一説に清姫が父なりと云此所に清姫が水垢離をせしといふ池あり清姫白川の安珠に憑ミ終に蛇身となる事普く人口に膾炙せしも元享釈書にのせし所と大同小異ありと雖其事実詳ならず

鮎川王子社 真砂村のつづれ鮎川村にあり

念佛ヶ淵 鮎川村の東北の辺にあり相傳後鳥羽院熊野御幸の時頓宮より三丁ばかり西にあたる所にて昔白河法皇の御前身の髑髏此川の辺の柳の根に有しを御吊有し所と

御所瀬 鮎川の東北七丁許有縦一丁余横北向許有傳云昔後鳥羽院熊野御幸の時頓宮より三丁ばかり西にあたる所にて昔白河法皇の御前身の髑髏此川の辺の柳の根に有しを御吊有し所と

市ノ瀬王子社 鮎川のつづれ市の瀬村にあり昔熊野御幸の時頓宮此社地の中にありしと云

清水谷 市ノ瀬村の東二丁許にあり土人曰昔後鳥羽院熊野御幸の時御垢離場なりしと云

古戦場 市の瀬村の南の辺にあり東西十二三丁南北十丁許有今田地となる中古此所に於て仙石権兵衛尾藤甚右エ門杉若越後守寄来つて龍松山の城主山本主膳と相戦いこと年にして落去ぬと云

岩田王子社 岩田川の此方にあり

岩田川 川上ハ芝村にて芝川と云ふ今の街道と前に出たり所々水源ハ栗栖川の庄兵主村より出て芝三村又ぬ川と會流して一の瀬より岩田と出て岩田川と云ふ末ハ富田の浦と流れ出る古哥に出る所の岩田川是ぞ

続拾遺 岩田川深るみの淵もありぬべし袖もぬるとも

花山院

松が根の岩田の淵も深き緑

続千載 西行

みる度ぞ淵瀬さだめぬ岩田川

禹玄

同

おのづから神のめぐみや岩田川

権大僧都公順

拾遺愚草 淵一細を堰あげて

定家

岩田川岩代ぬまもむすぼほれ

後鳥羽院

源平盛衰記曰小松内大臣岩田川に着のひて夏の事なれば川の端も涼しかりけり

権亮少将以下公達二三人川の水に浴し戯れ給ふ

又曰二位中将(維盛)入道ハ日数経れば岩田川に着のひて一の瀬に垢離とかきこのひ我都に留め置し妻子の事露思い忘る隙もなければさこそ罪深くらめ一度も河と渡る者無始の罪業悉く滅するなれば今ハ愛執煩悩の垢もすゝぎぬらん

頼り氏卿

岩田川誓ひの船に棹さして流む我身も浮ばやるまし

熊野詣の時も又小松大臣の御

上りたまひに權現に祈申あとにする淨衣脱替べからず御感應ありしとて是より
重得て奉幣ありし事思ひ出めひても脆きは落涙ありけり
紀路名所記按本宮村にも岩田川ありしも名所にありしに御幸紀に岩田川を渡
一の瀬王子へ至り滝尻の宿へ入とあり平家物語にある岩田川も此所の川と見ゆるに

八上王子社

岩田よりつづいて岡村といふ所にあり當岡村より下二栖村に出る下二栖ハ今の街道之
下二栖ゆゑで十八丁ありこ栖の山も十二四丁西にあり
熊野へまいりけるにやかんの王子の名面ゆゑなれば社に書付ける

山家　待きつる八上社樣咲にけりあらしくおろすなこ栖社山のぜ　西行

○瀧尻王子より以下八上王子まで古の街道あり當時の往還ハ次に出し

覗橋

芝村とすぎて潮見峠の東麓にあり橋下の流を鍛冶屋川といふ谷川の巖たくましく
風景尤絶勝へ殊に東の川端に自然石に極楽の体想ありと言つたふれによりて往来の
旅客ゆゑにのぞき見る也に覗ぐしと号くとぞ
此川芝川と會流して岩田に出岩田川といひ富田川といひ終に海にいる

觀潮嶺

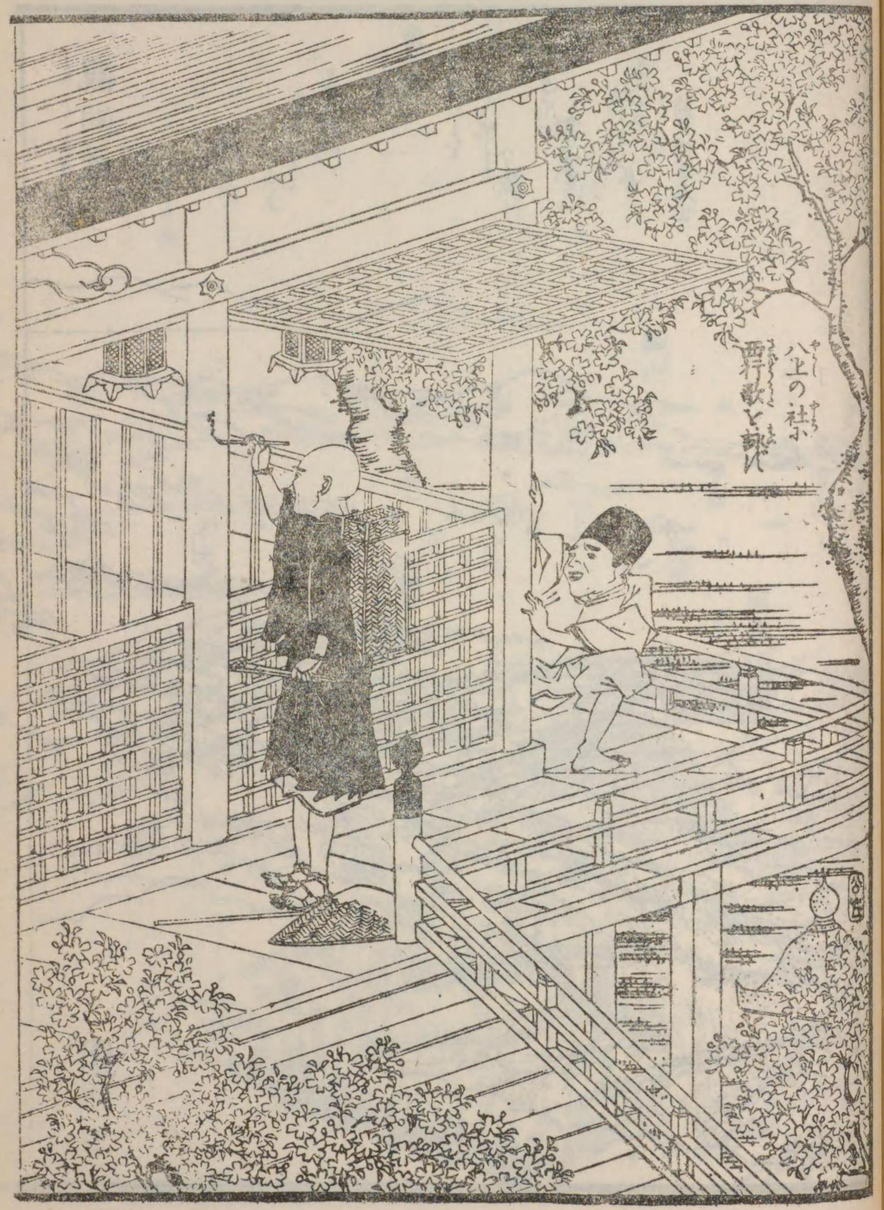
芝よりつづいて此地に至る間山路といへども平にして廣し左右桜躑躅ホ繁りて風景
あり峠に茶屋二軒あり凡那智山より大雲鳥坂かゝり第五十五丁目舟見茶屋にあいて
海上を遥に眺望するの後凡行程廿里許の間海潮を見ることなく往還の前後左右ともに連山峨々と
聳へ山とつゞく道せるにして頗る難所の坂路のことあり然るに漸く此地に来りてはじめて道の平なるを踏む既に
峠にいたりて西に向へ滄海淼漫として碧波天を涵し近くは湯崎瀬戸の端より眼下に田辺の城下一圓に
見へ見るべきて絶景言ばかりなしされば熊野の奥より出てはじめて海潮を見るを以て峠の名に称せしとて

中之峠

潮見峠三十丁上り夫より六丁下り
石の地蔵尊あり是を中ノ峠ト云景色にし

捻木嶺

中ノ峠より六丁下りて茶屋一軒有
是を云此所より上三栖へ一里余



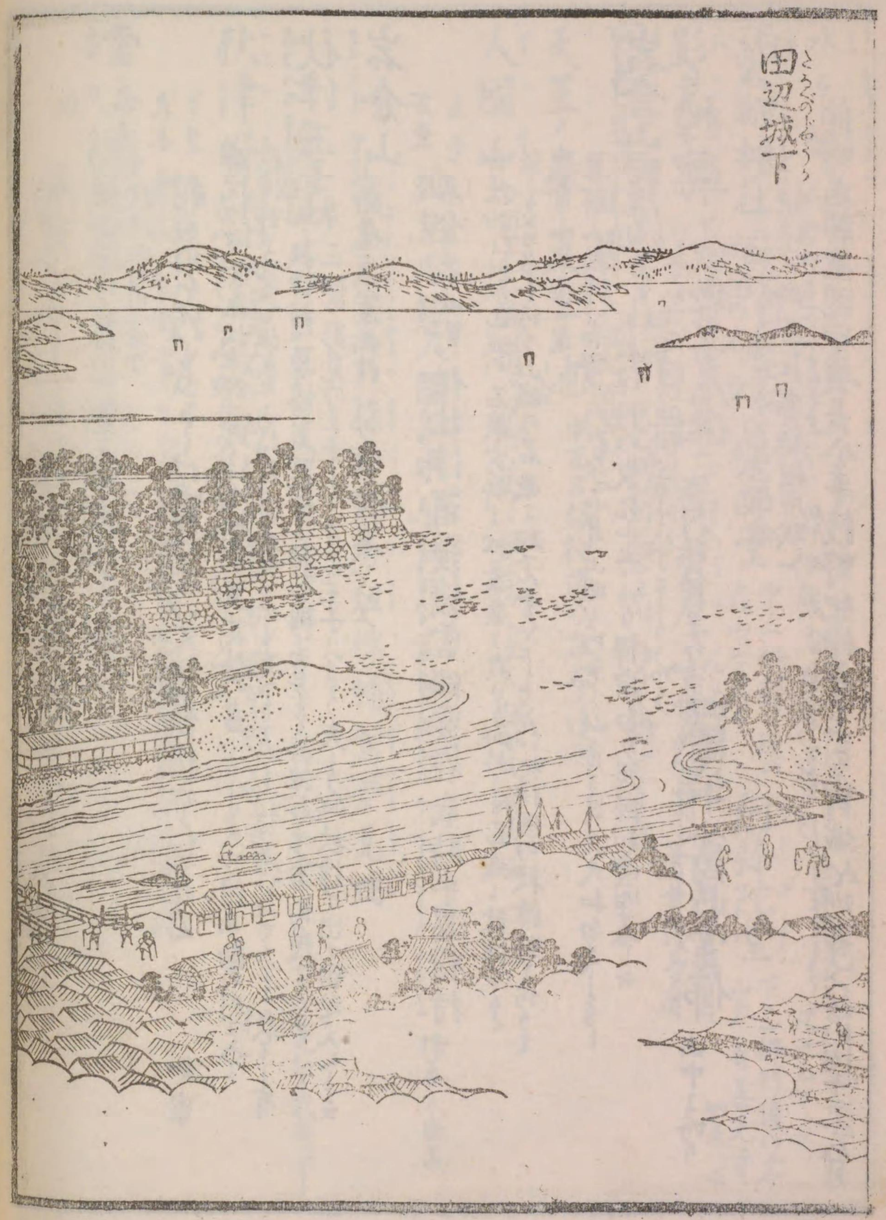
観潮嶺
續千載
前大納言為世
セト
田辺
高山寺

鉱山
立谷

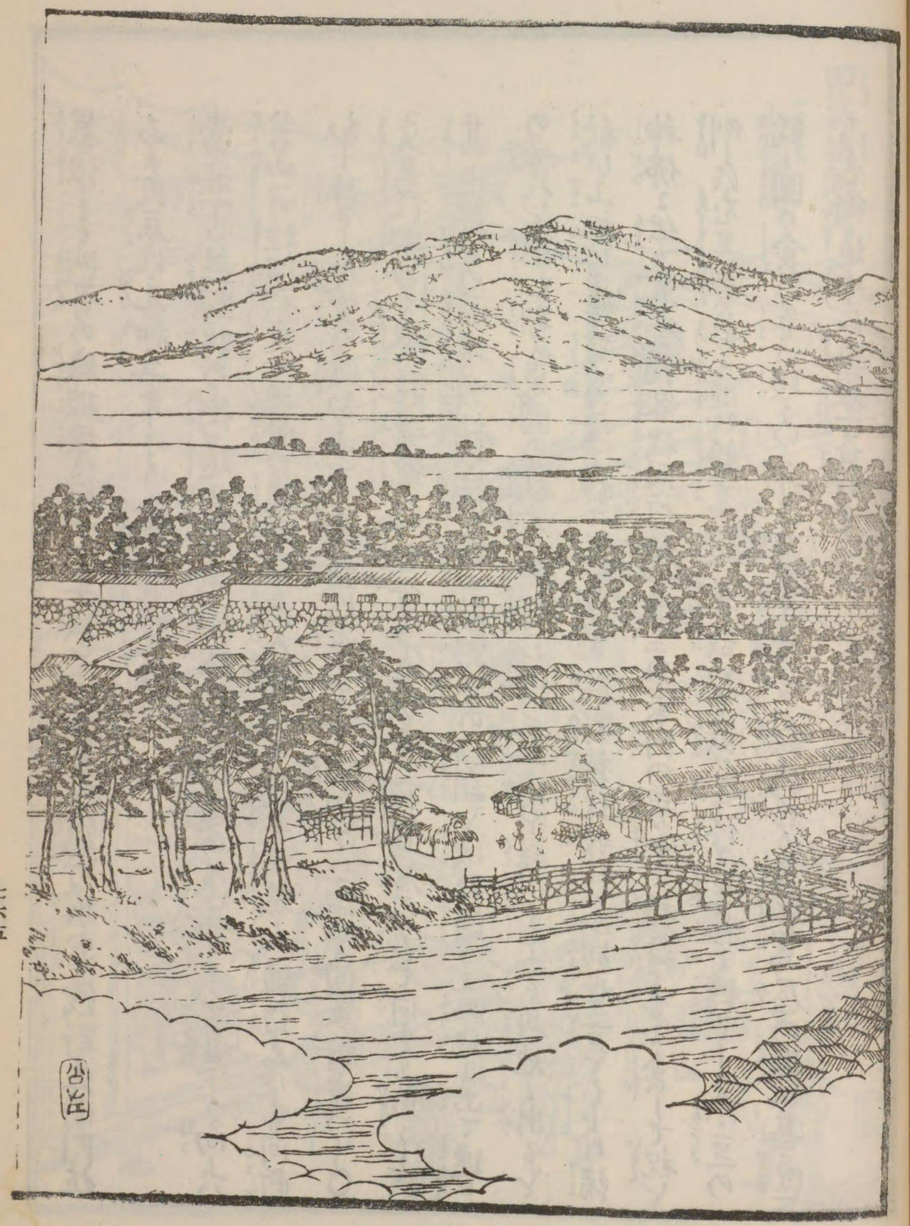
水ケ嶺　潮見峠ゟ一里許ニ有リ長尾村ゟ人道の左ニ大樹の松有　長尾坂　上ニ栖村ニ下ル
邦君御通行の時此松の下ニ御休息の御茶屋を建ラル　凡廿五丁ト云
一倉明神社　上ニ栖村の出端　藥師堂　中ニ栖村の道の
街道の右ニ有リ　右山上ニ有リ　阿弥陀堂　下ニ栖村道の右
影見王子　下ニ栖村街道の左凡ニ丁許入ル　山方ニ有善光寺
御幸記ニ栖の王子トアリ　如来ト云
万呂王子社　上ニ万呂村ニアリ下ニ栖村の出口ニ川アリテ橋ヲ架ス　岩屋山普門寺　下ニ栖村道の右
橋ゟ向ノ方万呂村ニ　五十余山の上ニ有
天王ノ森　天王ノ池　中万呂村往還の左右ニアリ
人國山　下万呂村街道の右ニ遠く見ユ土人誤テ人目山ト云
萬葉　雖見不飽人國山木葉已心名著念　柿本人麻呂
仝　常不人國山乃秋津野乃垣津幡鶯夢見鴨
秋津野　同村街道の右下秋津村の東の方ニ見ユル野ヲ云フ
右紀路哥枕抄ニ出ス　人国山の秋津野ト云ヘルハ大和ヲ云ヘルヲ是ヲ哉考ベシ
方八丁ゝゝの野ヲ云フ今田地トモ
万葉
秋津野ヲ人モかなへば満ヤ
仝
秋津野ニ居雲ヲ見ヌ日ハ
仝
秋津野ニ居雲ヲ見ヌ日ハ
萬葉ニ人ヲとリ人ニ秋ハ

右人國山ホヒゝゝ歌枕抄ニ出　又異解ニハ大和ヲ云ヘリ
雲ノ森　同街道の右の山の麓ニ雑木茂リ一森アリ
秋津野の内ニアリ
夫木
村雨のたちもとまらぬ雲ゐより秋の稍ゆくみねの松風　知家
哥枕抄云　雲ノ森秋津野の内ニアリ松葉集其外の書ニも大方国未勘の内ニ入テ
秋津野ニハ雲ヲ詠ミ来リされバ若ゝの名所ニも有ベきニあらず私の考ヲ以てアラ〳〵載ル
秋津王子社　秋津村ニアリ今若一王子ト称ス前ニ言ゝ如く此地ハ一ノ街道ニて
岩倉山　三栖の影見の王子ニアリ万呂王子ニ対ス
万葉　街道の右下秋津村の東山の峯ヲ云フ
石倉之小野従秋津雨發渡雲西裳在哉時乎思将待
哥枕抄ニ此歌山城の石蔵山の所ニ松葉集ニ載ル此外ニも石蔵ニ秋津ヲ
詠ル哥多クアリ山城の石蔵ヲ取テ人雲ヲよミ入れバ紀伊国の秋津野ニアリて
岩倉山ありべく哉
異解ニ秋津ハ吉野ニアリ今ノ名倉山城ニアリ此哥ニハ大和ありべシ云
下秋津村の東北山上ニアリ禅宗ニて絶照和尚開基ト云
岩倉山寶満寺　田辺ニアリ凡北ノ方十八丁ヲ云フ
本尊　釈迦牟尼佛　安阿弥の作ト云
田邊城　三栖村ニアリ城下まで凡二里余
紀伊公　御家臣　安藤殿居城ニ
紀伊名勝畫圖曰慶長八年浅野紀伊守上ル山の城ヲ州寄ヘ掃ル同十年八月

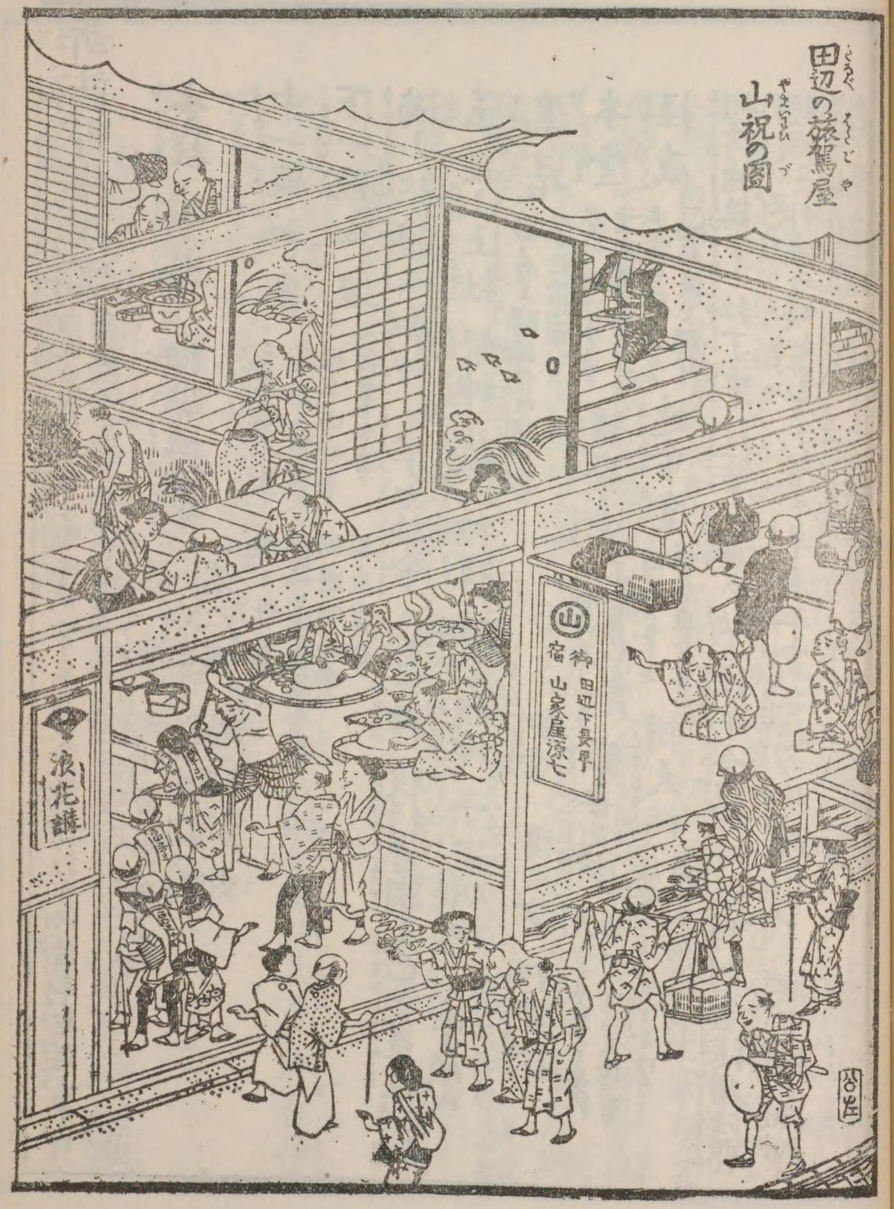
6
9



田辺城下



暴浪まく洲嵜の城破壊に同十一年城を湊に築に淺野家宰淺野左衛門佐
ありまに居に元和五年より當主居之ゆゑ
當城下ハ熊野路の街道大辺地中辺地の両道の落合にして是より向ふハ
若山への往還なれバ遍歴の道者旅商人武家方出家諸職人通行しバしも間断
なし殊さら便宜の湊なるゆゑに萬端に事たりて市街にハ工家商家軒ゆつゝ○
交易に暇なく繁花豊饒の一都會なりさまバ旅駕屋なんぞ何をも賤ならば
其上観音の灵場順礼の徒ハ遥々熊野路の嶮岨を凌ぎ漸々に此地に出て連日
の労れを憩む別て東國の旅人ハ熊野二山の霊場を拜し恙なく此地に出るを
歓び山祝ひとて旅駕屋に於て餅を搗き熊野権現那智山観世音をとゞめ諸
神佛に供ず其余相容我同行旅駕屋の家内の男女に振舞ともに食して祝を
例とし尤其製ハ好に随い雑煮なり善哉なり或ハ其侭に豆粉に轉ぜし又小豆の
餡に圓め食ハ春の頃にいたりて日毎に祝ひの餅搗なりて旅駕屋の賑ひ甚遇
ないを街道中に無双一奇なり



新熊野權現宮　田辺の町の東南二町許にあり當所の生土神なり勸請年紀詳ならず闘鶏宮と称ス例祭六月九日同九日

本社　中央　伊弉册尊　左一座　大比留貴尊

中一殿四座　天忍穂耳尊　瓊々杵尊　彦火々出見尊　鸕鷀草不葺合尊

下一殿四座　垣土山姫命　軻遇突知命　罔象女命　稚産霊命

満山社　護法善神　天手力雄命　八百万神　役行者祠　大己貴尊社　共ニ西ニ向ヒ闘鶏宮の額を掲ぐ

玉置山上社　祭神　蔵王権現　勝手明神　子守明神　二神を鎮ス山の方にあり

鳥居　本社ハ北面ス

本堂　本社に對ス本尊　護摩堂　本堂の左にあり不動尊を安ス　歓喜天堂　大聖天尊を安ス濯頂堂の左後にあり

経蔵　本堂の前にあり一切経巻を納む　延命堂　同右にあり地蔵尊を安ス　辨天祠　経蔵の右にあり

相傳闘鶏宮と称する事ハ往昔元暦の初め源平合戦の時熊野別當湛増法眼頼朝に味方の姻誓ありしを志と違ひ湛増一人背きしも後難ありし又今更に平家を捨んとも昔の好を忘れ源氏に味方して平家を亡ぼさんとて熊野三山金峰十津川の兵どもを率ひ若一王寺乃御正體と下し奉るを榊の枝に餝りそうけ旗の紋楯の面にハ金剛童子を画き兵船二百余艘と調へて紀伊國田部の濱より漕渡りて源氏に加る　源平盛衰記平家物語ホの大意

闘雞宮にハ号けしなり

右別當湛増の後裔ハ今尚此地に有て本願院と号ス則ち當社鳥居の外右の傍に小ぢんまりと且此寺院に武蔵坊辨慶の所持の武器を蔵ムト云

和漢三才圖會云時別當名湛曹武蔵坊辨慶之父也云々

又云湛曹那智別當教真之五男母ハ條判官為義之女也乃與義経親族設辨慶出仕義経軍労大而空ク死惜哉

似ん如何ぞ思ひ煩ひ呼詮人力の及ぶべきに非ス神明乃冥覧に任ンとて田部の新宮にて臨時の御神楽を始む神明巫女に託して曰く白鳩ハ白旗に付き湛増猶ホを信ぜず同く新宮の御前にて赤鶏白雞を見て一番も番ず逃ずハ此上ハ神慮に任せ奉らんとて熊野三山金峰十津川の兵どもを率ひ若一王寺乃御正體と下し奉るを榊の枝に餝りそうけ旗の紋楯の面にハ金剛童子を画き兵船二百余艘と調へて紀伊國田部の濱より漕渡りて源氏に加る　源平盛衰記平家物語ホの大意

闘雞宮にハ号けしなり

右別當湛増の後裔ハ今尚此地に有て本願院と号ス則ち當社鳥居の外右の傍に小ぢんまりと且此寺院に武蔵坊辨慶の所持の武器を蔵ムト云

和漢三才圖會云時別當名湛曹武蔵坊辨慶之父也云々

又云湛曹那智別當教真之五男母ハ條判官為義之女也乃與義経親族設辨慶出仕義経軍労大而空ク死惜哉

山川正宣云　按ニ熊野別當教真ノ妻ハ爲義ノ女鶴泉ノ女房ニテ其子五人本宮新宮那智岩田辺五ヶ所ニ分ち湛増ハ田辺ノ別當たりしハ勿論乍ラ又此人ノ源氏ニ屬せしと平家物語盛衰記ホゝ文治元年ノ事ともそれも亦いづれ其證ハ

百練抄ニ治承四年十月六日熊野別當湛増謀反ノ由宣下　玉海ニ八九月ニ日トいへバそう是ゟ先ニ武疑ハ九月ニ謀反ノ事ニて十月ニ追討ノ宣下ハしもあんず扨平家物語ホゝ雜合ニて志ハ源氏ニ由記せしも是も又遠シ　東鑒ニ元暦二年二月九日云云　元暦二年八月義経王既ニ渡阿波国熊野別當湛増爲ニ源氏ニ同渡之由今日風聞洛中ニかれバ改元文治平家屋島ニ在リ程あり是ホの説ニる時ハ治承の時ニそて謀反の名いふべし其時源氏ハいまだ朝敵あり夫ゟ此山の常住制ニかゝる後文治ニそのゝで両端の志ニいるべきも儀ニ催促ニ應ニハ

愚按ニ和漢三才圖會曰鶏闘権現　俗云新熊野勧請年紀未詳相傳昔源平合戦時試闘雌雄以白鶏爲源以色雞爲平則白者得勝曰當國武士通志於源家ニゟもれバ湛増の雜ニいへバせニ平家物語盛衰記ニ有當国武士の雜ニいへるハ殊ニ當社の別當もるゝ何ニゟそれニ泥そ書ゟる正ニ當國の武士ホ湛増ニ隨心せざるも有まさ屬ひもぐ両端の志ニいるも無ニもあらず是ホの人ゝ當社ニおゐて闘雞と號しもゝんされバ雞合の宮と称もるも故もなゝ又辨慶の説異傳まちまちニて決ニがたし

辨慶産湯井古跡　田辺の町松の下ニいり廿日清水の井ニいづ是ニうて其名ニしそ松と植ニ今盛木ニて大樹ニもる故所の字とおの下ゝ

和漢三才圖會云

辨慶大織冠十一代開白道隆公氏族熊野住侶辨正の一男ニり幼時雲播ニいり猶ゝ長ゝて法を叡山ニ学び而ゝて兵術を好ミ以そ悪僧ニもる是ニうて義経奥州ニ往ニ秀衡ニ平氏を亡ハの事を議リ二ハ波羅の形勢を窺ひん為ニ治承